
いちばんうしろの
大魔王
ACT11
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT11




するると、それに応えるかのように、新たな魔王は
恍惚として見えない空に向けて両手を広げた。
「これは……すごいね。見える。
みんなの記録が、わかる」


「その……うまく言えないけど」
阿九斗はけーなの髪に顔をうずめるようにして耳元に口を寄せた。
「う……うん」

いちばんうしろの大魔王
ACT 11

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
服部絢子
阿九斗に対する恋心は強まる一方の、純情なクラス委員長。阿九斗の発言に動揺を隠しきれない。
紗伊阿九斗
けーなの支配下に置かれることで何とか社会復帰。しかし彼の人生に平穏は訪れない……？
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓う黒魔術師にして薬物使い。真の黒魔術の再興を目指している。
曽我けーな
日本の現皇帝陛下。世界のカギを握る存在、なのだろうか？
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。勇者ブレイブという顔も持つ。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なっていたが、けーなの皇帝即位後はその御側係に。いたずら好き。



リリィ白石（しらいし）
小粋な帽子がトレードマークの生徒会長。喧嘩っ早く「小さい」と言われると切れてしまう。
大竹美智恵（おおたけみちえ）
蝙蝠の群れに変身できる生徒会副会長。語尾は「ありんす」
アルヌール
長身のリラダンにして生徒会書記。基本「ぐが」としか言わない。
神山（かみやま）カンナ
狼に変身する能力を持つ生徒会会計の神山カンナ。語尾は「ぎゃ」。
木多淑恵（きたよしえ）
魔王戦争の一因を作ってしまったが、阿九斗のことを気に入り、その後は協力する。今は何となく学院に居ついている。
けいす
初代魔王ゼロと共に仮想空間内にいた小柄なリラダンの少女。役目は無くなってしまったが、何となく淑恵の元に留まっている。

円卓に配置された、革張りの椅子は豪華な物で、テーブルは巨木の年輪をそのまま活かしたものだった。だが、机の周囲
といえば、壁にかかっている抽象画しかない。

窓から宮殿が見える帝都の中央でその円卓に集まっているのは、奇妙なメンバーだった。
数名はマスクのようなもので素顔を隠していたが、シルエットは確認出来る程度でそれだ。一方顔をさらし
ている残りの者は、誰もがかなり整った顔立ちをしていた。まるで見た目で引っ張った者だけを集めたかの
ようだ。

「蓬莱の国の玉の枝の封印が解かれたということは、世界中に散らばってしまっていた皇帝の血を引く者が、何人
国に集まってくるということだ。さて……」
一人の男が口を開いた。どこか嫌味さえ感じられる伊達男という形容がよく似合う男であった。名を倉橋賢人。
IMO8のメンバーであり、メンバーの中で最高峰の頭脳の能力を持った者。コードネーム「USD」。最高クラスの頭脳の能力を持ち主と噂される天才
もあり、メンバーとしては唯一の素性を隠していない存在でもある。
「……我々としては、それがどんな人物であれ、結局のところ、現在の帝国に味方するということで了承を取れた
いが」
賢人はメンバーを見回し、そう同意を求めた。

彼がこのメンバーの中で一番強い権限を持っていることは明らかだった。
しかし、その黒人の言葉に反駁する声があった。
「君はまた、すぐに結論を言うね。そもそもが無駄な口出しをしないものだ。そして、CIM08は、やはり個人主義者の集まりじゃあないかね」
その場の誰もが口を開いたようには見えなかった。だが、声は確かに聞こえてきた。
黒人の男性は臆することもなく、それに答える。
「不必要な会議であれ、我々の目的のためには出席せざるを得ない。そして、もちろん、我々の目的は、大和望一郎の望んだことだ。そして、それは……」
どこからともなく聞こえる声は、わかっている、とでも言いたげに、黒人の言うべき言葉を継いだ。
「……世界との共存、宥和する。それに失敗した場合は、戦いを用意する」
そして、その声は、さらに自身の考えを付け加えた。
「……私の理想が勝つ確率は高いかな」
「そう願いたいね」
黒人はそう冷たく言って、自分の足下に目をやった。
そこには一匹の大型犬がうずくまっていた。毛並みの長い犬である。目は垂れた耳と、長い体毛に埋もれてしまっていて、まるで見えない。動かなければ、まるで大きなモップの先端だ。
その犬は、けだるそうに首をあげ、黒人を見た。その大柄な体がもごもごと動

「だが、この私がそう言っているのだから、その性能が最高とは言えないかな？」

その年長の大人は、確かに年齢にあわせて動いていた。

賢者は、それを当然のことのように受け止め、古い友人に向かって苦笑を呈するかのように首を振った。

「いくら君が彼の友人だったからといって、そこまではわかるまい」

「たしかに私は、彼を把握しているわけではないからね」

少女は、彼に含みを持たせて言った。彼のコードネームは『ザワン』。世にも珍しい、しゃべる犬である。

だが、その正体は……。

「この世界で、君は人だけがあちらの人間なのだから、決して逃していないとは言わせないさ」

賢者は、やや不機嫌そうにも聞こえる冷静な声で言った。

ザワンは、犬だけに鼻面をむき出して、歯をむいた笑みを浮かべた。

「そういう考え方もあるだろうがね。とはいえ、私は彼の判断者よ」

二人の間に、数秒、緊張感に満ちた空気が流れる。

その雰囲気を破ったのは、一人の少女だった。

「賢者ザワンもさぁ、顔を突き合わせるとそれだよねぇ。で、つまり僕らどうすればいいってことなのさ？」

何気なく、その顔を脇へやり、首をかしげただけなのだが、数秒ほど妖艶な雰囲気が、その少女にはあった。賢者ザワンも、拍子抜けしたかのように、肩を落とす。

「啓（けい）。つまり、だ。私たちは一丸となって現在の世界平和を守ろうというわけだ」

賢人が諭（さと）すように言った。

啓と呼ばれた少女が顎（あご）に手を当てて目を上に向ける。

「ん、でもさぁ、本当にそれにふさわしいかどうかは僕が決めることじゃないし。あの魔王（まおう）だに味方するんでしょ？　それじゃ、僕、どっちかといえば世界に敵対しているんじゃないかなぁ」

「しかし、君だけが罪業の王の力を使える。そして、それによって目覚めた力が自我は不安定なんだよ。おそらは、それだけが世界の存在を認識する力なのだから」

「でも、それなら、世界を護っていいじゃない。どうせ僕がその力を利用するつもりなんでしょう？」

啓はすねたように椅子の背にのけぞり、頭の後ろで手を組んだ。

「その通りだが、時と場合によって使われる。だが、自我は力のみあればいい。そこに齟齬（そご）がある。つまり、世界の自我に道理を説いて、従ってもらわなくてはいけないんだ」

賢人の説明に、啓はまだ理解しがたいという顔をした。

「それじゃ、やっぱり駄目（だめ）なんじゃない？　あの魔王の言うこと聞く？」

「彼の性格を見る限りでは大丈夫（だいじょうぶ）だろう。彼は世界平和が崩壊（ほうかい）することを恐（おそ）れている。つまり、理屈が通るということだ。あるいは本人を人質（ひとじち）とれるとも言えるが、いずれも相互利益を守ることが基本になるだろう？」

「それなら、僕が彼に成り代わるって本末転倒になるのかな？」

啓は椅子の背にのけぞり、足をぶらぶらさせたまま閉口した。

「そいつは俺の台詞だから、避けるべきかとも思うな。君は我々の切り札だ。今後の行動についても私の言うことを良く聞いて、うかつなことをしないで欲しい」

男爵は、それまでとは微妙に違う口調でそう口にした。啓の言うことを気遣っている風でもあり、何か言葉[illegible]ある風でもある。

その言葉を聞いた啓は、椅子から元に戻して、身体を起こした。

「わかった。男爵がそう言うなら、そうなんだろうね」

「そういうことだよ、啓」

男爵は啓に笑いかける。と、啓は何か思い出したような顔になる。

「あ、そうだね。こういう場では、僕をコードネームで呼び合わなくちゃいけないんじゃなかったっけ？　僕を啓って呼んじゃ駄目よ、USD。なんか妖しい関係って思われちゃうじゃない。僕[illegible]のにさ」

啓はそう言って笑った。

男爵はなんとも言えぬ表情になる。

「先にコードネームを使わなかったのは君だよ、エスパー」

「そうだっけ？　プライベートと仕事はきちんと使い分けしてるつもりなんだけどなぁ。ねぇ、男爵」

啓は意味ありげな流し目で男爵の方を向いた。

「だから、そういうことはやめなさい。私たちが敵対関係と思われる」
女医が首を振ると、博士はさらに意味ありげな目を作った。
「そう思われたっていいじゃない。それにさ、お互い仲が良いってことは重要よねぇ。大体ザワンな
んて勇者の素質満点と思わない？　だって、他の組織に味方して、その人が世界の王位を手に入れちゃったら、その力を使
のは……ねぇ？」
他のメンバーを見渡す。
女医は咳払いをし、ザワンは声をあげて笑った。
「ははは！　君はエスパーのコードネーム通り、本当に超能力があるかのような言動をするのが玉に瑕
ね」
しかし博士は、にやりと笑い返した。
「僕は特別ンがいいもの。僕は世界のために働くんだ。そのためにはどんなことをしたって大丈夫、わ
え、ワン。勇者の家系なんて敵だからね」
それを聞いて、ザワンはわざとらしく、ぶるりと身体を震わせた。
「私はここしか居場所がないんだ。人類が滅びないように働くのみさ」
「まあ、そういう話はやめよう……」
女医が遮った。
「……どちらにせよ、これから人類は経験したことのない危機を迎えることになるのだからね」

１　老いも若きも集まれ！

岸辺(きし)老人は、その皺(しわ)の多い顔さらに深い苦労の皺を刻んだ。

彼は、結城乗次(ゆうきじょうじ)、近衛(このえ)家の大執事であり、寿命(じゅみょう)の長いこの世界にあって、最長老の一人に数えられる男である。

その彼さえも、はじめて目にするタイプの問題児の出現に辟易していた。

しかも、その当の人物は、当主の娘なのである。

「同じ卓を囲んでるんだから、仲良くすればいいじゃない。一緒(いっしょ)にごはんを食べれば、すぐに仲良くなれる

わ。そう、一列に並んで食べるの。同じペースで、箸(はし)を動かして。いち、に、いち、にって。ただ黙々と

に口に運べば、嫌(いや)なことなんて忘れられるわ」

当の本人の言にも無理があるほどに、無茶(むちゃ)なことを言っているのは、近衛家当主、曽我(そが)部の孫娘なのである。

「陛下」

老執事はそれでも声を荒(あら)げることなく、静かに、諭すように呼びかけた。

「なあに、おじいさま？」

「陛下、それは、食事会を開催(かいさい)しようということですか？」

「ううん。昼食だけを食べるの。お食事会なら、大体コース料理で食べるでしょう？　それじゃあ、仲良くなれないわ」

けなは目を輝かせ、妄想全開で答える。

辛辣な拷問を

「釜井けを、召し上がるのですか？　総称は、もしやもしやと？」

「そうだよ。なんて素敵なんでしょう！」

「僭越ながら……」

辛辣な拷問にあっている最中のような表情になった。

「……釜井けを食べて、仲良くなれることはないかと思われます。むしろ争いの原因になるかと」

「そっか」

けなは残念そうにそう言ったが、すぐに何かを思いついたように、ぽん、と手を叩いた。

「そうだ！　みんなで横に並んで眠れば……」

「陛下」

「なあに、おじいさま？」

「まことに僭越ながら、わたくしの説明を把握しておいでですか？」

「うん、大丈夫だよ。蓬莱の玉の枝の封印が解かれたから、その力に引かれて人たちが集まってくるんだよね？　それで、蓬莱の玉の枝っていうのは、さらに何かすごい力の封印を解くための鍵になってるから、気をつけろって……」

けなの説明は少々曖昧だったが、あまり要領を得ないものだった。しかし、実際それほど詳しく蓬莱の玉の枝について知っていたわけではない。

「伝説は、こうあります。『選ばれし者の王の杖の真の持ち主を選び、真の持ち主に〝無貌の〟力を甦らせ、人を導く……』」

未来が口にしたのは、日本刀に伝わる伝説だった。

伝説というのは、大抵があまり表に知られていない部分で生まれる。だが、日本刀に限ってはそうではなかった。この国で、魔術の研究を務める者の間、世界でも、西洋の魔術結社の間で継承されていた。つまり伝説は迷信などではなく、日本刀は何かの理由で秘匿された技術が基にあり、それが流出し、噂話が伝説となった、と考えるべきであった。

「むぼーのちからって、何？」

「顔のない、力という意味になります。何の用途に使うか決まっていない、力という程度と思われますな」

未来が解説した。

「でも、それが何のかわからなくてもいいんでしょう？　まずは、日本刀の血を引く者がいっぱい相るのが問題って聞いたけど……？」

けーながそう問題を口にする。

未来はうなずいてマナスクリーンに地図を表示した。日本国内にある場所、伝説が大きく伸びた範囲が赤く塗られている。その内容を指し示して、淡々と声で説明をはじめる。

「日本刀の血を引く者というのは、不死のような者の場合を除き、過去の権力闘争に敗れた者という意味があります。つまり、何かの復讐心を抱いてやってくる場合が多いわけです。たとえば、この地域などは、おそらく血を引く者がいると思われますが、この地域が封鎖されている理由は大変なものがありまして……」

そう未来が言いかけた時、若い警備の者が慌てて部屋に飛び込んできた。

「コンスタン王宮魔術師団長殿……！」

「陛下の御前であるぞ。慌てて飛び込むなど……」

大臣がたしなめると、若い魔術師は居住まいを正した。

「失礼いたしました。コンスタン王宮魔術師団長です。陛下……」

若い魔術師は、そう言いかけたが、気をつけをしたまま言葉を失う。

「どうした。途中で言葉を止めるなど失礼な。いくら今の陛下がお優しいとはいえ、綱紀がゆるみすぎておるぞ」

大臣が説教をはじめようとするが、若い魔術師は首を横に振った。

「失礼ですが陛下はその……」

「なんじゃ？　また人の話を遮って……！」

「いえ、その……」

若い魔術師は、怒る大臣に遠慮しつつも、その方向を指差した。

「陛下が、またお逃げになりました」

「何？」

大臣が振り向くと、そこには、さっきまで国王が身に着けていた服が、床に脱ぎ散らかされていた。もちろん、下着まで含めて。

「……歴代の国王陛下で、ここまで苦労させられた陛下は、後にも先にも……」

さめざめと妹が泣き、若い騎士は困ったように肩をすくめて、とりあえず、というように報告を続けた。

「コンスタン魔法学院の敷地が突如発生した結界に覆われました。おそらくアッフの結界術魔法と思われますが、あそこまでの広さの結界術によるマナの制御が必要であり、大規模な攻撃が行われているものと……」

その報告に、妹ははっとして顔をあげた。

「それこそが、かの地の者の仕業ですぞ……！」

そう言って、けなのいた方向が、すぐにの合同訓練した騎士ばかばかしさに気づいて、若い騎士は振り返った。

「いや……そうじゃ。すぐに魔法学院へ連絡を。これこそがマーライの一族の侵攻に違いないと！」

○

『コンスタン魔法学院』の校舎……いや、さらにその外側の敷地外に、生徒たちは追い出されていた、改めこの魔法学院の

あった際の陣地となった小高い丘に、教師や生徒たちが立ち尽くしていた。

「アッフの結界術魔法なのは間違いないから、謎ってわけじゃないんだけど」

そうつぶやいたのは、鳥井美津子先生である。

「結界魔法の促進の魔術なのはそうなんですよねぇ……」

先生の横では、学校の研究施設で解析作業に集中して籠っていた大多淑恵がいたのだが、彼女はそう言って、目にかけてい

た分析機能付きのゴーグルを手でひょいと持ち上げて、手の甲で目をこすった。

「でもあれだけの規模になるとどんくらいエネルギーを消費したのやら想像したくないとい

か……」

彼女たちの視線の向こうには、緑に包まれた校舎があった。いや、そんな情緒ある景観ではなかった。建物

にジャングルに沈んでいた。背の高い木々が校舎に寄り添い、すべての窓から枝やツタがあふれ出ている。

これではまるで、密林に覆われて数千年が経過した古代の街の遺跡だ。

アップ付与。その結果、農業系生徒に特化した恩恵を与える。これは、その恩恵を受けた生徒たちが食糧の確保のため

に使用者の周囲の植物を、マナを取り込めるように改良された植物は、通常の何倍もの速度で地中から水や養分を吸い上げて成長することができ

る

しかし、その成長が早ければ早いほど、そして、扱う植物の個数が多ければ多いほど、マナの制御が難しくなる

のは当然。そして、今回のケースは少し規模が大きすぎる。難易度が高いと言うよりは、ほとんど人間には不可能なレベルだ

「やっぱり外部の誰かがやったのかしら……？　でも潜入があったような形跡はどこにもなか

ったわよね」

美佳先生は腕を組む。

「だとしたら、それこそ魔法クラスの力ってことになっちゃうよねぇ」

彼は思う。そう言って、近くに立っていた紗阿久斗が方を見やった。

それに気づいた九内は、ひょいと肩をすくめた。
「まいったな。どうあっても、穏やかにはすまないよね」
他の生徒たちの注目が九内に集まる。
それは当然といえば当然だった。いや、この学院で起こるトラブルの半分は九内がらみだ。特に今回のケースは、奇妙さ
でも群を抜いている。一夜にして学院をジャングルに沈めたのだから。
九内の事情はまるでわからないが、やはりなんらかの原因で九内が関係あることなのだろうと疑っていた。
いや、疑っているというよりは、半ばそう確信し、あきらめてもいた。さすがにこうも騒動が頻
れてくると、自分は関係ないと主張して後で嫌な思いをするよりも、積極的に関わってやるのがストレスが
ていいとすら思っていた。
「ともかく、僕が調べてきますよ。少女が危険なのは間違いないでしょうし」
普通の者なら躊躇するところだろうが、九内は散歩でも行くように校舎に向かって歩きはじめた。
「この異常事態で身の危険を少しも感じていないなんて、頼もしいですわ……」
九内の熱狂的な信者の一人、うっとりとそう言ったのは、江藤不二子である。九内の個人的信奉者としても、さすがにこれは
ひいき目がすぎた。近くにいた服部絢子が、さすがに微妙な顔でそれに突っ込む。
「頼もしいと言うより、会長は、桁が違う理解を超えているような……。普通、あんな異常事態に平然と歩いてはいけませ
んが……」
しかし、不二子はそれを鼻で笑った。

「ふん、それなら、素直(すなお)に[illegible]前からお消えになればよろしくってよ。ついていけないという

のなら、あの人を好きだなどと告白しなければよろしい」

「なっ……」

綺羅だって、先の『[illegible]』で、成り行きとはいえ、人前で告白してしまい、さらにはストレートな

トレートな答えまで受け取ってしまっている。思い出すだに叫(さけ)んで逃げ出(だ)したくなるような出来事

「し……しかし、あれは、あいつが自分のことを好きだということで、それには深い意味はない、わけ

で……」

しどろもどろになる綺羅。平子は勝(か)ち誇(ほこ)る。

「まったく、困りますわ。わたくしたちは最後まであの男の女としてそれぞれ[illegible]なければなりま

せんのに」

「お……女！」

「ふん、まったく自覚がない。そもそも、あなたのように面白がった喧嘩(けんか)しか能のない人は、[illegible]ついて

いくのが務めでしょうに」

その平子の言葉に、綺羅は真剣(しんけん)に悩(なや)みはじめる。

「う……。た、確かについて行くべきだったかもしれん……。でも、この場合はむしろ彼(かれ)の[illegible]と

いになるような……いや、それではいかんのか。強くならねば……」

そこに、手を叩いて割って入ったのは、[illegible]だった。

「ほらほら。馬鹿なことやってない。行くのは解散組だけでいいの。今回はいままでのこととは違って、本校の
トラブルなんだから。先生の言うことには従ってもらいますよ。危ないんだから。行ってもらうの
は彼だけ。他の生徒会役員たちから情報を聞いてアドバイスしてあげてね」
生徒会長はそう言って、実戦部隊の方を見やった。
「と、そういうことらしいよ。聞えるかい、[illegible]」
[illegible]は生徒会長のことを横目で見ながら、阿九斗に念話を飛ばす。
《聞える。ジャミングの類はないらしいね》
すでにかなり先まで進んでいた阿九斗から念話が返ってくる。
「あ、卑怯ですわよ！　先に念話を入れるなんて！」
[illegible]は後ろからのしかかり、ゴグルに顔を押しつけて念話に割り込もうとする。[illegible]は前に倒れそうになりな
がらも、なんとか踏みとどまって、抗議の声をあげた。
「むぐぐ……。念話なんだから、そっちの声は聞こえないでしょうに。それに、[illegible]なら、[illegible]ぐらいデバイ
スなしで拾えるんだから……」
「ああ、そうでしたわね。阿九斗さん……！」
ひょいと身体を離して念話を聞かる[illegible]だったが、[illegible]その[illegible]のしかかって念話をはじめた者がいた。
「むぎゃ……！」
うめく[illegible]、だらりと体重をかけているのは、ころねだった。

「今、宮殿から情報が入りました。内容は人事異動に関係ありそうだとのことです」

ころねは[illegible]問い返す。

「ちょ、ちょっと、重[illegible]……」

「マーライ族というのが、その部族の名です」

情報官は言葉を無視して、きわめて冷静にころねは続けた。

「マーライ族は独自の歴史を持っています。海を越えた南の国のジャングルの奥地にマーライ族の土地があります。そこは帝国の土地ではあるのですが、古来から隔絶された秘境となっています。というのも、歴代の皇帝を引いていたらしいのです」

「なんだって？　そんなもの、知らなかった……」

彼女は思わず言った。

「なんですの、その先は結局……」

[illegible]のしかかられている予感に、驚きとも抗議ともつかない声をあげていた。

「そもそもの由来は、驚くべきことにテーマパークなのです……」

。

《そもそもの由来は、驚くべきことにテーマパークなのです……》

後ろへ遠ざかっていく幽霊の頭へ、ころねの声が響（ひび）いている。
すでに足下（あしもと）は木の根や草を踏みしめないと歩けない状態で、確かにこのあたりは道の駅の広場だったはずだが、今は森への
り口と化している。
「テーマパーク？」
幽霊の問い返しに、ころねはさらに説明を続けた。
《はい。日本の黎明期（れいめいき）の南の島をまるごとテーマパークにする計画があったようなのです。ところが、そ
の計画は頓挫（とんざ）します。その原因は不明ですが、歴史の闇に葬られている以上、それなりに重大な秘密があったようなのです》
「歴史の闇に葬られているって、データが残っていないのかい？」
《そうです。この情報は日本の作家が詳しい日本の歴史の断片を記憶（きおく）していたものです。つまり、重大な秘密とは、このテーマパ
クに日本の少数民族の若者が関係していたということ》
「たかがテーマパークに？」
《つまり、ただのテーマパークではなかったということになります。一説によると、伝わっている内容の
ようなものでした。日本の学者のひとりがジャングルがテーマの島の魅力にはまってしまって帰ってこな
くなったそうだ。彼はマーライオンの一族を研究する学者で、日本の野蛮人（やばんじん）の生活をはじめてしまったとか》
「ただの笑い話にも思えるけど……」
幽霊は周囲を見回した。その話を聞くとジャングルに覆われたこの景色がどこか狂気（きょうき）を孕（はら）んだものに見えてく
る。

《それがただのテーマパークではない、と気づけるのは、この状況になってからでしょうね。ともかく、注意してください。何が潜んでいるかわかりません》

「そりゃわかったけど、どうにもなぁ……」

阿見はつぶやく。

――テーマパークを模倣するなんてことがあり得るのか？

そこが阿見の引っかかった状況からすると、確かに今回のことはマーライ族の末裔の者たちの仕業に違いないと考えたが、それも聞いた話の本当のことと信じられればだ。

――とはいえ、そうでなかったら、どうしてこんなことになるものか……。

枝をかきわけ、森の入口を見つけると、中へ入る。まずは一番高いところを目指してみようと考えていた。これが人為的なものなら、一番高いところか、中心部その中枢があると考えるのが妥当だろう、周囲そう

でないと落ち着かないものだ。

森の中は、ところどころが伸びた木によって突き破られていた。内部の有り方というのは独特のものがある。

中を調べつつ、階段を登って上へ。最上階まで、周囲の植物が何者かによって手を加えられたような痕跡は見あたらなかった。つまり、木が成長した後でここに入った者はいないということになる。

「すると、結局この階すべて調べたことになるのか」

最上階のラウンジは、天井がガラス張りになっている。そこにジャングルの緑が満ちている光景は、ま

るで植物園の温室であるかのようだった。独特の暖かさと、気分を落ち着かせる香りに満ちていた。午前の陽の光が斜めに

し込んでいるが、これが木の葉に遮られ、目に優しい光のカーテンを床に作り出している。ここが緑に

だ。経緯を気にしなければ、冷たい飲み物も無料。散歩したくなるところだ。

しかし、ラウンジに足を踏み入れたとたんに響いてきた声に、阿丸は弛みかけた頬を引き締める。

「おまえ、つよいか？」

それは、甲高い子供の声しか聞こえなかった。

「誰だ？」

阿丸はラウンジの中央に向かって声をあげた。どこから声が聞こえてきたのか見当がつかなかったからだ。

「しつもんをしているのはこっちだ……いや、きくまでもなかった。おまえ、つよいな」

声はラウンジ全体に反響していた。それが声の出所をわからなくしている。

——僕でもマナを感知できないというのは、どういうわけだ？

阿丸は気配を探る。周囲からはノイズのごとく他人のマナ波動が飛んでくる。どうやらここに集まっている人たちの固有マナ波動を発しており、それが声の主のマナ波動と酷似しているようだった。

——まさに木を森に隠しているってことか。

どうやら、それがこの場に不満した理由のようだった。

構える阿丸に、再び声が飛んでくる。

「ほうらいのたまのえだにこたえてやってきたぞ！　おまえ、こうていじゃないな？

ノニモラはこうていにようがある！　こうていをよんでこい！」

ノニモラというのが相手の名前らしい。そして、その話の内容からすれば、どうやら体は未熟だ。まさか聞いて

いた通り、テーマパークを本物と信じているのではないか、と己の脳裏に嫌な予感がよぎる。

「生憎とこの場にはいない。交渉なら、相応の礼儀作法を踏んでもらおう」

とりあえずはそう言って相手の出方を見る。

すると、そう言葉を返してきたが、それは展開を予想していたものとは違っていた。

「礼儀作法を知らないのはそちらだ！　蓬莱の玉の枝の真の持ち主選！　国王同士お互いにどちらが上かを競わねばな

らんのだ！」

――何をしているかは把握しているのか。

思いの外、いっては何だが、話は通る。

「競うというのは、戦ということか？」

「これだから未熟な国は困る！　その残忍さを捨て去れ！　互いに認め合うための競い合いだ。ズッタンズッタン

でも、モッサモッサでもいいぞ！」

「ずっずったんずったん？」

相手の反応に戸惑う。

即座に言葉を返してきた。

「ズッタンズッタンは、ズッタンズッタンじゃないか。知らないのか？」
「いや……知らない」
「まさかモッサモッサも？」
「[illegible]か何か？」
「そんなことがあるか！　ええい、それならトテチテトテチテでいい！」
「それもわからない……。いや、そもそも、何を競うかは僕が決めることじゃない」
「それもそうだ。だから、皇帝が連れてきてくれればいいのだ」
「この国の人にとって、竜の王様の存在さえ知らなかったものだ。だから、君の主張をどう扱っていいものかわからないんだ。だから、まずは宮殿へ行って話し合ってくれると助かる」
[illegible]の本当のことを、隠さずに言った。
ある程度、信頼できる相手のようだ。というか、自分の調子で話している内容からすると、回りくどいことが嫌なことは確かだ。
しかし、相手の意識を好む態度は、考えていた以上だった。
「そんなの面倒だ！　おまえの皇帝陛下の居場所わかるだろ？　強いマナを感じる。その辺じゃないレベルだ」
「陛下の居場所と言えば[illegible]けど……」
「ええい！　はっきりしろ！　そんな強いのなんているはずない！　それじゃ、闇が
おまえより強いのか？」

「そりゃあ……」

[illegible]けなの顔に思いを浮かべる。

「……僕じゃ歯が立たないな」

「そりゃあすごいな！」

ノニモラの口調が明るい、弾むようなものになる。

「じゃあ、トテチテトテチテをしよう！」

「だから、トテチテトテチテって何？」

「うーん、トテチテトテチテはトテチテトテチテだからなぁ……。ルールを説明すると、どこでもいいから先に回って、相手の身体の先に手で触ったら勝ちだ！」

ノニモラの語尾が跳ねる。おそらくその身体も跳ねただろう。

[illegible]背後に気配を感じ、ひょいと前へ跳ぶと、先程まで[illegible]いた場所に折れた木の枝が落ちてきた。

——ん？

何か不穏を感じて、[illegible]右へ跳ぶ。その瞬間、風を感じた。何者かがすぐ側を駆け抜けたのだ。

「おおお！　避けられた！」

避けられたというのに、嬉しそうな声が聞こえてきた。

[illegible]そちらに目をやると、すでにそこには誰もいない。

「速いな……」

純也の気配探知が、周囲のどこからも同じ気配を出している。動きのある方へ目をやると、そこでは木々ががさがさと揺れているばかりだ。

——！

風を感じてから、そちらを見た時に跳ぶ、褐色の影がそこを通過したのが視界の端にちらりと見える。

「また逃げられた！」

、再度嬉しそうな声

——えっと……僕は何をしているんだっけ……。

純也は視界で見失った姿を、全てを試そうとするが、ジャミングこそないものの、木々が放っている魔力のせいでどうにもノイズがひどい。

——ともかく、この子を捕まえてしまえばいいのかな？

そう考えをまとめ、相手の位置がわからぬままに声をあげる。

「魔術は使ってもいいのかな？」

それに答えてノニモラ。

「おお、かまわないぞ！」

「そういうことなら……」

純也は相手の動きを気にせず、魔法陣を手に広げて振るった。その動きに似合わぬ激しいマナの奔流が巻き起こる。

「うおおおお？」

ノニモラの鶯の声が響く。

周囲に応じ、マナの奔流が渦を巻きはじめる。木々が音を立ててしなりはじめた。柔軟性のある幹を持

った種類もあったようだが、それでも限界でしならされてしまったのか、風が吹き始めて数秒後には、ねじ

れ、押し倒されていく。そのバキバキという音が収まり、風が止んでみると、まるで巨人がフォ

ークダンスを楽しんだ跡地であるかのように、渦を巻いた形で水が床にはりついていた。

「ありゃりゃ！」

小さな子供たちが立ち尽くしていた。

褐色の肌と、大きく澄んだ瞳の持ち主なのは遠目にもわかった。性別を超えて誰もが一目で好感を抱かずにはいられな

い容貌をしている。それはつまり子供っぽく、男女どちらかもよくわからない見た目ということで

もあったが



服は腰部分はあるが、軍事用の装飾の入った革、大きな宝石で飾られており、その姿はシンプルでありな

がら高貴さを感じさせる。

阿久比はその姿を不思議に思いつつ、ノニモラに向かって首を振った。

「これでやめておくかい？」

しかしノニモラは怒ったように腕を振り回す。

「やめないぞ！　自然を大切にしないやつはおしおきしてやる！」

それを聞いて、阿久比は眉をひそめた。

「自然って……　天才魔法使いがこの場所で繁茂させたものだろう？　どこが自然なのさ」

「うおおお！　ムカムカするぞ！、大体不自然いつもそれだ！　ノニモラたちの自然を大切にするを否定す

ぐに成長する！」

ノニモラは大げさに地団駄を踏んでいる。

その自然論理的意識は阿久比は快く感じられたが、それでもノニモラの言っていることには納得できなかった。

「植物って、マナによって育成させられたものだし、天才が成長をコントロールしたものじゃないか。それ

を自然と言われても……」

「どうして不自然なことを言うんだ！　だから不自然だ！、大体おまえ　ノニモラのマーライの

ことをどれだけ知っているってんだ！」

「噂だけど、テーマパークのジャングルを植物って信じて生活しているって」

「それはそれでいい。でも、物語だって信じていないぞ。本当だ、こっちでいうビルと同じだってこと
くらいよくわかってる！」
「え？　じゃあ、なんで……」
「俺たちにとっては、先進的な技術を持った。庶民は社会システムにすぎない。魔法技術は独占されている。それをシステムと無知で
しているのは、富裕層たちと一部インテリ層だけで、情報はすべて国に隠されているにもかかわらず、一般
は教団のドグマを鵜呑みにして生活している。それと同じ事をマーライ族もしているというのだろうか？
「……まさか、君のように、権力者だけが真実を知っていて、一般の人を騙しているとかなのかい？」
「むき！　馬鹿にするな！　みんな知ってるぞ！　子供は学校で歴史を習う！」
「そりゃあ……どういうことさ？」
「教科と法律はべつべつだ。法律は実行動っぽいほうがいいんだぞ。食べるものは自分で作る。病人ならず、相
できる。それなのに、国家の命令に合わせるのが幸せじゃないと思っているじゃないか。それもこれも楽しく生きてい
ないからだ。だから、マーライ族は戒律をなくしてしまった。そのためのきっかけになっ
ただけなんだぞ。テーマパークというのは」
「そうなのか……」
俺はこの言葉を失う。教義ほどに衝撃を受けていた。国内部に広がる、自分にとってはその世界がすべてだったから。外界
れた感じがしたことが原因なのだろう。そして、ノニモラが異端審問所であり、それがこの国では異端だっ
た。今の自分の考え方に近いところがあるという予感のようなものがあった。

「わかったか」
ノニモラは小さい身体ながら大きく反り返るように胸を張る。
阿丸は微笑でうなずいた。
「解決策があったのは確からしいね。事件はお詫びするよ。それに、話を聞いたら、もう少し詳しく君とそのことを知りたくなった」
その顔を見たノニモラが、興味深げに大きな目をさらに大きく見開いた。
「おお、わかってくれたか！　それじゃ、トテチテトテチテの続きをやろう！」
「いいけど、僕が勝ったからってなにもないよ？」
阿丸はそう言ったが、ノニモラは、面白い、と大きくうなずく。
「大丈夫！　面白いからしたいだけだ！」
それじゃ、とばかりに構えたノニモラだったが、そのとき、空から割って入ってきた声があった。
「あちゃーん！」
姿は見なかったが、けなが空からやってきたのは間違いない。阿丸は顔を上げると、着いた者を注目する
りと後からはぎ取られた。
着せられる前に自分の身体から着物を引き離してから、けなは姿を現した。
「わかっているなら、脱がなければいいのに」

阿兄呆れたように言うと、けなは頬をふくらませた。

「脱がないと殿下から逃げられないんだもん」

「殿下」

すると、三人の会話を聞いていたノニモラが反応した。

「殿下ってことは、まさかおまえが勇者？」

妙にカンがよいところがあるのか、ノニモラはけなが勇者であることに気づいたらしい。

普通はけなを見てもそうは思わないだろうが。

「そうだけど？」

けなはきょとんとして問う。

何と返しては、もう少し誤魔化しようがあったかもしれない、と考えるが、正直そうしてもこの子はどうにもならなかっただろうと思い直す。

「今ちょうど話していたところだ。この子がマーライの一族ノニモラ。どうやら結構有名なんだ」

「そうなんだ」

けなはノニモラの方を見る。

ノニモラも目を開いてけなを見た。そして、ノニモラの方から目を閉

「すごいな！　さすが勇者！　全裸なんだな！」

──どこに目を付けてるんだ……。

阿久比ずっこけかかる。

しかし ノニモラはおかまいなしに弾むような声をあげる。

「自身の肉体が千年経過しているってことは 自然に還ろうって人民に訴えているんだよな! すごいじゃないか!」

――なんにせよ 相手と話が合いそうで何よりだ……。

阿久比は半ば呆れながらも 少し安心して胸をなで下ろす。

が ノニモラは笑顔を浮かべながらも 一直線に距離を詰けなに向かって走り出していた。

「それじゃトテチテトテチテの続きをするぞ! 先攻は年寄り!」

先に相手の身体に触れた方が勝ち しかも魔法の使用は可能 ノニモラはそう言っていた。 このように隠るものがない開けた空

のルールが適応されるとするなら その勝負は魔術戦闘の様相を呈するはずだ。 その予想に違わず ノニモ

ラは走り出すや 瞬時にマナ球を周囲から浮かばらけなに向かって撃ち込んでいる。 それをさばいているうち

に取り押さえる作戦だろう。

「きゃ!」

けなは悲鳴をあげる。

阿久比は瞬時にけなの前に回り込み マナ球を並べて手刀を弾き飛ばすと ノニモラの身体をマナシールドで遮る。

「うおおお?」

ノニモラは阿久比のシールドに対抗して押し通ろうとしたが果たせず すぐに後方へ回転して飛んで体勢を立て直した。

――自分の意思で行動したから加減できなかった。少しやり過ぎたか……。

内心でそう思ったが、ノニモラはけらけらと笑いだしていた。

「うおほおお！　いいぞ！　すごいぞ！　さっきより断然強いじゃないか！」

「そりゃよかった。でも、今の話を聞いておくれよ。自分はこの技術に向いていないよ。得意ではあるけれ

ど」

既知の言葉と、残念そうな顔はなかったが、ノニモラは素直に問題を理解した。

「なんだ、面白くない。ノニモラは身体を動かす方がいいけどな」

「ともかく、自分の立場を把握していない。少し説明してくれないか。僕も聞きたいことはある」

そして、内心で聞いたことをけなに伝える。それからノニモラもいくつか質問したが、結局のところ

しい。魔王選ということについての新しい情報はほとんど出てこなかった。

「つまり、魔王の玉座の一枝に反応した人の誰が魔王になる必要があるってことなんだね」

けなはそう言った。

「そうだ。そして、それは魔王の玉座の一枝で決まる、とは言われているけど、結局は選挙次第なんだから、それを伝

た者が魔王ということだ。だから、その前に魔王を決めなくちゃならない」

ノニモラがうなずく。

「そういうことなら、あたし魔王じゃなくていいんだけど」

けなが何もないことのように言う。

「へ？」
ノニモラが驚いて、けげんな顔で見つめた。
「だから、あたしは別に王様にならなくてもいいやって」
「いやいや。女王の王位はそんなに簡単に捨てていいもんじゃないぞ。まぁ、もちろん、そっちが捨てるっていうのなら、もちろんもらってやってもいいが」
ノニモラは一瞬戸惑ったが、妙にどぎまぎしたような態度で、腕を組んだ。
「女王の王位が欲しくてやってきたんじゃないのかい？」
何やら不可思議な表情になって聞いた。状況からすればノニモラは侵略者のような態度をとってもいいはずだった。
「マーライ一族はそういう意味での欲はない。女王の王位で何をするかが問題なのだ。そして、ノニモラにはいや、マーライ一族は果たさなければならない義務がある」
ノニモラははっきり言った。
「義務？」
そう聞き返すと、ノニモラは逡巡したようだったが、やがてうなずいて話しはじめた。
「そうなのだ。マーライ一族は代々、無謀なものたちから守ってきた」
「ああ、それ。近衛騎士のおじいさまから聞いたよ。なんだかわかってないけど、とにかく始
だって」

けなが言うと、ノニモラは首を横に振った。

「こちらに伝わっているところでは違う。宇宙の工技によって動き出した星行船によって、次の無限の方へ飛び込むことができる。無限の方へは良心によってだけ良き方に飛翔できる。そうでなければ、いずれ無限の方はその種族を滅(ほろ)ぼす」

「それは……伝説なのかい？」

宇宙人の質問に、ノニモラはもう一度首を横に振った。

「さいしょの宇宙の最後の言葉。だから、伝説じゃない。星行船はある」

「だけど、星行って……」

「そうだ。自分から先に、いや、太陽系の周りを回る惑星(わくせい)より先に、先行する文明は生まれている。いや、誰か宇宙で先行することについて、見えなくなっている、多分ずっと。その先の宇宙は何か、壁(かべ)みたいなものがあるんだ。そこまで行けば、それに触ることができる。そういう風に考えられているぞ」

ノニモラの言葉は、何万光年も知っている宇宙文明でも一致(いっち)するものだった。日本人の大和(やまと)望一郎(ぼういちろう)が言っていた神様からの

略(りゃく)……。もしかしたら、その壁の外に何かがあるということなのかもしれない。

「良心というのがわからないけれど、そういうことなら僕も協力できることはあるかもしれない」

地球人のけなはノニモラに目を移して言った。

が、けなはどうにもはっきりしない顔で頬に指を当てた。

「だけど、それなら、やっぱり王位を譲ってもよくないかな？」

「偉大な義務を果さない者は、ノニモラは嫌だぞ。おまえは王の資格を持っているじゃないか。その王の証だ」

「そうなんだけど……。なりたくてなったわけじゃないし」

「そうか……」

ノニモラはけなの前に立ち、腰に手を当てる。

「……じゃあ、もらってやってもいい。嬉しいおまけもついてくるしな」

「おまけ？」

ノニモラの条件に、けなは首をかしげる。

「彼だ」

ノニモラは用心棒を指差した。

「さっき彼がおまえを守ったときわかったぞ。おまえの彼が王の資格を抑えているだろう」

「あっ！」

けなはノニモラの言っていることを理解して声をあげた。

つまり、王の資格を譲ることは、魔王としての用心棒の関係を譲るということでもあった。

「困る。やっぱり駄目だ」

けなは首を振った。

ノニモラは泣きそうな顔になる。

「うん、そうか、ノニモラ。この世界が気に入ったのに、是非とも傍においておきたい。だが、問題
じゃないことはマーライ族も心得ている。だから、どうだろう？ 皇帝の付き添いはいらんが、親族の者を
のには手を貸してもらおう。そして、彼女は彼女の自由意思がある。おまえとノニモラ、ヘムヘムで話し合っ
て、彼女に決めてもらおう」

「良い思いつきだ」というようにノニモラは手を叩いた。

「へむへむ？」

けなもは不可解な顔を浮かべる。

ノニモラは驚いたように口をぱくつかせた。

「おまえらヘムヘムを知らんのか？ 人間の本能だぞ。裸でやってきたおまえだから、知っているだろう」

「え？ だってわかんないもん。ノニモラちゃん言葉が違うんだもの」

けなが言うと、ノニモラは仕方ないなぁ、と指を立てた。

「ヘムヘムとは男のリュンリュンを女のパックパックに入れて子供を作る行為のことだ」

「ぶっ！」

「え……」

知代は吹き出し、けなは真っ赤になって絶句した。

ノニモラは二人の顔を交互に見て、不思議そうな顔

「何でそんなに妙な反応をする！　自然なことだぞ。気に入った男と女が取り合うのに一番いいんだぞ。別にどっちも気
ったなら一緒にいればいいんだし」
確かに自然のままでいるということを考えれば、そうなるということは阿九にも理解できた。しか
し……。
「ちょっと待て。ノニモラ、君の女なの？」
「そうだぞ。歓迎。さぁ、ヘムヘムだ。頑張るぞぉ！」
ノニモラは腕をぶんぶん振り回して気合を入れる。
「いやいや、ちょっと待った！」
阿九は慌てて手を振った。
「だから何？　別に試してみればいいじゃないか。人によって違って結局なんかならないぞ。作法なんてない
だってあるし」
緊張した態度でノニモラはそう言った。
「そ、そういうことじゃなくてさ」
阿九は首を振った。けなは阿九の腕にしがみつき、ノニモラに敵意の籠った目を向ける。
「あーちゃんはそういうことしないの！」
敵意を向けられたノニモラも、気後れしたりはしなかった。

「旦那様ぞ、男子が独占するのは良くないことだ！　別の男性のお気に入りはいてもいいけど、一週間に一回くらいは貸すべきだ！」

——価値観が違いすぎて話にならないぞ……。

返答に困り果てていると、助け船がやってきた。

「こらぁあああ！　そこのウンババって言ってる奴！　旦那様はわたくしのでしてよ！」

普段は迷惑なだけのそんな妻も、この状況ではありがたい。

状況をモニターしていたのか、王子の妻たちがラウンジにやってきたのだ。

「なんかいっぱい来たな！　おまえ、何人いるのか、モテるな……おまえ、一ヶ月に一回……いや、くらいへムへムしてもらえれば、おまえだってノニモラのことを気に入ると思うが」

ノニモラが言うと、王子の妻たちは無言で剥き出しにするかと思いきや、やや考えた後それは良い考えだ、というように何度もうなずいた。

「そうですわね……いや、そうですわ！　旦那様は国の人気者、お優しいからローテーションで女を抱くでしょう。しかし、なかなか私たちのところに足繁く通うようになるってことですのね！　いいですわねえ。それに一週間のうち四日……いや、三日はわたくしですわね。あとの一日はお情けや義務で女がてもらえるだけ、一日はお休み」

「お……ノニモラがいる限りそうはならないぞ！　ノニモラのほうがへムへムはすごい！」

「ええい、ちんくしゃが技を使えるわけないでしょうが！ その点わたくしの恵(めぐ)まれた身体ならば、あんなことやこんなことが……」

手足の付いた身体を触(さわ)ってアピールするが、ノニモラも負けてはいなかった。

「ノニモラはスッポスッポ得意ぞ！ 魔獣(まじゅう)だって昇天(しょうてん)だ！」

「いや、もう、それはいいから……」

阿河川丸は止めようとするが、そこにさらに追い打ちが重ねられた。

「今日なら閉区間は到(とう)底(てい)不可能な陵辱(りょうじょく)行為(こうい)をしても問題ありませんよ」

そんな無茶苦茶(むちゃくちゃ)なことを言ったのは、やはりころねである。

「事態をややこしくするのはやめてね、だから」

阿河川丸はそちらを振(ふ)り返(かえ)ると、ころねは真面目(まじめ)な顔でこう告げた。

「ノニモラさんのお話、真剣(しんけん)に考慮(こうりょ)するに値(あたい)します。おそらく先程(さきほど)の阿河川丸さんの忠誠を尊重されるでしょうが、これより対決を行うことに決定いたしました」

「勝てることにならなければ、それは従うしかないね」

阿河川丸はそう言ったが、嫌(いや)な予感がすることを回避できなかった。

○

ノニモラがやってきてから数日後、政府は緊急会議を開き、そして新時代騎士団による遠征部隊を編成することを議決した。内閣たちが

に忙殺されている間、病院方面は暇にしているかと思いきや、技術長リリィ・白石の命令の下、とある作業を進行させられていた。

「最新鋭の技術が使われているんだから、どこかで技術開発が行われているわけだ。そんな簡単なことがなぜわからん」

リリィは千年前の戦士ヒロシを研究室に集めた中で、ヒロシだけを机の前に立たせて説教した。

ヒロシは申し訳なさそうな顔で、しかし、わずかに口をとがらせて弁解する。

「この中で、あっしだけ普通の家の生まれなんすけど……」

ヒロシはどういうわけかブレイブのスーツを与えられた家の息子だが、ここに集っている他の者のように名門の家の生まれではない。CIMO8の動向を調査するように命じられているが、[illegible]ことにはまるで面白くないのだ。

「とはいえ、[illegible]大胆にできるのはキミだけだ。途中で投げ出されることもできないから、キミの重責をやってもらうしかないんだよねぇ」

リリィは暴君のような態度で言った。

ヒロシとしては、理不尽にいじめられているような気分になる。

「だけど、官房の機密技術が使われているからったって、どこで使うかなんてわかりませんよ。そりゃ、CIMO8の動向が話題になったのはわかります。一度だけ会ったことのあるあのUSDってのが何

企んでいることも。でも、一体どこを調べればいいのか……」
「それも発見したじゃないか。教会と結びついている貴族。堕落した名家の秘密を持っているから、そこにちょいと忍び込んで情報を集めろって」
「でも、その堕落した名家か、陰謀をしていることとしている貴族かが誰かってのがわかんないんですってば」
「リストを作って渡したじゃないか」
「数が多すぎますよ！」
「どういうときに誰が動きそうかって、キミが判断するしかないんだけどなぁ。どういうときかってのが情報によって変わるし」
「だから、そこがわかんないんですよ！」
「そりゃあ、まぁ、そうか」
リリィは腕を組んだ。
「とはいえ、さ……」
それまで黙って聞いていたヴァンが助け舟を出すように口を挟んだ。
「……あまり深いところまで三輪さんが調べることも無理なんだからさ。どうもあのUSDってのは、昔からブレイブスーツの秘密を継承しているようだし」
「だが、彼はこいつを泳がせている。彼らうまくいきゃご本人に会えるじゃないか。そしたら話を聞かせる」

リリィは薄笑い(うすわら)を浮(う)かべながら言った。
ずいぶん危ない橋を渡らせようとしているな、とヒロシは面白くなる。
「しかし、USDは正面に出てこない。そもそもさ、USDは個人でもめちゃくちゃな金持ちだよ。それだ
みたいに秘密にしたいケースで、露骨(ろこつ)に他の種族にお金を使うかな?」
「それは納得できますけれど、マーライ族かいうあの大きいのが来てからですから。それに奉仕者の
は[illegible]はありませんわ」
平子が言った。
「うん。でも、[illegible]マーライ族が協調するにしても高いお金を使うんだよね。そもそも調べちゃいないって
のもわかってるし。[illegible]らの情報だけなちゃんのおかげでこっちに筒抜(つつぬ)けだからさ」
[illegible]説明。平子がうなずかざるを得ない。
「そうですわねぇ。でも、彼女が使われたお金はかなりの額になる……」と、そうなるとUSDの陰謀(いんぼう)
と考えることとそのものに無理があるのかもしれませんわね」
「このご時世、お金がかかるのは大規模エネルギーを喰(く)う装置類。それに準じた魔術(まじゅつ)実験くらいのものだからね
え。そのあたり無理してエネルギーを浪費(ろうひ)してしまう魔術実験みたいなものを区別して。となると、何をやっ
てるんだか……」
リリィはそう言って机の上で手を組んだ。
「CIM08が分裂(ぶんれつ)しているとしたら?」

綺向がぽつりと言った。

皆の視線がそちらに集まる。

思わぬ人物から指摘されたことに驚いたのか、綺向は恥ずかしそうに左手をぱたぱたとさせた。

「いや、スハラが往来して一度もなかったわけだからな。[illegible]ともなれば、仲が良いわけはないだろうと思って。それに、[illegible]いなくなっているのだから」

「それはあり得ねぇ。そうなると、ボクらが考えていた結論が間違っていたことになる。USDの

メンバーを押さえてみるのも一手……」

リリィがそう言って、ヒロシを見やった。

ヒロシは[illegible]迫られた居眠りの生徒のようにびくりとした。

「そりゃあ……そうくるとは思ってやしたけどねぇ」

「まぁ、そう言うなと。とっかかりは与えてやるから。ほれ、めぼしい奴のリストだ」

リリィはマナスクリーンに名簿を映し、それをヒロシに向かってすべらせた。

それを受け取ったヒロシは、ぎょっとしたように肩をぴくりとさせた。

リストが膨大だったからだ。

「ちょっと、これは……」

「数が多いのは仕方ないだろう。[illegible]出入りしている奴、面識のない者をピックアップしたんだ。出入りの業者もいる

ぞ。カモフラージュに最適だからな、業者なんてのは」

「これじゃ、デートしてる暇ないっすよ……」
「気[illegible]きやがって。そういうことは後に、姉だと名乗るところで言うべきじゃないさね」
リリィがヒロシの後頭部を振った。
ヒロシはすっかり忘れていただけだった、現在進行形でデートを繰り返しているアイドル星野ゆいが、[illegible]う子といい、[illegible]姉妹ということを。
「お前のせいでゆうの子作り事業に影響が出たら、即座に手打ちにしてやるからな……」
ヒロシの背後の刀の鍔鳴りがした。振り返ることなくヒロシはぎくしゃくとした足取りで歩き出した。
「そ、それじゃ、あっしは早速それを調べてきますか……っと」
「まぁ、よろしく頼むよ」
リリィはひらひらと手を振ってそれを送り出した。

○

ヒロシの動きが遅かったとは言わないが、事態はそれよりも早く進んでいた。
今、一匹の犬と一人の妖艶な女が見ているのは一隻の船である。船といっても、宇宙を飛ぶ個人所有のもので、今、二人が[illegible]に眺めているそれは、特に贅を尽くした独特のものだった。
「[illegible]一度乗ってみたいものだよ」

[illegible]ＣＩＭＯ８コードネーム『エスパー』である啓が言った。
「人の身体や精神の構造が違うから、私はそうは思わんね」
毛むくじゃらの大男が答えた。コードネーム『ザウン』である。
[illegible]宮殿の中庭に停泊していた。二人はそれを帝都中央ビルの上から眺めている。宮殿の中庭は屋根の下に隠れていて見えないが、精巧な作りをしている船体はさすがにそこからでも確認できた。白い船体はシンプルな流線形で、表面は太陽の光を反射してまばゆく輝いているが、つるりとした船体の奥には、細かい紋様が彫り込まれており、見る角度によって色や形が違ったものに見える。幻想的な美しさのある船だ。
「あれと、[illegible]マーライの一族の宇宙船に向かうってことなんだよね？」
「そういうことだ。そして、すでにモロックは中に入り込んでいるはずだ」
ザウンは大きく横に裂けた大口をもごもごと動かして言った。
「うらやましいなー。きっと[illegible]進んだろうな」
啓は頭の後ろで腕を組んで、さして感情のこもっていない口調で言った。
「彼らの[illegible]は身体じゃあない、それ以上に精神の構造の違いだろうさ」
ザウンはそう言い、ふと啓の顔を見下ろした。大きな顔であるので、それがどのような表情であるのかは誰にもわからない。が、その声だけは、隠し事を言うように低く、啓に向かって言う。
「ところで、あれは肝が冷えた。まさか、[illegible]を冗談めかしてとはいえ、脅迫するなんて。まさか、君はＵＳＤを[illegible]ないと言うんじゃあるまい？」

「あれはまさに気の利いた冗談だよ。それにUSDにはばれているんだからいいじゃない」
含み声を低くして答える。が、こちらは明確な口調だけだった。その口元は少しからぬ難題の笑みが浮かんでいる。
「……でも、ザウンの真意には気付いていても、僕が本気とは思っていないだろうね。まぁ、手
っていうのも、愛のひとつの形なんじゃないかな、なんて」
にたり、とする唇。ぶるり、とザウンは身体を震わせた。
「不本意であるが、故に困難を仕事にどこかから読み取ることに長けるようになった私だけれどもねぇ……。やは
り君の考えていることはわからん。USDのために内情を漏洩することを承諾したのだと思た
が、君が在籍するプロジェクト自体に彼が参加したのだったからね」
「ねぇ、ザウンの意見だと、賢人は僕のことをどう考えているかな？」
遥香は悪戯っぽく含み笑いの声で聞いた。
ザウンはうなずく。
「そう見ているよ。そして、そうでないと困る。君が裏切っていないと彼は信じ込んでいなくては」
「ふふ……。そう。少し安心したな」
遥香は伸びをして、すぐに表情を変えた。彼は心底から楽しそうに微笑む。
「じゃ、僕は賢人に会ってくる。ちょっと打ち合わせがあるんだ。賢人の考えじゃ、マーライ姉妹も、もう一人捕
ずやってくるって話だからさ」

「打ち合わせ、ね。団長」

「兵士もそういう偏見はあるのかい？　まぁいいさ。僕は僕でやりたいことがあるからそうしているのさ」

そして、皆に手を振ってザウンと別れた。

ザウンは、その姿が見えなくなってから、これは大人の顔をしていてもわかる、残忍な情報を調べた。

「団内の人間の思考はわからない……か。だが、思考など論理的に組み立てられるものでもない。人は損得に従うが、脅迫には屈する……」

そのザウンの情報を見ている者は、団内には誰もいなかった。

○

「あちゃん、すごいね。あれだよ、超きってやつだよ！」

「そんな不器用な言葉を使っていないよねえ……」

けなと阿呆は自分の世界に入り込んでいた。けなはただはしゃいでいるが、阿呆は自分の世界に不具合がないか、何か異常が潜んでいないかを探っている。けなには何の力も理解してもらっているため、マナ世界のわずかでも見逃すことはない。おまけに精霊もいないけど、そのライフログを細やかに読み取っている。経過はおろか、人の内面の動きまでもすべて阿呆は見ていた。

――誰かが化けて入り込んでいる形跡はない、か。船員たちには申し訳ないけど

阿見は心の中で詫びる。不快に思うことだとはわかりつつも、やはり不安が先立つ。

「やはり異常はないですね」

阿見の後ろからやってきたころねも、そう付け加える。

「じゃあ、楽しい船旅になるね」

けなは満面の笑みで阿見の腕にぶらさがっていた。その反対側にはノニモラがおり、やはり阿見の服の袖を引っ張っている。

「ノニモラを怒るな。ノニモラがいないと行く意味がないんだぞ！」

なんともやかましいことだが、阿見も含むこの四人がマーライの民族の村へ向かうため、この船に乗り込んだ一行たちは兵士の飛行艇に乗ることになる。警備の数から船の乗組員が乗り込まないのは、早く言えばけなのわがままだ。とはいえ、阿見たちが近くにいないが、何かあったときに行動しやすいので、特に反対する理由はなかった。

「飛行艇はランを観光します。都から南へ向かいます。目的地はこの島です」

ころねがマナスクリーンに表示された地図を示した。

「この島の中央にマーライの民族の村があります。村というには規模が大きく、こちらでいえば帝都環状線の内側ほどはあります」

「テーマパークとしては規模が大きかったわけか」

阿見がそう言った。

内部は居心地の良い空間。カーペットが敷かれた快適な空間。高級マンションと変わらない広さと設備がある。[illegible]な

ているソファに座り込んだ[illegible]。ころねの説明を聞きながらも、まとわりついてくるノニモラ

とけなを、まるで犬じゃらすかのように手早くさばいている。

「そうです。しかし、島はかなりの広さがありまして、その大部分がジャングルで覆われていま

す。これは、マナを吸収してしまう[illegible]によって構成されており、帝国本土からの発見を妨害してきま

た。もちろん、人為的に植えられたものです」

ころねは説明を続ける。

「しかし、ノニモラは村の若者が[illegible]ことがあると言っていたし、[illegible]築いているわけだから、[illegible]

あったはずだよね？」

[illegible]と言うと、それにはころねでなくノニモラが答えた。

「おお、そうだぞ。マニライ族はアップフの神様[illegible]だけど、一方的に恩恵を受けてログを返さなかったり

を[illegible]たりできるぞ。それというのも、[illegible]の一部を使えるからだ」

ノニモラは屈託なく言ったが、それはまたも[illegible]にとっては衝撃的な言葉だった。

「それは、[illegible]考えていた[illegible]ずっと[illegible]らいたってことじゃないか」

「どうやらそのようです。しかし、それも[illegible]があってこそだとか」

ころねは[illegible]りも[illegible]ノニモラの[illegible]聞いている。[illegible]もそう説明したが、こうも付け加えた。

「しかし、鋼糸の力が何を指すのかはわかりません。どのような効果があるのかも。ただし、実戦でそれ

に似た力を見たことがあります」

ころねがそう言って、ちらりとけなに目をやった。

ノニモラの前ではっきり言うのははばかられたが、鋼糸は何のことを言っているか理解できていた。

けなが人の記憶を改変してしまった、あの瞬間のことを思い出していた。

「ああ、何かいろいろと繋がってくる感覚があるね」

鋼糸はけなに目をやる。それまで腕にじゃれついていたけなが、驚いたように顔を上げ、それ

から、ぷい、と目をそらした。

「ともあれ、高度を保ってジャングルを抜け、村に降ることにします。今回の旅で目的地に向かうのは、親族とい

ことになるノニモラ・カナノニ様のご指名ということになっています。もちろん、案内役はノニモラ

もご一緒の探索道、蓬莱の玉の枝の力を調査する鋼糸さんたちも調査に同行させていますので、ご了解ください」

ころねはそう説明を終えた。鋼糸は何度もこの件に関する説明をころねから聞かされていた。

「わかっている。それじゃあ、よろしくお願いするよ」

鋼糸が言った。ころねは〈操縦席〉へと向かう。この先はころね一人で行動することになる。

ころねが姿を消すと、ノニモラがにわかに緊張した面持ちになりはじめた。

「それじゃあ、早速へムへムを……」

「いや、だから、所有はしない……約束……というか、これからも所有しないから……」

和也はノニモラを引きはがし、まだ心配顔の彼女のために立ち上がって飲み物を作ってやろうと提案する。
「ほら、バーカウンターがあるから、何か飲み物いれるよ。当然お酒はないけど、何か好きなものは……」
が、立ち上がりかけた和也だったが、その手を引かれてよろける。それはノニモラでなく、けなが引っ張っていたのだった。
「どうしたのさ」
和也が問うと、けなは何か言いにくそうにもじもじとして、何度も和也の服の袖を引く。
「だから、どうしたのさ」
もう一度問うと、けなは小さい声でこう切り出した。
「ねえ……あたしも、した方がいいかな……？」
「え？」
何を言われているかよくわからず、和也はけなに顔を近づけて聞き返した。
と、けなは顔を赤くしつつも、こう続ける。



「あーちゃんがいいって言うなら、した方がいいかな？　って……」

「何が？」

「だから、へムへム……」

けなはじっと純兄の目を見ていた。どうも冗談で言っているのではないらしい。

「いや、だから……それは……何も違わないかい？」

純兄は真面目に言って、けなから離れた。

「あーちゃーん」

けなはなおも純兄の服の袖をつかむが、純兄はやや強引にそれを引きはがし、バーカウンターに向かう。

「はは……ほら、けなは何がいいんだい？」

その様子を見ていたノニモラは、右手で小さい体をソファの上に弾ませた。

「お？　お？　お？　やっぱりノニモラの魅力にやられたか？　そうなのか？」

「だから、そうじゃないから……」

純兄は困りつつも、適当みつつ、飲み物を作ると、なんとかノニモラからまともな話を聞き出そうと話題を変える。

「それより、幸運の玉自体に何か力はないの？」

テーブルの上には、幸運の玉が一枚入った木箱が置かれている。希望の家の者が代々守り続けてきたものだ。

と、その話には、ノニモラも真面目な顔になった。

「マナの時代の最初期、被験者が行っていたという話。それがノニモラのご先祖様な。[illegible]が濃く[illegible]だ[illegible]

はじまったことを教える。そういう仕掛けとして作られたんだろう」

「それが[illegible]行っていたということは……」

「卑怯な話。つまり[illegible]奴は[illegible]ちだけの世襲にしてしまったのだ」

「なるほど。そういうことか。[illegible]があってのことなんだな」

阿丸はソファに戻って、飲み物をテーブルに並べた。と、すぐに左腕が柔らかい感触に包まれるのを感じた。

けながまたも阿丸の腕にしがみついてきたのだ。

「どうしたのさ？」

阿丸の問いが、けなはそれには答えず、ただ[illegible]阿丸の腕にこすりつけるようにしていた。

「すりすり……」

そんなことを言いながら、頬を阿丸の上腕に、前腕に、胸あたりを押しつけ、猫科の動物がするように[illegible]揺すっている。

「いやいや、だから……」

阿丸はけなを引きはがす。

けなは「む」と[illegible]のか、困惑しているのかわかりかねる顔になった。

「ねえ、ちょっと君、今日は変よ」

そう言った阿兄九も、けなはやはりもどかしそうにするばかりで何も答えなかった。

「おおお、楽しいことやってるな！」ノニモラもすりすりしながら真面目な話を続けることにするか！」

ノニモラは年寄りにしがみついて、けなと同じようにしはじめた。だが、口を閉じると、阿兄九の真面目な話の続きが始

してくるのが奇妙だった。

「いくつかの[illegible]、つまり[illegible]子孫たちは[illegible]散らばったと言われている。[illegible]後継者となった[illegible]の他[illegible]

たのだな」

その話をしているうち、けなが再び阿兄九の腕にすがりつく。こうなっては双方を振り払うこと

できない。

「そして、その[illegible]の一[illegible]、星行船を起動させる鍵でもあると」

阿兄九が言うと、ノニモラはうなずいた。

「そうだ。星行船は一度、宇宙へ飛んだ。そして、[illegible]の一部を持ち帰ってきたのだ。だから、ノニモラも

の一部を使える。さっき、あの[illegible]が言っていたことだぞ」

「それじゃ、その時の……」

阿兄九はそう問い返した時、ころねがすたすたと星行船に戻ってきた。船を出てからそれなりに時間が経っている。

もう到着したのか、と阿兄九は思ったが、返ってきた答えは違っていた。

「お取り込み中失礼いたします。ご報告」

「どうしたのさ？」

「この船、落ちます」

「は？」

「墜落します。制御不能になりました」

きわめて冷静に報告しているので、何か大したことのないように聞こえるが、どう考えても大事

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。どうしてそんなことに？　攻撃でも受けたのかい？」

「いえ。どちらかと言えば攻撃した方です。原因は不明ですが、船の制御系が外部から乗っ取られました。そして、近衛騎士たちの乗っている二隻の宇宙船を、撃墜いたしました」

「外部から乗っ取られた？　そんな馬鹿な。だって、船の制御は僕以外誰も……」

「そこは謎です。しかしながら、現実を直視し対処しなければなりません。すなわち、船の制御は不能ですが、今もこの船は落ち続けています。脱出の準備を」

「……わ、わかった」

阿見は立ち上がり、旅行鞄を取りに行った。幸い、到着したばかりなので日用品を入れるための鞄はまとまっているし、中もまだ開けてはいない。

「え？　落ちてるの？　ホントに？　ずっと静かだったよ？」

けなはころねに問い返した。ころねはうなずく。

「残念ながら本当です。慣性の法則のため、音も振動も完璧なのです」

ころねは物置部屋のドアを開けた。一気に風が流れ込んでくる。ドアに歩み寄ってみると、眼下は緑の絨毯のよ
うなジャングルが見えた。その位置もまた、妙に近い。本来の姿のまま落下し続けているのだということだ

「島はすでに到着しています。ジャングルに落ちるだけです」

ころねはそう言った。

阿九はけなとノニモラを振り返った。二人とも緊張したような顔はしていない。ノニモラなどは心底から楽し
でいるようだった。まぁ、けなは飛べるし、ノニモラもそのあたり心配ないのだろう。

「しかし、ご注意ください。ジャングルはマナを吸収する植物が生えています。原生林ではマナは安定しておりま
せんので」

ころねがそう言った時には、すでに阿九たちは外に飛び出していた。

「あ……そうだった……」

「え？　じゃあ、飛べないの……って、ホントだ！　きゃあぁあああ！」

「あはは、怖がるな！　ジャングルの背の高い木を見つけて、その葉っぱから葉っぱに跳ねるように
ちれば、全然大丈夫だぞ！」

ノニモラはそう言って笑った。

——……いや、まぁ、無茶だけど、それをやってみるしかないか。

阿九は落下しながら、不空けなを抱き寄せた。

上を見るところねがしっかりとパラシュートを背負って飛んだのが見えた。

２　人の王子と勇者

「皇帝の船が消息を絶った？」

そう問い返したのは、リリィである。

機密扱いであるその情報を持ち込んできたのは、絢子だ。

王子を机に挟んで二人は向かい合っている。

「つい、先程のことです。もちろん、極秘なので限られた上役のお耳にだけ入れようかと」

事となる予定である。

「誰がやったのは？」

リリィは王子を怪訝さと憤りの両方も含まる顔になった。明確に何かを疑っている風だったが、絢子はそれに対する答えはなかった。

「まだ情報が何も。しかし、それが誰であっても、彼がついているのですから、大丈夫でしょうが……」

リリィは苛立ったように机を指で叩く。

「紗阿久人のことか。もちろん、皇帝の安否を心配するなんてのは馬鹿らしい。ボクの言っているのは、C-M08の仕業かどうかということだ」

そのリリィの態度に　いぶかしみつつ絢爛は問う。

「会長はこの件どうなさりたいのですか？」

リリィは口をゆがめた。

「それもわからないたぁキミも寝ぼけてんねぇ。ＣＩＭ０８が気に入らないから潰そうって

だけだよ。どうもあのノニモラさんがいらっしゃってから　田舎に行ってみたいなところにみな

さん興味がおありのようだけれど　ボクはそれだけ」

きっぱりと言い切った。

「それでは　私怨ではないですか。私は　陰謀だらけなたちを守るために委員会の編集も応じたわけは

で……」

絢爛は息を飲んで身を乗り出すが　リリィは少しも動ず　するすると手を伸ばして絢爛の額を人差し指ではじいた。

「馬鹿　庶民感情を晴らすためだと　素直に言え。それから教えておいてやる。政治だろうが　なんだろうが　世の中の

ことは私怨で動いているんだよ。なにしろ恨みの天井知らずだってくらいだ。よく覚えておけ。ボ

クらはいずれ[illegible]なる。そのときになってから戸惑っても遅いってもんだよ」

「そんな　無茶苦茶な……」

絢爛は額を押さえて　力なく言った。

「信じなくとも　すぐに体験する時が来るだろうさ。国を守るためなんぞに働くものかってね。下手すりゃ

キミら　服部家だって　ＣＩＭ０８から命が下るんだ。まぁ　かつて命令違反をかましたキミならわか

るだろうが」
「いや、それは……」
「解体なんぞしなくていい。今の話の理屈がわかったなら、キミのお父さんを説得してくれ」
「え？」
リリィがいきなり話を変えたので、納得の意思。
「近衛騎士が一人撃ち落とされたんだ。国王陛下も黙っちゃいない。だが、それを避ける手段くらいCIM08は準備して
いるさ。つまり、そいつを、マーライの一族のせいにするとか、そういう類のことをね」
「ああ……なるほど」
「そうなったら、戦の指揮を執るのは騎士団長の……いや、それ以前に戦争を禁じられちゃ駄目ってことだ。戦っての
は、国家間の外交政策で解決しなけりゃ、簡単に起こせるんだからな」
リリィの言葉は納得のいくものだったので、納得の考えがそこに至らなかったことに恥じ入ってリ
リィの机からやや身をひいた。
「はい……わかりました」
「開戦の大義なんぞ意味はない。プロパガンダと情報操作でやっちまったもん勝ちなんだよねぇ。それがやっかい
なところさ」
リリィはそう言って笑った。と、そこにヒロシからの通話が入る。
「っと……。失礼、どうした？」

飛び込んできたのは、ヒロシの慌てた声だった。
《これから追跡します。あいつらの一人を発見しました》
「わかった。随時位置を教えてくれ」
リリィはそう言って会話を切ってから、にやりとした。
「おし。向こうも動いたな」
「ヒロシを追いかけるんですね。私も行きましょうか？」
絢奈が言うと、リリィは首を横に振った。
「いや。先にお父さんの方を頼むよ。それに、ヒロシが誰かを見つけたってことはさ、つまり、それは
囮だってことだよ。あいつの下手な陽動に気づかないもんか。だが、そうなると、奴らが動き出
たことだけは確かなんだから、ヒロシが行くのとは反対側をあたってみるだけさね。次のヒロシの
を待って、夜に移動する準備しなくちゃあね」
リリィは平然と言い、絢奈は「はぁ……」とうなずいたものの、不安な心は、この場に長居はかなわないと告げて
いた。

○

果たしてリリィの予測は的中していた。

啓とザウンは、東京都のビルの間を遠ざかっていくラバーズと、それを追跡しているヒロシの背中を見ていたのだった。

《さて、お間抜けな怪盗紳士をゴム人間が追っていった》

まだ距離があるため、ザウンは念話を使っている。

昼下がりの街中、啓とザウンは、大型犬を連れて散歩するセレブの美女といった風情だ。

「そりゃあ、ゴムのフォームを解いたところで、あのスキンヘッドの男じゃあねぇ」

啓は、こちらは声を出してけらけらと笑った。

《ラバーズはあの小僧とも面識があったようだな》

「[illegible]の[illegible]だろうね。僕はよく知らないけれど。でも、あのブレイブスーツ着用者は気に入らないな。賢

とも面識があるはずだから」

啓は笑顔を一瞬で消してみせ、もう遠くなっているヒロシの背中に冷たい視線を投げかけた。

《USDは何か言っていたかね？》

啓という言葉を思い出したように、ザウンが聞く。

「昨日も来ていたからね。いろいろじっくり話を聞いたけど、変わったことは何もなかったなぁ。僕については疑ってもいなかった」

《無貌の方については何か言っていたかな》

「それも、ザウンの言っていた以上のことは言っていなかったな。なんとかして手に入れるべき力とは言っていたけど」

《そういうことか。さて、覚悟はいいかい？》

ザウンは意地悪そうに言った。

「くどいね。問題ないよ」

怜治はそう笑って答えた。

そして、一人で近くのビルへと入っていった。

○

「まいったつもりがまたまいていたでありんすよ」

ふふふ、とほくそ笑んだのは、近くのビルの屋上に身を潜めていた大竹美智恵である。[illegible]人[illegible]の力[illegible]を使い、街[illegible]しているため、奇跡のような身体能力を獲得している。

「それにしても、あのビル、何か気になるんだよねぇ」

美智恵の自慢げな言葉を聞いていたのかいないのか、首をかしげてそう言ったのは、淑恵である。双眼[illegible]として使っていたゴーグルを手で押し上げ、[illegible]ようすを見やった。

「けいす、なんか怪しい？」

「さぁ、それはさっぱり。そも、拙者あまり頭が良くないのはご存じかと」

謙遜でなく、けいすは人間としては[illegible]で[illegible]、劣るほどだ。というのも[illegible]（[illegible]）

でもいうべき存在なのだ。


焼肉食
米

「そうだったねぇ。さて、どう動こうか」

[illegible]尋ねた。

[illegible]、[illegible]けいすが[illegible]ているのは、[illegible]けいすの[illegible]解析して[illegible]マナキャンセラーを

りげていたことが[illegible]ある。けいすは[illegible]システムにはマナを[illegible]れぬ[illegible]のであるが、[illegible]

れを[illegible]て、[illegible]よる[illegible]ら[illegible]ためのフィールドをけいすの[illegible]ことに[illegible]ていた。これによ

ってヒロシに[illegible]ている間ＣＩＭＯ８から[illegible]ことに[illegible]ていたのである。

「さすがにビルに[illegible]ことはできないでありんす……。[illegible]追かけさせたアルヌールとカンナに

連絡を……」

[illegible]れた[illegible]あるアルヌールと神山カンナに送った。

しかし返ってきたのは[illegible]った。

《そりゃ[illegible]さすがに[illegible]ぎや。でもエレベーターに乗ったのは見[illegible]し、それは[illegible]でしかないか

らどこまで降りたかだけ見ることにす……》

がそれに続いたのは[illegible]の[illegible]った。

《[illegible]らランプが消えて、[illegible]戻ないぎや……》

「さらに[illegible]……」

[illegible]その[illegible]思い当たることがあって、額に手を当てて考え込む。

そして、はたと手を打った。即座に[illegible]入れる。その[illegible]。

「ねえ、江藤(えとう)さん。あの件(くだん)の標本を覚えているんじゃない？」

。

「わかりましたわ……。わたくしじゃなく、会長にお話してみますわ。それまでは軽率(けいそつ)に動
ないようにお願いしますわよ」

千手はそう穏(おだ)やかに言ったが、内心ははらわたが煮(に)えくりかえっていた。即座に騒動を起こさなかったの
は、内田の自分の理性が怒(いか)りに勝っていたからに他(ほか)ならない。

千手は生徒会長たちの許、すでに秘宝から連絡を受けていたはずだとばかりに、いきなり切り出した。

「説明すれば長くなりますわよ」

「あいつらも大北(きた)から又聞(またぎ)きだから要領を得なかったよ。つまり、どういうことなんだ？ あの
ビルの地下に何かあるってことはわかった」

リリィが聞くと、千手は他に誰(だれ)か聞いているわけでもないのに声を潜(ひそ)めた。

「あのビルの地下を標本で調べてわかりましたわ。わたくしと曽我(そが)以外にはなしかそこに行かなかったからほ
とんど誰も気付いていないでしょうけれど、あそこには魔王(まおう)の降臨の儀式(ぎしき)に使われた場所がありますの」

「あの時の……」

リリィもこれにはさすがに絶句した。

「……噂話しか聞かなかったが、確かにあいつは人間の魔人になって還ってきた」
「そうですわ。わたくしが手に入れましたもの」
どこか誇らしげに言う不二子である。
「しかし、それなら彼はまさか……」
今、珍しくリリィは不安な顔を浮かべていた。
不二子はうなずく。
「狙っているのは、新たな魔人の誕生」
「だが、魔人は人間から誕生した時から、おそらくは魔人だったんじゃないか？　それなら何故こちらに……」
「まずは人間の魔人のように生まれながらの魔人として誕生する場合と、突然変異として生まれることになりますし、もしかしたら、一度に何人かしか存在できないのかもしれませんわ」
「それなら、なおさら普通の人間が魔人になれるはずがない」
自らを安心させるようにリリィは言ったが、不二子は首を横に振った。
「自分の恥を語るようで恐縮ですけれど、以前この研究所で魔人と戦った時がありましたわよね？」
「あったが、それが何だって？」
「そのとき、わたくし、魔獣をコントロールする薬を作り出すため、魔人の細胞を培養しておりましたの。そして、それをゴム男に盗まれておりますわ」

「あのラバーズとかって奴……。奴らなら組織外の人間を組織に潜入させるようなドジは踏まないと思うが、何故こと

じゃしょうがない。ともかく、その組織に組み込まれ、その道具の内部で変化する可能性があるということか」

リリィは立ち上がった。

「標的がわかっている以上、接触するか。外部に頼らなら、まだリソースを保存に頼れる」

「行くしかなさそうですわね」

冴子は肩をすくめた。

○

「帰ってこい？　そもそも連中に気づかれてるって？」

ヒロシは会話の内容を聞いて、言葉を失った。

すでに追跡はかなりの時間に及んでいた。会話に入ったのは、彼の街中から遠ざかり、目的のビルに入り込んで行ったた

め、妙だと感じた矢先のことだった。

今まで追い続けてきたスキンヘッドの男を再度じっくりと見る。すると、彼は振り返る。スキンヘッドの肌

色が黒く染まっていき、皮膚はその名の通りゴムのような感触に変化していく。ヒロシを正面から見据えた顔は、完全にのっ

ぺりとした、人ではないものになっていた。これこそが本物のラバーズの顔。

「騙されたってことか」

ヒロシがつぶやくと、ラバーズはその身体を反転させて、意外なことに声を発した。
「そういうことだ」
低い大人の男の声で鋭く答え、それと同時に右腕を素早く伸ばしてきた。
ヒロシは避けられないと判断して、「ブレイブ」とだけつぶやく。スーツの胸元に瞬間的に張れる電磁シールドで
その腕を防ぐ。
意識があるのかないのか、腕が激しく音を立てて弾かれたにもかかわらず、ラバーズはにやりと笑った。
「男にやられるのと女にやられるのでは、ちょいと感触が違う。そりゃあ、女の方がいいに決まってるが」
その男の口調は普通の人間とは違う、異質な感覚を覚えた。ヒロシは、眉をひそめる。
「妙なことを言う奴だな。付き合っている暇はないんだ。一人でやっていてくれ」
ここは日本の作業が終了した事務所で、今は誰も見ている者はいない。ヒロシはスーツの機能を最大限にして、上昇をかけようとする。
「っと！　時間を稼げとだけは言われているんだよ！」
ラバーズはまたも右手を伸ばし、ヒロシの足につかみかかった。
「くっ！」
ヒロシは早急に判断して、腕に装備された高周波ブレードを振る。と、するりとラバーズはその左手を放し、腕の先端を
「真正面から戦っては勝てないと知っているからか？」

ヒロシは挑発的に言った。

が、ラバーズはその言葉に感情を動かされることはなかったらしい。

「それは知ってるさ。マナキャンセラーを標準装備しているような妖精に向かっていく馬鹿はいない」

からかうように答える。

逆にヒロシの方が怒りを見せ、ラバーズに向かって大声で怒鳴る。

「それなら、こっちから行けばいいだけだろうが！」

しかし、魔術を使う者ならば誰もが恐れるであろうブレイブの突進に、ラバーズは動かなかった。

「そう来られても面倒じゃない。逃げるだけだ」

ラバーズは目の前のビルにするりと潜り込む。

「待て！ってこちらの方が……」

ヒロシはさらに後を追おうとするが、ラバーズの入り込んだ場所は普通の人間は入れない狭さであることにづいて立ち止まる。入り込んだのはビルの配管が敷設される天井と床の隙間だ。

「ゴム人間め！」

ヒロシは舌打ちする。

「こちらは、そのスーツの弱点がある程度わかっているからな。それに、自慢の行動パターンもだ」

ラバーズの声がビルの内部に反響して響く。

「だとしたら、なんだって？　お前、このスーツのエネルギーをシャットアウトするフィールドは展開できないようだし、機械そのものをシャットダウンすることもできないようじゃないか」

ヒロシはそう返した。

[illegible]ある加賀谷との一連の戦闘によって、[illegible]は[illegible]強さを誇るブレイブの弱点が明らかになっていた。[illegible]フィールドで周囲を囲むと、エネルギーの供給が絶たれてしまうのである。が、そんなことが可能なのは、[illegible]クラスの魔術師だけだ。

一方ブレイブのスーツそのものは、大和望一郎より与えられたものである。ということはコードを知っている者は外部からの[illegible]可能であることを意味している。現在は、それはUSDに引き継がれているはずだった。だが、この場にはUSDは姿を見せていない。

つまり、今ラバーズに対抗する手段はない。

「だから、[illegible]だと言っている。[illegible]ビルを壊せない。[illegible]というものがあるからな。俺は[illegible]よっかいをかける遊びをずっとしていればいいだけなのさ」

ラバーズはあざ笑った。

「……、何故USDはこのスーツを放置していながら、お前を襲わせているんだ？」

これまでの話に矛盾を感じ、ヒロシは聞いた。

「USDの考えなどわかるか。そもそもこいつはUSDとは[illegible]」

ラバーズからの答えに、ヒロシは当惑(とうわく)する。
「何だって？」
「そちらの推察の通り、精神寄生体が活動しているさ。その精神寄生体はUSDがはじめたものだ。だが、そいつを止めさせてもらった。そいつはUSDとは無関係だ」
「何を要求するつもりなんだ？」
「そこは言えるわけがない！　わからないか？　貴様はそのスーツを使っている以上、USDのやっているゲームの駒(こま)に過ぎねぇんだよ。USDに取り込まれているってこった。こうして貴様にべらべらしゃべってやってるのも、そいつを貴様に教えてやるためさ！」
ラバーズが声を張り上げる。
心を乱そうとしている。あるいは、単純に本音をぶつけることに快感を感じているだけかもしれない。そのいずれにせよ、真面目(まじめ)に取り合うべきでないことはヒロシにはわかっていた。だが、ラバーズが真実を口にしていることも確かだった。
「教えてもらう必要はないね。知っているから」
ヒロシはそう言って会話を打ち切ろうとしたが、ラバーズは執拗(しつよう)だった。
「そうはいくか、何故旦那(だんな)が貴様のような者を選んだのかわからん。いや、そもそも何をさせるつもりだったのかわからない。何か大望(たいもう)があるわけでもない、哲学(てつがく)があるわけでもない、

まして家柄も能もない。唯一の長所は人の言うことに流されやすい。つまり、ある種の人間にとってはは

やすいというだけじゃないか」

「……っ、やかましい！」

ヒロシは伸びてきたラバーズの腕を断ち切るべく、魔力のブレードを振るうが、同時にマナキャンセラーを発動させること

を怠っていた。ブレードはゴムの身体を断ち切ることができず、ぐにゃりとその腕を歪曲させただけにとどま

る。

「戦闘の先輩から教えてやる。焦るな、だ」

ラバーズはヒロシのミスをからかう。

「ち……」

ヒロシはいい加減この場から遠ざかる方策を模索しはじめるが、退避しようとすると、その方向から腕が伸

てくるのだった。

「……畜生！」

苛立っていた。

しかし、それはこの場からの離脱がうまくいかぬ事だけでなく、ラバーズの攻撃が的を射たものばか

りだったからでもあった。

「お前はヒロシの所に行ってくれ」

王女語リリィはそう仮説を指し出した。沈思けいすを含む因表に驚いたが、その指摘は事実に従った旨の指摘であった。

「それじゃあ、わたくしたち二人だけ？」

王女リリィに聞いた。

二人がいるのは神殿のある魔王城があったエリアだ。以前はピタハウゼンがいなくなって以来ここにはあまり人寄らない。二人が好勝手に争うにも、おどろおどろしい雰囲気になっているせいもある。



「不利ね？」
「そりゃあ、不利ですわ。危険なところに向かうのに、危険だから任務を遂げたとしか思えませんわ」
「ご名答。まぁ、ヒロシも危なそうだから。そんなに間違った判断とも思えないけれどね。で、まぁ、自信
では、ヒロシ、ボクが働くから。それでいいじゃないさ。キミは逃げ足はそれなりだから、危なく
なったら逃げてくれ。でも、[illegible]データを一番知っているのって、キミだからさ」
「……それじゃあ、走らせますわよ」
[illegible]中へ入。リリィがついてくるのを待って、[illegible]入った。
円形の光が放たれ、周囲の景色が変わる。
[illegible]とっては自然風景が、リリィにとっては初めてであるため、驚きに声をあげる。
「広いねぇ……こんな開けた土地あったか」
土地あるにしては天井が高いのである。ビルにも似た大きな柱がかなりの距離を置いて立っているのがか
すかな光でぼんやりと浮かんでいる。
その柱が並ぶ先どこまで続いているのかわからない。サッカー場何個分の広さは優に超えているだろう。
「広いけれど、[illegible]わかっている以上、[illegible]の日[illegible]ありますわ」
[illegible]言った。
「ああ、そうらしいね」
リリィが画面を見ている。

奴らが使っているチューブがある。その後、そこに以前の人間が使った棺があった。何もない空間。ただ、縦
かれていたはずだった。が、この人間の改造が施されたものらしい。様々な機械が新たに接続されていた。何
り、奴らのチューブは以前は存在していない。それがエレベーターの存在なのだろう。
の棺の前は、鬼の兄長が一匹、中の者を守るかのように座っている。
「大ですって？」
不審にいぶかしむ。
奴らの情報は確かに先に進んでいると言っていた。が、まさかこの場と大棺の中の物だけとは奇妙なこと
だ。
「警戒したほうがいいね。あいつ、妙な目をしているじゃあないか」
リリィが面白そうにそう言った。
「目？ 見えませんわ。毛むくじゃらじゃないですの」
不平を言うと、リリィは歯をむき出して笑う。
「そういうんじゃないよ。ちょいと見方を変えればわかることってのはあるもんさ」
リリィは即座に拳を伸ばして大きく撃ち込んでいく。
が、その行為に驚いたのは私だけだった。
「何か……！」
「はん。だから、ただの女じゃないってね」

リリィの拳、その大剣の前に受け止められていた。マナシールドがそこに形成されていた。
「なるほど、これは、ただごとじゃありませんわね……」
天子を後退させる。
「ふん、CIMO8ってのは、相変わらずのびっくりどっきり人間集団な。そして、しまいにゃ目
すらなくなったか」
リリィの思わぬ反応が返ってきた。
「だが、思うにちびっ子、お手並み知る」
だが、口を開いていた。
天子は絶句したが、リリィは大声で話すことは予測していたのか。その驚きよりも「ちびっ」と呼ばれた怒りが
たのか、その怒りをしっかりと抑える。
「てめぇはどう考えても手がわかんねぇよ！　犬鍋にしたて上に食わずに捨ててやるから覚悟してお
け！」
リリィは天使に向かって宣言する。
「私の名前は説明すると長いのでね、コードネームはザウンだ。この大いなる戦いで殺されて死ぬという馬鹿しさ
のお嬢さんに覚えていてもらおう！」
ザウンはそう答え、リリィの攻撃を正面から受け止めた。肉弾戦を得意とするリリィに、何の躊躇もなくその大剣で挑
だのである。

「おりゃあああ！」
リリィは吼（ほ）え、それに犬の咆哮（ほうこう）が応（こた）える。
一瞬後、リリィは、驚愕（きょうがく）の声を漏（も）らしていた。驚いたことに、両手の数倍のパンチを繰（く）り出すリリィに、ザウンは片手で対処していたのである。
「なんだと……！」
後足で立ち上がり、的の位置を最小限に素早く移動している様子。まるで、人に遊んでもらっている犬。だが、この場合、遊ばれているのはリリィなのである。
「てめえ……」
リリィは拳を撃ち出す手を休めて一歩離（はな）れる。
ザウンは一息ついて、前歯をむき出して笑った。
「馬鹿にしているわけじゃない。こういう体つきなので、どうしてもひょうきんになってしまうだけさ」
「気を遣（つか）ってくれてありがとさん」
リリィはそう言って、平手打ちの動作をした。
元々その真意を察する、腕の立つ犬と喧嘩（けんか）をするためにここに来たわけではない。
「んじゃ、もうちょいやろうか」

リリィが再度突進を開始する。ザヴンも同様にリリィを正面から受け止める。再び拳同士の激突が始まるが、その瞬

間に動いたのは天乃だった。

天乃の分身が戦いに参加したわけではない。横から大きく回り込んでザヴンの背後を取る。

「天乃りこっちが自分の間のだから、魔法を阻止させてもらえれば！」

「そう来ることはわかっていた。そして、隠密行動はいえ、私だけが注意してついている魔法を考えて

らいたいところだ」

ザヴンはつぶやき、さしたる抵抗もなしに二人の前方を、覆うような形でマナの障壁を作り出した。

「こちらもその程度なら予測済みですわ！　突き破ることくらいは……」

天乃が手を伸ばし、マナを展開する。通常、マナは術者の身体から遠ざかるほどそのエネルギーを弱めてしまう。

に、さしたる集中もなくマナを凝固させた障壁を作り出しても、術者の魔法を使えるが、物理で打ち破られれば、それを

ことは容易い。

しかし、二人の手は、それの解除に失敗する。

「……そんな馬鹿な！」

指先であと少しのところで、二人の手は青く光る半透明の壁に阻まれてしまっている。

「どうして解除出来ない！」

リリィが叫ぶが、天乃もそれを疑問に思っているところだった。

「わかりません！　私には、違うとしか思えませんもの……！　わずかも理解できないなんてこ

と、普通じゃあり得ませんわ！」

「人間は思いつきにくいマナの絡ませ方をしているんだよ。普通の考え方じゃ、あほぐせない」

ザウンは言った。

「ホントに大丈夫なのか、てめぇ！」

リリィは声を荒らげ、ザウンを振り切るべく走り出そうとするが、人の素早さでザウンはリリィの腕

り込んでしまうため、結局のところ、殴り合いを続けざるを得ない。

「私で誰であれ、君は勝てるまい。さて、時間はずだ。その中、佐倉が死んでいなければね」

ザウンの言葉が終わるか終わらないかのうち、なんとか壁の穴を探そうと棺の周りを回っていた平賀の眼前で、風景

び、繰り広げられはじめた。

棺から光が漏れ、わずかに開いた隙間から黒い煙が流れ出して来たのである。

違うのは、目に入っている物か。

「ああ……！」

こうなってはもう遅いことを平賀は理解していた。目の前で、名も知らぬ何者かが立ち上がるのを見ているしかな

い。

棺の完全に開いた中から、人影が現れる。

その動きは、その場に似つかわしくないほどの艶めかしさと優雅さにあふれていた。

「え……」

思わず手を、見惚れてしまい、今にも喰い破ろうとしていた動きを止めてしまう。

うつむいていた首がするりと上へ伸びていき、長い髪の毛が、蝶の羽のように拡がっていく。それはさなぎからの羽化にも似ていた。闇の中で邪悪で禍々しさと強さに満ちていたまさに魔王が降臨するならば、こちらは美しき魔物の誕生を見た。

「闇に耐えられるとも思っていなかったが……やってのけたか」

ザワンは、残忍とも見える笑みを、その顔に浮かべた。

「こいつは……まさか……」

リリィも戦い合うのをやめて、離れた位置で、自分の前に現れた存在への、驚愕を浮かべている。

「起きて……しまったんですの？」

天子がつぶやく。

すると、それに応えるかのように、新たな魔王が、恍惚として見えない空に向けて両手を広げた。

「これは……すごいね。見える。みんなの意識がわかる」

皆は、服をまとっていなかった。そのため、彼女が見ていた天子は、自分の前に立っているのが異形のものだと、その時に気づいたが、天子は目をそらすことはできなかった。その容姿は確かに美しさがあったのだ。

「これが魔王の力、すべてのリソース、いわば世界のすべてを使えるんだ」

右手を上にあげると、するりとその身体を包む服が舞い降りてきた。

「転送したのか、服が生成したのかは今日もわからないな」
そして、咲希は平子の方を振り返る。
平子はびくりと身体を震わせただけで、それ以上一歩も動かない。
にっこりと咲希は微笑む。
「お姉さんが魔法の使用を周囲に黙っててくれた人だね」
そう言われて、平子は返す言葉もない。
「な……そうだったら……なんだって言うんですの？」
「あなたの好きな人の全部、僕に入ってきたってことなんだから。その人の僕のこと、好きかなって聞いてみたかったんだよ」
その無邪気な笑顔に、平子はあっけにとられてしまう。
「さ、さぁ……それはわかりませんわ……」
「そっか。会ったばかりだしね。でも、ちょっと違うな。僕はわかるんだよね。お姉さんは僕の
ことを好きにならないだろうな。だって、僕のことをさっき、綺麗だと思って見ていたでしょう？
そういう風に僕のことを見る人って、結局のところ僕を理解しているって感じじゃないんだよね」
咲希の答えがなんであっても関係なかったかのように言い、奇妙なほど澄んだ目で周囲を見回した。
「帝国内の人間のデータを見れば、僕と似た人が見つかるんじゃないかって。そう考えていた。そうしたら、い
くらいは僕のことがわかってくれる人がいるかもってね。でも、すごいな。いなかったた

だ。僕はただ一人こうしてここにいる。まるでどこまでも続く回廊の上に一人で立っているみたいだ。す

がすがしいけど、ひどく不安を煽る。孤独っていうのは、こういうことなんだねぇ」

美少女のような顔で寂しげにそう言い放つ姿は、ある種儚げでもあったが、その次の瞬間、彼女は手を振ると、

した。

暴風が吹き荒れた。

「ひ！」

「ちぃ！」

王子リリィは、いきなり吹き荒れた暴風になんとか踏ん張ろうとするが、それもかなわず一瞬

して後方へと吹き飛ばされる。広い空間に壁がなかったのは幸いだった。僅かな衝撃を感じるだけで、ほぼ

ダメージなくやり過ごす事が可能だったからだ。もし壁があったなら、そこに叩きつけられてタダ

では済まなかっただろう。

「ちょっと違うな。もっとこう、手応えがあるものだと思ってたけど」

少女は拍子抜けしたように言うと、周りのリリィと王子を交互に見向いた。

「手応えがなくて悪かったな」

もう立ち上がったリリィは、少女に向かって大股で歩きはじめる。

挑発するように少女は首をかしげ、それから、何かに気付いたように指を鳴らした。

「ああ、そうじゃない。僕はもう少し可動域があるかと思っていたんだ。ぶわっと、きて、こうごうっと、ね」

「眼がないってか？」

リリィは毒づいたが、それ以上何もできなかった。

一歩も動けなくなっていた。

若者がリリィに冷たい目を向けていた。それだけなのに、だ。

と、若者は和やかにリリィに話しはじめる。

「殺人は深い意味があるんだね。魔物になってからそういうことがわかったんだ。つまりは、まぁ、いましがたわかったってことなんだけど。それに従えば、さ。つまり殺人というのは、これから先の、その人が為し得たかもしれない可能性を奪うってことなんだ」

若者は初めて知った概念に目を輝かせる子供のようだった。

「だったら……どうしたってそいつぁ当然のことじゃないか」

リリィが若者の考えがわからずそう言うと、若者はうなずいた。

「そうだよね。当然なんだよ。でもさ、逆のことには誰も考えが及ばないじゃないか。この先の可能性を奪ような行動をする人、この先まったく可能性のない人は、殺しても良いってことなんだよね」

若者の表情は明るい。

「沢山(たくさん)のエピローグを見ることで、そんなことがわかっちまったか。ホントの結末でもなかったつもりか？」

苦々しげにリリィは言った。

皆はその皮肉めいた口調も、何かに扇動された様子もなかった。

「様子ねえ？　魔神(まじん)とでも契約しそうかな。そんなことはいいや。ともかく、その一点、君達を殺したくないんだ。僕のするべきこととは関係ないしね。つまり、僕は誰を殺していいか、誰を殺してはいけないか正しい判断できるようになったと言っていいんじゃないかな。それこそホントの結末のよ

に」

ごくさわやかな口調でそう言う皆に、リリィは聞く。

「その、するべきことってのは、何なんだ？」

「それは……。ねえ、ほら、はじまったよ。そいつらから僕はここを守らなくちゃならないんだ」

皆は、ふと、虚空(こくう)を見上げて言った。

何かを感知したものらしい。

「一体何がはじまるってんだ？」

もう一度リリィが聞くが、皆は首を振っただけだった。

「すぐにわかるよ」

そして、咄嗟にひょいとザウンを抱(かか)え上(あ)げた。そして、軽く地面を蹴(け)って上に飛

リリィも王子も、どうすることもできずに立(た)ち尽くす。無手でやり合った時、まだ相手を測っていた。

う。

「このまま行かせてしまうんですの？」

「抵抗(ていこう)が可能とすら思わなかったのははじめてだよ……」

王子とリリィが小声でささやき合う。

「そういえば、あなた、先日の闘技場の戦いは見てらっしゃらなかったものね」

「闘技場で初めて出会ったときは態度を変えようかな……っと。だが、こっちはこっちでなんとかしてくれそう

な奴(やつ)が来たぞ」

リリィは上を見て、にやりとした。

咄嗟にザウンが上昇していく。さらにその先、遥(はる)か、空の世界に当たる部分に亀裂(きれつ)が入りはじめたのだ。

「上から、何か来る……？」

王子がつぶやく。

「最後にあっちにやった理由ね。先に事情がわかってりゃもう少し使いようもあったけどね。間に合っただ

け上出来だ」

リリィがにやりとした。

その言葉が合図だったかのように天井が崩(くず)れる。

瓦礫(がれき)と兵士たちから大地へと飛び出してきたのは、ブレイブ、すなわち、ヒロシだった。
「そいつだ。そいつを落とせ！」
リリィが叫ぶ。
ヒロシもそれを聞いていたのか、それともスーツが魔力を感知していたのか、一直線に大将へと突(つ)き進(すす)んでいく。
大将ザウンを上空へ放(ほう)り投(な)げて捕縛した。
ザウンは百メートル上空に舞い上がる。
ヒロシは動かずにいる大将に向かって突進。
しかし、彼(かれ)らが接触(せっしょく)すると見えた刹那(せつな)のことだった。
ヒロシの身体が、いきなり勢いを失い、ふらついて墜落しはじめる。
「え……おい……」
「あら……」
リリィも思わずうろたえた。
ヒロシはスーツをまとっていなかった。ただのカジュアルに身を包んだ生身で真っ逆さまに地面へと落ちてくる。
「何をやってるんだ……」

リリィは無意識に腕を伸ばしてヒロシを抱き留める。ヒロシとて飛翔魔法のひとつも使えるだろうから、あまりのショックに忘れていたのだろう。

問題は、そのショックを与えた理由。

「あれを……」

リリィをつついて振り向かせた手の平、下方に後方を指差していた。

そこには軍艦の扉が開いており、そこから何者かが出てくるところだった。

「ち、まだ誰か出てくるのか……」

リリィは舌打ちしたが、それに反応したのは、ようやく何が起こったのかを理解したヒロシの方だった。

「じゃあ、USDが……！」

そう口にする。

その通り、軍艦の中から姿を現したのはUSD――宇宙人だった。

「スーツは解除させてもらった」

嫌味なほどに冷静な口調だった。

「なんだよ、待ち控えていたのか」

リリィが毒づくが、宇宙人の反応は、どうもしゃっきりとしたものではなかった。

宇宙人は困惑していた。その目は何かを非難しているようでもあり、何かを気遣っているようでもあった。

「何故、私の許可無くこんなことをした」

賢人は皆にそう言った。

皆と賢人の間に流れていたのは、一種の緊張感だった。それは二人の間にかなりの距離があるにもかかわらず、リリィやトモ子にも感じられた。

「そりゃあ、賢人が一番悩んでいらないでしょ？」

皆の声が響く。

「君たち自身が耐えられるかどうかわからなかった。それが理由だと知ったはずだ」

「だけど、実際は大丈夫だったよ。やってみるものだね」

「そういうことじゃない。君たちを失ったら任務を遂行できなくなるじゃないか」

言葉の内容からはあり得ないほどに冷静な口調で賢人が言うと、皆からはひどく怒りと困惑に満ちた言葉が返ってきた。

「だから、結果として大丈夫だったんだ。つまりさ、これが僕の無事だったってことだ。ここにあなたが来たんだから、もう動き出していることにあなたも気づいたってことなんだよね？　それじゃあ、僕はその通りに動くよ」

皆の声は苛立ちに満ちているように聞こえた。

そして、皆は振り返って、ザウンを抱え直すと、ヒロシが開けた穴から大地へと飛んでいった。

賢人はそれを見送り、さして困ってもいないかのように芝居がかって肩をすくめた。

「困ったものだ……」

「痴話喧嘩を見せられたみたいでどうもね」

リリィはぼやくように言ったが、情報は依然籠っている。
「つまるところ、どういうことなのか説明していただきませんとね」
王子は冷たい目を賢者に向ける。
「私は、魔王を作り出す計画――ラバーズが研究所の細胞を盗んだ時からあった。だが、それは研究が不十分な時に凍結した。
これが私の計画」
賢者は言った。その妙な表現に戸惑いつつも、リリィは質問を投げる。
「じゃあ、もう動き出しているってのは、何なんだい？　そいつには魔王の力がいるほどのことな
のか？」
「戦争だよ」
賢者は言った。
「戦争？」
王子はいぶかしむような声をあげる。
、戦争という事業は、国同士あっては初めて起こしたそれよりも大きな意味を持たない。はっきり言えば、国同士の争いは対抗で
きる国同士がないためだ。つまり、魔王を作り出すことそのものが戦争を引き起こすという意味であり、戦争のため
に、と言われても、循環論法としか思えないのだ。
しかし、賢者はこう続けた。
「国同士が戦争をする国がある。いや、戦争をしたがらさせられる国というのが正しいのだろう」

「なんだってんだよ……一体。因子だけでボクらはどれだけ禁忌もんを見られるってんだい？」

リリィは首を振った。

○

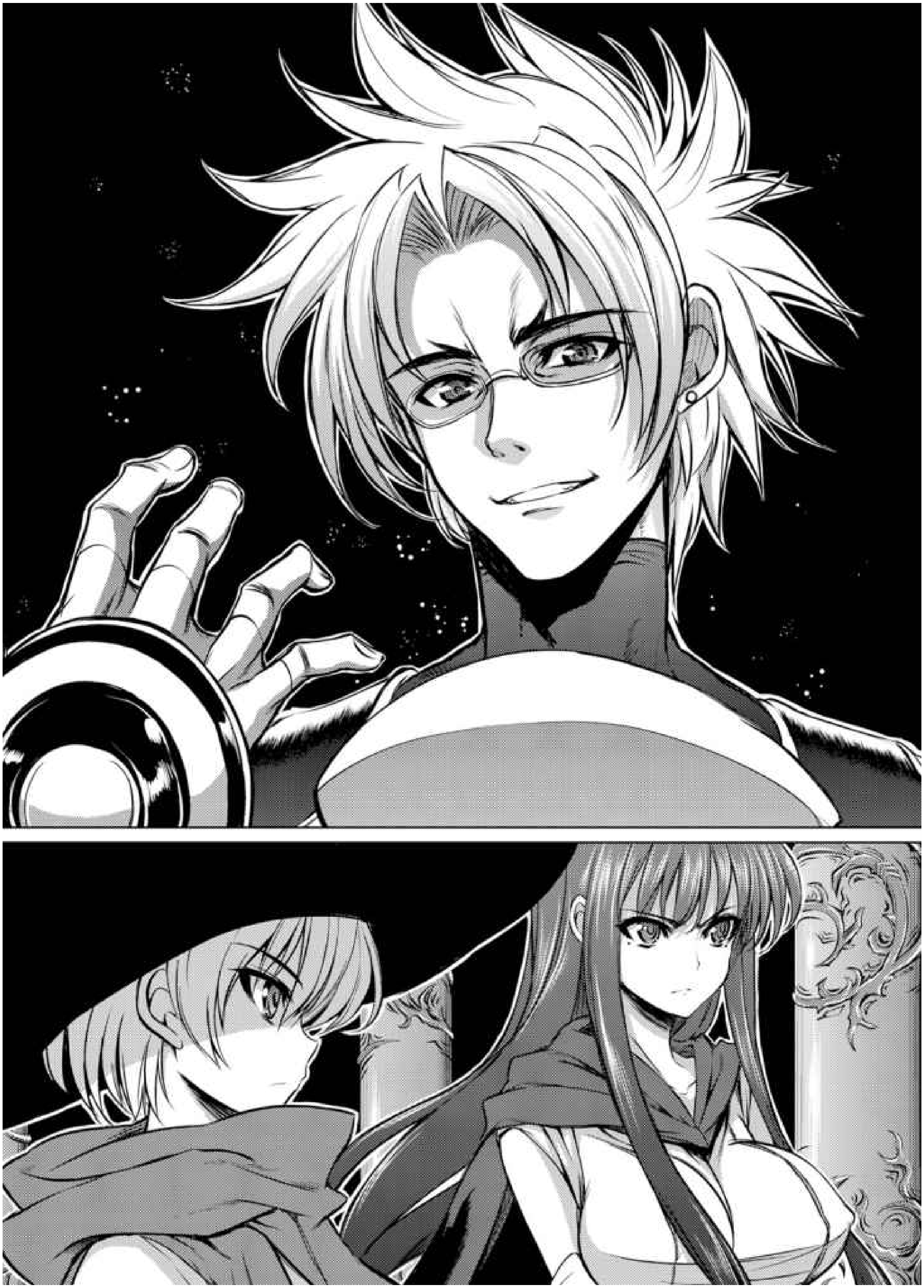
「我ら陰陽家の者として、覚悟（かくご）はできている……とは思うが」

そう言ったのは、那洋蔵（ようぞう）である。陰陽家の当主としての納父スハラの神道を担（にな）う家系でもある。

彼女が言葉を発したのは、陰陽家の座敷（さしき）においてだ。今は納ゆう子（こ）が控えている。天下人も不服はあるが、その

は、これが陰陽家さんの立場ではなく、陰陽家を司（つかさど）る陰陽家としての系譜であることを示していた。

「覚悟はできております」



納得したように言った。

「家名を汚(けが)さぬ覚悟です」

ゆうはそう言った。

彼女(かのじょ)たちが直面しているのは、かつて同時代に経験したことのない《戦争の気配》だった、無論それは年若さの未熟さから知らな

いことであり、こうして威厳(いげん)を保っているように見せつつも、その実ところ現状の把握(はあく)も途中の段階である。

スハラ神のものが消失していることと関係、スハラ指導者たちは何らかの事態から阻害(そがい)されていた。大陸内の映像が映し出され

たマナスクリーンは、ひとつのニュースを繰り返し報じていた。

《紛争前線の国家から分かれた《人族の国》で、王位の後継者(こうけいしゃ)を決め、新体制の確立を図(はか)ってきています》

《国内の交渉(こうしょう)の準備を進めていますが、彼が未だ休暇中(きゅうかちゅう)の皇帝(こうてい)陛下に対して反逆を働いた可能性があるとして、強硬な姿勢で臨(のぞ)むことにしています》

《交渉者は依然(いぜん)行方(ゆくえ)不明であり、所在を捜索されています。《人族の国》より危害が加えられた可能性もある情報を総合的に判断したものと思われています。彼の国の王は自身の家臣であったと主張しており、これは現地の国際情勢に疑義ととらえられており……》

画面は、《人族の国》の模様は違う、紋章の旗を持った船、数隻(すうせき)が浮かんでいるのが映し出されている。紡錘形(ぼうすいけい)の船体から察するに

潜水(せんすい)艦の紋章を持っているのは間違いない。これがその《人族の国》から送り込まれた船団であることは間違いなかった。

「巡視艇(じゅんしてい)の周辺から、連絡(れんらく)があったのは事実。そして、同盟国側の動向。しかし、それらの情報は伏(ふ)せていた。

もちろん、待機、という話」

遠藤はそう言った。

日本国の国益を守るための諜報活動を行っている。その一点において情報部の意思はひとつだ。だが、内閣とはどうも方針が違っている。内閣は公表す
べきでないことが公表されている。

「これらが内閣の失態と言われれば、不利になりますよね、お嬢様」

ゆうが不意に聞いた。アイドル活動をしているだけに、こういった方面には勘が働く。

お嬢様は肯定する。

「それが内閣の情報操作だとしても、我々は国民の望むように働かなければならん」

「アイドルの仕事とおんなじだ」

ゆうはそう言って笑う。

お嬢様はその態度をたしなめたが、皆の気持ちを代弁したものと納得したのか、笑みを浮かべている。

しかし、納得して承諾した様子はなかった。

「情報は統制できておりますが、次々と漏れていたならば、それを止めるのも我々の役目かと」

「内閣か」

お嬢様はやや厳しい口調で言った。

「我々は正しさを判断しない。それが正しいかどうかを考えていたら、誰も何もできない。そういうものなのだ」

「しかし……」

「我々は戦わぬ人のために戦い、他人のために人を殺すということだ。だから、我々は誰を殺してよいか選んではいけない」

「理屈としてはわかっています。しかし、何者かが組織を操っている。そして、それが何者かもほぼわかっている状態ではないですか」

絢子はやや語気を強めた。

それでも浅井は首を横に振った。

「正しい判断が本当に正しいと信じるしかない。過去に何度裏切られたことがあったとしても、そうするしかない。何が正しいことを見極めることができるはずだ」

「みんなと無事に帰ってくれば……」

絢子はつぶやくように言った。

「彼を信頼するのはいいが、彼に信頼されるような人物になるべきだ。そのように生きなさい」

浅井はそう諭す。

その時、服部忍軍の一人が、障子の向こう側に控える。気配を察した浅井が問うと、答えがあった。

「海上の哨戒より報告が入りました。何者かが警告を無視して、城内への侵入を試みたと」

「何者か、とは何か」

浅井ははっきりしない言葉を問いただす。

すると、緊張した声が返ってきた。

「それが、不可侵の頂です」
「何と？」
「はい。一人の若者が、連日山頂に挑み続けております」
「そんなことをする者がいるというのか？」
「信じられませんが、本当です。というのも、報告では、あれは魔王だと」
「魔王？」
絢ゆうが、同時に闇の向こうを見る。
「はい。ただし、魔王陛下殿(どの)とは違うものだ、と。しかし、発する魔力、マナの量も、まさにあの魔王の再来を思わせるほどだと言っていると」
忍者(にんじゃ)の首領、絢ゆうが困惑(こんわく)の表情を浮かべた。
——これは、何が起こっているんだ……？

。

「魔王の国……？」
リリィはいぶかしんだが、不意に開いたマナスクリーンでニュース映像を見て、なるほど、と納得(なっとく)する。

まだリリィ、三千子、ヒロシ、そして賢人は地上にいた。確かに王は天界人の彼女を引き留めていた。

「彼は自分のことを人間界の者と言っている。しかし、天国で戴いた聖域のある天国。そのあたりかなり無理はある」

賢人はそう説明しはじめた。

「人間を制しては国王も似ているということか」

リリィの言葉に賢人はうなずいた。

「しかし、彼は天使とは違う種類で動いている。彼も魔術の力はあるが、人間の精神を持っており、しかも、その

に関係はない」

その言葉に三千子は驚く。

「それは、わたくしたち黒魔術師の理想じゃなくって？」

「そういうことになる。しかし、問題はそこにあるわけじゃない。いや、人間と天使の違い以上にそこが問題な

るのかもしれないが。あの天国の船に乗っている。彼らがどう考えているかは後々関係するだろう」

賢人の説明は回りくどいものかと思われたが、リリィにはそれが何のための情報か理解できていた。

「そうか、天国から蓬莱の玉の枝を持ってやってきたのか」

「そういうことだ。その天国から何がきっかけとして地上へ来たかといえば、それしかあり得ない。そ

して何かを欲しているのかも」

「欲しているのは、蓬莱の玉の枝、全部のものか」

リリィが考え込むように言った。

「蓬莱の玉の枝の先にある、無貌の力を求めていることは間違いないだろう。そうでなければ、これまで接触して
こなかった理由がない。だが、情報としてはそこまでだ。情報的に接触した我々ＩＭ０８が得ることができた
のは」

「やはり情報的に接触していたんだな」

面白くなさそうにリリィは天人をにらんだ。天人はそれを受け流す。

「当然だ。だが、目的がわからないと言ったのは、その段階において、彼は目的を持っていなかったからだ。今回の目的は玉の枝の確保に

ることを欲していた」

「そこに何の問題がありますの？　それでいいじゃありませんか」

そう天子に問うと、天人は肩をすくめた。

「悲しいことだが、そのような態度は人間には通用するものではない。海外との折衝を行うモウファの神々は

は、警戒から、態度を崩さなかった」

「ノニモラのように、直接侵入できれば違ったのでしょうに」

その言葉に天人は微妙な顔になる。

「そういう面もあっただろう。だが、蓬莱の玉の枝と無貌の力が繋がる秘密をノニモラは持っていたというのが大き
い。つまり、この国が期待していることは、結局のところマーライ族から何かを奪ってくることなのだか
ら」

「そうなるのは理解できますけれども、結局の無貌の力というのは何ですの？」

「まだ判別かできない段階だ、今ザワンが何を企んでいるかとも関係している」
「あのなよっとした奴が魔王になって何をするつもりなんだ？　あれがザワンとかの仕業なんだろ？」
「ザワンが彼を騙している」
黒装束はそれだけ言った。
「なら、何故スーツを解除した？」
リリィはヒロシを振り返って言った。
「もちろん、彼を殺しても何もならないからさ」
黒装束はそう答えた。そして、ヒロシに歩み寄る。
「しかし、君には協力をお願いしたい」
「協力？」
ヒロシは首を傾げた。
そんなヒロシに構わず、黒装束はそう言った。
「そう。魔王と戦えるのは君だけだ。ザワンの陰謀を止めて欲しい」
ヒロシは答えなかった。だが、リリィが質問を重ねる。
「それじゃあ何もわからんねぇ。陰謀ってのは、何なんだよ」
「おそらく最終目的は人類の殲滅

さらりととんでもないことを賢人が口にした。

一同やや困惑の面持ちで黙(だま)り込(こ)む。

ようやくリリィが口を開いたが、それでも毒気を抜(ぬ)かれた様子。

「厳しいねぇ……。そいつは大仰(おおぎょう)すぎないかい？」

だが賢人は事実なのだから仕方ないとばかりに腕(うで)を組んで首を振る。

「ザウンは閉鎖的じゃない。外界人を生かし残す、あるいは簡単な言い方をすれば、案内人」

「げ」

「まぁ……」

リリィも手放しに信じられない、といった声をあげる。

「信じられなくとも仕方ない。が、結界の力とはおそらく我々の理解の及ばぬところから来た力だ。それを手に入れる

ため、鍵(かぎ)となっている宝玉の一枚を手に入れようという計画だったのだ。そして、それは帝国の中央に引き

しか使えない」

「じゃあ、ノニモラの陣営が手を出していればよかったんじゃ……」

そう言いかけて、リリィも気づく。

「……いや、そうか。宝玉の一枚はあいつらが守っているのか」

賢人がうなずく。

「だから、マーライ一族の生き残りも、異界人の侵攻を待っていた。そもそもは私の計画」

「……」
「我々の悲願たる力を手に入れるためのもの、だ。和平交渉であれば、あの魔王に何も言うまい。次の大戦が起きたことであれば、ね
すなわち和平の話し合いで解決の為に済めばそれでもよかったのだ。一方で、戦争も備えていた。自国の利益のため我々の配下を揺るが
しかねないものだからだ」
「なるほど。その為の戦力のパターンをザウンは推し進めているわけだ」
「そういうことになる。王国を拉致できれば犠牲は少ない。そう考えていた」
「凶悪なことだ。だが、合理的だね。うん」
リリィは納得いったように言って、歯をむき出した。
「そうなると、今は、王国は軍備を増強しておいて、現場は新しい魔王の軍の先遣隊がにらみ合いをしている、と
いうわけですのね」
王子は呆れたように言った。
「そうだ。だから、君には新しい魔王を止めてもらいたい。それが最も犠牲者を少なく救うことになる」
賢者はヒロシに手を差し伸べた。
ヒロシは賢者の視線を見つめていたが、竦んだように目だけを逸らした。
「どうせあんたのことだから、断られた時のことも考えているんだろ？」
すると、賢者はわかっていたじゃないかとでも言いたげに目を細めた。
「それはもちろんそうだとも。だけれども、君には心から期待している」

「良し、それは筋違いだ。あんたは、俺を自由に使えると思ってるだけだ」
ヒロシは首を振った。賢者に背を向ける。
「それも一面の真実には違いないさ。それでも、君はそうするしかない」
賢者はそう言ったが、ヒロシは振り返らなかった。
「降りる。あんたの思い通りにはならない」
と、リリィもヒロシの後について歩き出す。
「まぁ、ボクも彼のことはこき使ってるからねぇ。拗ねたのにはボクのせいもある。だけど、ボクも関わりたくはないかな。あんたと喧嘩したくはあるが、あんたの態度がそんな気を失せさせた」
年寄りのため息の後、やはりヒロシの後に続く。
「わたくしはその話の内容とは別に、やりたいことができましたわ。あなた、内容だけでなく、か隠している評判やら本心やらがありそうですけど。隠し事をしたり、自分の気持ちに嘘をついて魅力的になるのは女性だけでしてよ」
それでもさしたるショックを受けた様子もなく、つっ立っている賢者を尻目に、ヒロシが扉を開けて入った。後に続いていたリリィも踏み込みかけるが、ふと思い出したように振り返る。
「あ、そうだ。あんた、ひとつ読み違えてるよ」
「それは何かい？」
賢者が問うと、リリィはにやりとした。

「あいつは、ちょいと前からもう本の世界の者になってるんだよ」
そう言ってリリィは手を振って姿を消し、後は静寂だけが残された。

○

――やっぱり、物語を作ってるだけだよなぁ。
ヒロシは公園のベンチに座り、そう考えていた。
子供の頃の空想たちに救われ、その場から離脱することが出来たが、ラバーズに投げかけられた言葉はまだ心に引っかかっている。
――理想でしかないのは確かだから、言われていることは正しいんだよな。だから、今後もいいように使われてしまうんだし……。
「どうしたの？　ぼんやりして」
ぼんやりしていると、不意に声をかけられ、ヒロシは慌てて立ち上がる。
「ひゃ、は、はい！」
その姿に、ゆうは苦笑する。
「あはは、何やってんの？　おかしい」
帽子とメガネでゆうの印象が変わっている。公園には彼女の正体に気付いている者はいない。

「いやー、ちょっと考え事」

ヒロシは誤魔化すと、ゆう子がその手を引いて歩きはじめた。

「そんなの後にしてよね。このわたしがせっかく作ったお弁当持って来たんだから！」

公民館の会場の中で道の駅の撮影場所を探す

普段は落ち着いた映像が流れている公民館に設置されたマナスクリーンも、今ばかりはテロップ入りのニュースを放

両陣営のにらみ合いは続いていた。どうやら、衝突は避けられないようだ、との推測がなされている。ヒロシもゆう子もその内容を知っていたため、何も起こらないことを祈ってはいたが、当然のように相手の排除と傾いていた。簡単に退けることが不可能という論調は一致していたため、小競り合いにしかならないだろうと予測されているのだ。

もちろん、そうなったらゆう子も当事者である。今日がおそらくは最後の休日になるはずだった。その

に、ゆう子はヒロシを呼び出したのだ。

「あの辺で食べようよ」

公園の一角、高く盛り上がった芝生に、ゆう子はレジャーシートを敷いた。

「スポンサーからもらった新しい味のふりかけをおにぎりにかけたんだけど……」

「すっかりふりかけタレントっすねえ……」

そんな会話をしながら、ゆう子の作ったお弁当を食べる二人だが、周囲の雰囲気もあって、時折微妙な空気が流れる。

「[illegible]……！」

周囲に大きなマイナスクリーンを展開、演出を放っている雰囲気に気付いた人々はそれを見ることもなく周囲に集まることもなくただ通り過ぎていく。注目していないが、気付ける者もいない。

二人並んで歩いている人々、どこか声を潜めて会話をかわしている。皆に広がる自分たちの考えを知れてはたまらないと思っているかのように。

「場所変える？」

「どこに行っても同じっすよ」

「嫌な感じになっちゃったね、街」

「そりゃああんなことになってるんすから……」

「もう！　ヒロシ君が変なんだよ？　隣に星野ゆりちゃんがいるんだから、もうちょっと元気も出

のが男子」

ゆう子はヒロシの額をつつく。ヒロシは笑顔になるが、それはやや堅い。

「いやぁ、ちょっとやっぱりいろいろ心配なんすよ」

「心配？　大丈夫よ、わたしは結果は出ないもん」

「いや、ゆう子ちゃんは心配してないっすよ」

「え？　ちょっとそれひどくない？」

「いや、そうじゃなくて、たとえ結果出ちゃってもあっしが守りますから安心してって意味っす」

「おっ、さすがかっこいいなぁ」

ゆう子は屈託なく笑う。それでも、そう言った当のヒロシの笑顔には影がある。

「すると、お悩みは別なのかな？」

「ん、まぁ、そういうことっすよ」

「相変わらず意地悪なぁ。そんなんじゃ、わたしがかっこいいと思ったヒロシ君じゃないぞ」

ゆう子はそう言って、ふざけた様子でヒロシの肩にあごを乗せる。

思いの外近づいた顔と顔。ヒロシは心臓の高鳴りを感じるが、そのことがかえって思い切りの契機となった。

「その……ゆう子ちゃんは、自分は無理だと思われるような大きなことや、やるのが嫌なことを暗に要求されたら、どうしやすか？」

ヒロシはそう切り出した。

答えは思ったより早かった。

「えっ？　断るよ」

「そ、そりゃあそうでしょうけど、やれって言われていることをなんでやりたくないかっていうと、面倒とかどちらかというと自分がやりたいことがないからで、でも、そのやんなくちゃいけないことの責任を重んじて、そういう感覚があって、しかやる必要ないことで……」

って言っていて自分でもわけがわからなくなっているヒロシだが、それをゆう子は即座に理解したのか「ああ、それならば」と、ヒロシの言葉を遮る。

「それって、結局お仕事ことだよね　わたしは普通の人より変な仕事してるからわかるよ。妙な格好させ
られて　それはそれで嫌なんだけど、スタッフがいっぱいいて、結局やんないといけない
ような雰囲気になるんだよね　それで反抗しちゃうとはアーティスト失格なんて言われて、って責められちゃう
んだよ？　そんでホントにアーティスト失格だったらそういう子も諦められるけど　やっぱりホ
ントに自分のやりたいことがあってガンガン前に出ていかなきゃないとそうなれないし」
ゆう子の話すことは　ヒロシの置かれている状況とは無関係だったが　妙にヒロシには納得できるとこ
ろがあった。
「うん　そんな感じっす　あっしも戦うことを要求されているような　そんな感じがするっすよ。
でも　それには周りの色んな思惑がいっぱいあって　みんなそのためにあっしを使うとして
いる……。　そんな感じなんす」
「わたしの経験からすると　それは……」
もったいぶってゆう子は人差し指を立てる。
「それは？」
身を乗り出してヒロシは答えを待つ
「それは……　あきらめるしかないよ」
「え？」
あはは　と笑うゆう子　ヒロシは言葉に詰まる　が　ゆう子はさらに続けた。

「それって、アイドルと同じだもん。アイドルはみんなに勝手なことを言われまくっちゃう稼
よ。男の子と付き合ったりしていることがばれたら、裏切られた！　って言うファンの男の子でパニック
になるもの」
「はは……そりゃ、たしかにそうでやんすね」
「だから、そこはあきらめるしかないんだよ。だって、そう言われているのは、わたしじ
ゃなくて時雨守りなんだから。もちろん、自分で考えられるものじゃないから、わたしもト
ロシ君みたいに悩んだりしたよ。みんなの考える時雨守りは、本当のわたしよりも素晴(すば)らしい人ってこと
になってるし。でも、それは単に理想だってことなんだよ」
「理想だった？」
「そう。わたしが時雨守りなのも、理想だってこと。たまたまやったことがお客さんにウケ
ちゃったり、たまたま誰かが気に入るような顔をしていただけ。それがたまたまってことに
いているかいないかだけの話よ」
ゆうはそう言って、微笑(ほほえ)んだ。
「じゃあ、あっしがスーツを手にしているのは……」
「もちろん、そんなの偶然たまたまでしょ。だから、誰かに取り上げられちゃうかもしれないけ
ど、それはわたしの時雨守りだって同じこと。ファンのみんなから借りてるだけなんだよ。ア

イドルって。だから、わたしの[illegible]を流したり、って不良っぽいことをするとすぐに取り上げられちゃう
の」
「確かにそんなものっすねぇ……」
「だから、借りているうちはそれを好きに使えばいいの」
「でも、あっしは別に取りたいことはないっすよ？」
「ん？　あるじゃない。ヒロシの君がしたいことって、自分のまわりの人を幸せにしたいってことでし
ょ？」
ごく軽く言うとゆう子。ヒロシは自分のことを見透かされているような気がして、少し動揺する。ひどく
な内面ように思われているということだ。
「いや……確かにその程度、つまんない奴……」
「それが普通からしょうがないじゃん。それだけしか考えてないが大きな幸せにさせられるのって
のことだよ。だけどさ、そういう人じゃないとできないことってあるものだよ」
いたずらっぽくゆう子は笑う。
「普通の人じゃないとできないことって、なんすか？」
「感情を剥き出しにすること。ヒロシの君まわりにいる人って、国か会社かもっと大きなことを考えて
でしょ？　そういう人って、すぐ目の前の感情を忘れがちだから、そういう人に感情を思い出させてあげるの

そのゆうの子の主張に、ヒロシは納得できるものがあった。内容のことはともかく、世間の人間の感情はどこかに忘れてしまったような者も多い。

「そういえば、そうっすね……」

「うん。だから、ヒロシの君になれる勇者になればいいんだよ。みんなの感情をちゃんと表現してあげる
に」

「そうか……そうかも……。いや、そうだ。まだやりたいことはあった……」

ヒロシは自分を確認（かくにん）するかのようにつぶやく。

「ふふん。喜んでもらえたようで何より。アイドルの笑顔は伊達（だて）じゃないのだ」

自慢（じまん）げに言うゆうの子である。

と、そのとき、ゆうの子の持っている端末（たんまつ）が不穏（ふおん）な音を立てて鳴った。

ゆうの子の表情が変わる。

それを察したヒロシが、ぴくりとする。

「まさか……」

ゆうの子は端末の画面を確認する。そこには緊急情報が映し出されていた。

「はじまった……はじまっちゃったよ」

そう言って、ゆうの子は不安げにヒロシを見た。

「戦争」

ヒロシが聞くと、ゆうは首を横に振った。

「ううん。異界の門の前に現れて、家（うち）で言うことを聞かなかった女の子が、勝手に攻撃（こうげき）を開始したって」

「新しい…魔王、あの…後継者」

ヒロシはつぶやいた。

「ごめん。わたし、行かないと」

ゆうが立ち上がった。

その瞬間（しゅんかん）、ヒロシの目に力が戻（もど）る。

「行くよ。俺も」



「え？」

ゆう子がヒロシに目をやる。と、ヒロシはもう立ち上がった。

「ようやく見えてきた。やらなくちゃならないこと。そしてやれること」

背筋を伸ばしたヒロシは自分の顔を叩いて気合を入れる。

そして、ゆう子に笑いかけた。

「おかげで気付けた。ありがとう。ゆう子ちゃん」

はじめて見たヒロシのそんな顔。ゆう子は思わず頬を赤らめた。

「わ、なんか男の子って感じ……！」

3 空から降ってくる恐怖

ジャングルに転げ落ちた阿久斗は、けなを抱き留めつつも、痛みにうめいていた。

「見よう見まねでやったのはいいけど……」

「あははは！ 特にうまかったぞ。葉っぱに落ちるの」

ノニモラはそんな阿久斗の様子を見て、嬉しそうに笑っている。彼女の背の高い木の枝葉に身体をあずけて、その木の枝のたわみで衝撃を和らげ、下へ下へと次々に葉っぱを跳ねていくことで、地面にほとんど衝撃なく降り立ったのである。

それを真似した阿久斗といえば、けなを抱いていたこともあるが、ほとんどの枝を全て直撃してぶち折ってしまい、最短距離で地面に激突していた。マナが切れるのが一瞬遅れなければ、大怪我を負っていたかもしれない。

「あちゃん、大丈夫？」

けなが阿久斗の胸元で言う。

阿久斗は自分より大丈夫かとは言い返さず、一通り身体を動かしてからうなずいた。

「どうやら大丈夫だ。でも、マナが使えないのがわかるな。やっぱりまわりの木に吸い取られてる」

「それじゃあ、ここから子供の足では大変ね……。お水も持ってきた分しかないし」

けなが不安そうに言った。

と、そこに空中からころねがやや遅れて落ちてくる。それも当然だった。パラシュートを彼女が使っていたのだから。

やや離れたところに落ちたころねは、しばらく待っていると、パラシュートを手で巻きながらのを縫って近づいてきた。

「どうやらマナは使いませんね。魔力バッテリーを使いますが、戦闘行為などは無理です。同様に、道具も出せなくなります。皆さんと同じように食事をとればエネルギーに変えられますが、一週間も持たないでしょう」

ころねは言った。

「やっぱり苦いな。そうなると、歩いてここを抜けなくちゃならないのに」

問題は思ったより深刻かもしれない、と顎に手をやる。

が、ノニモラは気楽な声を出した。

「大丈夫だぞ。島くらい歩いて数日で横断できる広さだ。それに、ここの森は大昔に造られたものだ」

ノニモラは駆け出し、近場の木をするすると登ると、上から大きなボールのようなものを抱えて降りてきた。

「これは食べられる木の実だ。一年中生えてるから食べ物に困らないぞ。それに、夜になると光る木もあるし、ボる木もある」

ひょいとボール状の木の実を放るノニモラである。

受け取った果実は堅い皮を持っていたが、果実に近い部分の表面をよく見ると、うっすらと筋がサッカーボールの縫い目のよう

に入っている。そこに指先が引っかかるように手で力を加えてやると、ぱきりと簡単に皮が割れた。中から白い果

れる。ノニモラの顔を見ると、「食べてみろ」という表情をしているので、純白の果肉の一部を手でちぎった。繊維そ

れほど感じられず、スポンジをちぎっているような感触があった。口へ運んでみると、パ

ンと芋の中間のような食感と味

「なるほど、炭水化物の塊だ」

そう言うと、ノニモラは満足げにうなずいた。

「うむ。自然の恵みだな」

「でも、ここまで自然に調和されていると、やっぱり自然って言えないんじゃ……」

考えていることを素直に口にしてしまうのが人間の悪いところである。ノニモラは怒ったように口を尖らせる。

「だから、人間の言う自然じゃないという考えこそが不自然なのだ。ビルだろうが、道路だろうが、作られたそ

のあり方に適当に動いていれば、それは自然だ」

ノニモラはころねの方を指さす。

「自然じゃないのは、あるがままに動かないことだ。無理をしたり、やり過ぎたりすることが唯一の不自

のだ。食べる以上に取りすぎたり、疲れても働くのをやめなかったり、休憩している奴を邪魔し続けたり

に休憩したのにやめたら逆襲してくるようなのは不自然。自然に生きているものでないと自然の恩恵を

とす」

「自分自身の自然体のを取り柄としています」

泰然とこころねは言い放つ。

それには不気味な気味になったものの、なるほど、と阿見は思う。そして、その考えを深く知ってみたくな

なる。

「じゃあ、作られたのがテーマパークとしてであっても？」

そう聞くと、ノニモラはうなずいた。

「そこは楽しい場所として作られたし、事実そうだ。そこで楽しんで生活するのは当然、嘘を信じていると思われる

ことが多いが、本当のことって何？　本体は何なのかを知りたくなるのは本能だが、それもやりすぎると

になる。本当のことは千差万別わかる範囲だぞ。そうじゃないことで本当のことについて考えるとど

かで理解しにくくなる」

阿見は自分が少し離れているような気がしてきたが、ノニモラの言うことも理解できた。少し柔軟に考える

があるということなのだろう。

「それでも、嘘を信じ込んでしまう人は多いよ」

阿見が言うと、ノニモラもうなずいた。

「だとしても、自然体で生きていれば話し合ってなんとかなる。一人で日々を過ごすのは不自然だからだ。根本的な問題があるの

は、ずっと一人でいたり、無理して人に会ったりするからだな」

「確かにそうだ」

阿児丸はうなずく。

と、そこにけなから不満な声がかかった。

「ねえ、あちゃん。そんなにのんびりしてちゃだめだよ」

あまりけならしくない苦言だったが、その通りだ、と阿児丸は思い、軽く手をあげてノニモラに詫びる。

「話の途中、ごめん。でも、確かに移動しはじめないと」

「そうだな。ここがどこであっても西へ行けばいい。高い塔が見えてきたら、そっちが村から

ことはないぞ」

ノニモラが言った。

「あちゃん、荷物持って」

天子が落ちる時に投げ出し、近くに落ちていた旅鞄の脇に、けなは立っていた。そちらに阿児丸を呼んでいる。

「わかったよ。ところで、蓬莱の玉の枝は持っているかい？」

阿児丸が問うと、けなは提げていた肩掛け鞄から蓬莱の玉の枝が入った箱を出して見せた。

「ほら、大丈夫」

そして、箱を鞄に戻し、その時「きゃ」と小さく悲鳴をあげる。

「どうしたのさ？」

「うん、虫が飛んでたの」

「虫か。ねえ、ここに虫っているのかい？」

大木のジャングルであるから、不思議な現象も起こり得る。

「大木とはいっても、ここの植物は生きているからな、自然の魔力を媒介する力が出ているぞ。人を襲うようなの
はいないから安心しろ」

「そうなんだ」

けなは先程拾い上げた死人の腕を、自分の腕にからめる。

「じゃあ、行こう」

「ああ、そうだね」

死人の腕はうなずくと、けなはその腕を引いて歩き出すが、死人の腕は動かないので、けなはわずかにつんのめ
った結果になる。

「もう、あーちゃん、ちゃんと一緒に来ないと駄目でしょ？」

けなは頬をふくらませる。

「いや、けな。そっちは多分東よ」

「え？」

「そうだぞ。木の枝がいっぱいあって成長している方角が東なんだぞ」

ノニモラはそう言って笑った。

「大丈夫です。自分は内蔵しているコンパスがあります」

ころねがそう言って、確かに西を指した。

「むっ、じゃあ、気を取り直して……」
けなは歩き出した。
こういう時、誰よりも無邪気なのがけなである。こんな天気でも、歌いながら歩いて行く……はずだった。
いつものけなならば、だ。
「どうしたのさ？」
何度も聞いた言葉を、阿児は繰り返した。
「別になんでもないよ」
けなはそう答えた。
しかし、けなは阿児の腕にくっついて離れない。いつものように飛んでいないだけに、阿児としては歩きにくい。
「ちょっと離れた方がいいんじゃない？」
阿児は言った。照れて、とか、うっとうしがって、ということではない。純粋に、邪魔だと思ったから言ったのである。が、けなにとってはそうではなかった。
「うっ、そういう言い方やだ」
けなは泣きそうな目で阿児を見上げて、駄々をこねた。
「どうしちゃったんだよ、もう」
阿児は困ったが、それ以上は言わず、ただ西へと歩いて行く。

やがて、森の向こうに明らかに人工物とわかる塔が見えてきた。島は小高いものは木しかないから、一際高いそ
れは目印としては最適なものだった。

「あれが塔ね」

「そうだ。人工衛星を格納している」

「あそこにあるのか。高さはどのくらいなんだい？」

「千メートルまではないくらいだな」

塔は真っ直ぐな筒状のものだった。全体が銀色に輝いている。細かいディテールはここからではかす
んで見えないが、その天辺にぎらりと光る目のようなものがあるのはわかった。

「そうなると、ここから見えているとはいえ、距離はあるな。あの上についているものは何
い？ 光っているあれ……」

「あれは、サインだな。無貌の力が使われると光の色が変わるように作られたのだ。無貌の力は人の良心によって
だけ良き方に発揮できる。そうでなければ、いずれ無貌の力はその使い手を滅ぼす。良心が使えたかどうかがわ
かるということなのだな」

ノニモラは言うと、ひょいと私たちから離れ、近くの木へ登りはじめる。

「ここからだとゆっくり歩いて一日くらいかかるぞ。もうすぐ日暮れだから、寝るための場所を探そう。
あと、食べるものと飲むものだ」

塔の高さからすると、ノニモラの見立てが正しいのだろう。

「わかった」
と　白い人間は答え　木の上にいるノニモラに呼びかける。
「寝るための木って？」
「幹が光る木がある。　それと　葉っぱが大きい木が。　それを取ってくるだけでいい」
そんな答えと一緒に木の実がいくつか白い人間に向かって飛んでくる。
大きめのから小さめのものまであるが　それをすべて落とさずに受け取ると　さらにノニモラが
から落ちてきて、　どん　と白い人間の肩に　肩車の形で座り込む。
「楽に受け止めるなんてすごいな」
ノニモラは笑う。
「受け止められないと思って投げたのかい？　そりゃ問題だ」
白い人間も笑う。
「これって何の実なの？」
けながら白い人間の腕をよじ登るようにしながら　その腕の中の実をのぞき込む。
「小さめのが食べられる。　大きめのは飲み物」
ノニモラはそう言うと　先に立って歩きはじめ　やや行ったところで　振り返って白い人間たちを呼んだ。
「こっ　ちに　幹が光る木がある。　休もう」

阿比たちがそちらに行ってみると、確かに一本だけ、うっすらと光を放っている幹を持った奇妙な木が生えていた。
すると椰子の木のようにも見える真っ直ぐな幹だけに、まるで蛍光灯が垂直に刺さっているかのようである。
「人間が迷い込んでも困らないようにできているのか。ちょっと親切過ぎる気もするけど」
「そのかわり、あんまりたくさんの人間が暮らすとすぐなくなっちゃうけどな」
「ということは、この村は人間の集落かなにかがあるのかい？」
ふと真面目な顔になって問う阿比だったが、その腕を避けながら引いて、茶を止める。
「そういう話はいいから、食べようよ」
思いのほか、みんなが困った顔をしているので、阿比は渋々木の実を置いて、けなに座る場所を作ってやり、木の実の皮を剥いてやる。
「ごめん、お腹減ってた？」
「そういうことじゃないよ……」
妙に元気のないけなに、阿比は不安になる。
「困ったことがあったら言っておくれよ」
「む」
けなはうなる。そして一言だけ。
「……別にいい」
阿比にしてもその反応は困る。

「……わかったけど、何かあったら言ってよ？」

できるだけ優しく言って、ノニモラが初めて運んできた布団ほどのサイズがある大きな柔らか

い葉っぱを受け取り、それを石をどけた地面に敷く。

「片付ける。今日はもう食べて寝るだけだ」

ノニモラは、けなところねを呼び込んで、そこに座らせる。

「おまえらは慣れていないからつらいだろうけど、もうあと一日なんとかなるんだから、我

だぞ。安心してくれ」

ノニモラはそう言った。

「僕は大丈夫だから、けなを気遣ってくれ。でも、ここの生活が長引くと持ち物が足りなくなるかもな。そう言

はいられないね。いや、けなの体力もお米が足りなくなるか」

阿比知はそう言って、けなの方を見るが、けなはもともと木の実を食べていて何も言わなかった。

食べ終わると、さっそくノニモラが寝転がる。

「寒くはないけど、気になるなら葉っぱかけて寝るといいぞ。へムへムしたいところだが、我慢する」

そう言うと、ノニモラはあっという間にいびきをかきはじめる。

「……こりゃ、すごい。僕も寝ようかい？」

阿比知はけなに聞くと、けなは無言でうなずいた。が「ちょっと」と言ってその場を離れる。

トイレだろうと阿比知はうなずく。ノニモラにそれに適した木の見分け方を聞いている。

「ところで」
け止ながら不向うに姿を消すや、悪魔はそれまでほとんど気配を無にしていたかのようにしゃべらなかったころねが、阿凡にずい、と顔を近づけて言った。
「うわ？　何」
「陛下がいないから言いますが、陛下はお悩みの様子です」
「そのようだね。何が原因かわかっているんだったら言って欲しいな」
「原因はわかっています。あなたです」
阿凡は怪訝に思って問い返す。
「そうなの？」
「ノニモラさんに構い過ぎているからです」
きっぱりところねは言った。
「そりゃあ、今は彼女との付き合いが多いけれど、それだって別に……」
「悪意がないことはわかっています。しかし、陛下にとって主従関係になっているのだとお考えください。今のあなたは人としてでなく、魔王として振る舞っているに等しいのです。もちろん、それがあなたの本質により近いため仕方ないですが」
「そりゃ、ずいぶんな……。」とはいえ、確かに僕なんとかしなくちゃって思いは強すぎたかもしれない。普通は他人の家庭に踏み込んでしまったりしないものだ」

戸惑（とまど）いはしたが、兄上は納得（なっとく）する。
「そういうことです。しかし、しばらくは陛下も大きな目に遭うことを考えなくてはならないのも事実かも。その大きな目に遭いというのも、国家などというものを超（こ）えている可能性もあります」
「親衛隊の力か」
「それは陛下にとって自分と関係あると感じられる、力が必要となって当然です。あなたがたのように大きな力を持つことに何かしらの信頼があるわけではないのです」
「それは、そうかもしれない」
兄上は内心で、自らの浅慮を恥（は）じる。確かにノニモラにはある種の哲学（てつがく）があり、それは偏（かたよ）ったものであれ価値もあった。さらに言えば、ノニモラの考え方は共感できるものがある。帝国（ていこく）内の女性もあり得ると感じさせる何かが。だが、けながらそんなことから離れて欲しいと考えていることに改めて気付かされた。兄上の周囲にいる女性は、あらゆる意味で規格外な存在だ。けなも規格外という意味では、桁外（けたはず）れだが、生き方という点では普通の女性なのだ。
「……それじゃ、僕は謝（あやま）らないと」
「謝ってもどうなるものでもありませんよ」
兄上の言葉をあっさりと否定するところねである。
「え？　じゃあ、どうすれば？」
「それは簡単です。抱（だ）くのです。昔の偉人の言葉で言えば、ヘムヘム」

「あのねぇ、そういう冗談(じょうだん)は……」
そう言ってから真剣に、しばらくころねの反応を待ったが、ころねは冗談と否定しなかった。
「冗談じゃないの？」
「真面目です。割と」
「割と？」
「まぁ、自己満足、大抵は個人的な嫌がらせです」
「あのねぇ……」
「しかしながら、陛下が欲しているのは、安寧の消滅のはず。まぁ、挿入(そうにゅう)しろとはいいません。それも陛下が望んでいないでしょう」
「っ挿入て……」
「その言葉を選んだのは個人的な嫌がらせです。いや、それはそれとして、愛してあげてください。抱きしめるだけでもよろしい」
「う……ん、それは、確かにそうかもしれない」
真面目に真剣に悩んでしまう。
「それでは、待機時の一時停止モード、通称(つうしょう)睡眠(すいみん)に入りますので、あとがごゆっくりどうぞ」



ころねはそう言うと、寝ているノニモラの横に座って目を閉じる。機嫌も自分も取り戻したようだ。

そこにけながが戻ってくる。

「なんかすごい大変だったよ。トイレの始末」

面白(おもしろ)そうに言った。少しの間だけ、なにか戻ったかのようだった。

「個人的には否定しなくていいからね」

電池の切れたように、床に座る。そして、ごろりと横になった。けなもその脇に転がる。それからしばらく

は無言だった。

すでに陽(ひ)は完全に暮れていて、外の光が水面に当たり、けなの顔を照らしていた。木の葉に覆(おお)われて、空の星は見えず、遠く

ところどころにある外の光だけが、寂(さび)しい町の灯のようにぼんやりとした光を闇(やみ)の中に浮かばせてい

た。

「いろいろあったけどさ」

[illegible]が切り出す。

「え？」

けなの戸惑った声がする。

「いや、なんか、謝ろうと思って」

[illegible]がそう言うと、思いの外、軽い声が返ってくる。

「そんな、謝ることなんて、あちゃんしてないでしょ？」

「でも……」
知らず知らずのうちに死人間は真剣（しんけん）な声になっていた。
「……ここのところ、あまり君のことを考えていなかったような気がするから」
「えへへ……」
けなは死人間と、そうだらしなく笑う。死人間が身を寄せてきた。
「ようやくわかってくれたなら、それでいいや」
「やっぱりつらいよね。僕にとっては、なんか日常になっちゃってるけど」
つぶやくように死人間が言う。それに答えたけなはささやくように言う。
「つらいというのも違（ちが）うけどね。なんか怖（こわ）いんだ」
「怖い？」
「あたしだけどあたしじゃない。あたしがいるんだよ」
「うん。その人のことも知っていると言えば知っているな」
「そのあたしは、今のあたしよりもすごいことをできるように思うの。あたしが今はできないようなことを、ぱっと出来ちゃうんじゃないかな」
「それも、わかるよ」
死人間は、けなが感じている怖さがわかったような気がした。

「だから、ずんずんすごいところに行っちゃう。あちゃんは、あたしじゃなくて、あたしじゃないあたしの方を大事にしているような気になってきちゃって……」

けなの声が細くなる。

「君も、そのあたしじゃないあたしは、けっこううまくやっているように見えたけど」

「だから怖いんだよ。あたしはもうどこまであたしだかわかんないもの。でも、やっぱ

のあたしがいて、それはそんなに大したことが不本意なわけじゃないから……」

声に震えが混じるのを誤魔化すかのようにやや早口にけなは言い、それに気づいた阿児がそちらを見ると

ふとけなは顔を逸らした。が、阿児の目には、けなの涙が微かに輝くのをとらえていた。

「けな」

阿児は呼びかけたが、けなは振り向かなかった。

「だから、あちゃんもあたしのことをあたしじゃない方のことで気にかけてくれてるよう

な気がしてあたしはあたしじゃないあたしの方じゃないあたしにしかできないことって

かって考えてそしたらへムへムしてくれたらあたしを大事にしてくれているような気が

て……」

そう言いながらけなは傍目に見てもわかるほどにしゃくりあげはじめた。

「あたしじゃないあたしもあたしみたいなところがあるからあたしなんだけどあた

はあたしじゃないことをしていることに気づいているときもあるからあたしはあた

じゃない。あたしとしてお話していることがあって、こうしているあたしもあたしじゃないかもしれないって思えてきて……」

自分でもわけがわからなくなるようなことを言って肩を震わせているけなを、純也はぐいっと抱きしめた。

「ひゃ」

けなが短く声をあげる。

「その……うまく言えないけど」

純也はけなの髪に顔をうずめるようにして身体を引き寄せた。

「う……うん」

けなは完全に固まっている。

「君は僕の大事な人だよ。必要とするっていうのは、役に立つとかそういうことじゃないよ。少なくとも僕にとって大事なのは、君がごはんをいっぱい食べることや、横で昼寝をしていることなんだ。だから、理由なく横にいてくれることが必要なことなんだよ。理由がないことが僕にとっての理由」

純也はささやき、抱きしめる腕に力を込めた。

けなは小さく息を吐き出し、身体をぶるりと震わせた。

「……ごめん、痛かった？」

「ううん……。違う、なんか嬉しかっただけ」

けなはもぞもぞと身体を動かしはじめ、春人の方へ身体ごと向き直る。

「ちょっと……照れる」

春人は正面からけなの目を見つめる格好になったことに、頬を染める。

それはけなも同じだった。

「でも、こっち向いてたほうがいい」

けなが言い、春人の胸に顔を埋めるようにして顔を隠す。

「うん」

うなずいて、春人はけなの身体に回した腕を片方あげ、けなの髪に指をからめた。頭を胸に抱えて、軽く撫でてやる。

「くすぐったい……」

けなは首をすくめ、それからやや顔をあげて、春人の方を向いた。

やや潤んだ瞳に引かれた春人と見つめ合う。

二人とも、お互いから目を逸らせなくなる。

無言のまま、ただ吐き出す吐息と、心臓の鼓動だけが、濃密なリズムを刻む。どちらかが声を出したら、そのまま弾けてしまいそうな、緊張感が二人の間だけに満ちる。

「……するの？」

けなが言った。

阿児は無言で語る。
何も言わぬまま、ただ見つめ合い長い時が流れる。
髪に埋まった阿児の指がぴくりと動き、けなの頬を撫でながら首筋へ滑る。
けなが小さく声をあげた。
そして……。
「隠れてヘムヘムするな！」
飛び起きるような早さで阿児とけなが離れた。
しかし、ノニモラの方からおそるおそる振り返ると、この声をあげた人物はどういうわけか、よだれをたらしてすっかり眠り込んでいるのだった。
「寝言なんだ……」
「すごい寝言だね、まったく……」
けなは驚き、阿児はぼやく。そして、どちらからともなくくすくすと笑い合う。
「あたしも寝る」
けなはそう言って、今度はかなり無邪気に阿児の胸に飛び込んできた。
「ああ、もう寝よう」
阿児はけなの首の下に腕を回してやる。けなはそれを枕に、横向きに身体を丸めて阿児の腿に膝を乗せた。
「でも、これからきっと何か……」

「え？」

けなの無言の問いかけは、闇に返る。

しかし、返事はなかった。けなはすでに静かに寝息を立てていた。

◯

「ふーい、お嬢、それは難しいですよ」

そう情けない声を出したのは、服部忍軍の若手の一人である。

「だけど機材が全部揃ってるんだよ？」

自分の要求をごり押ししているのはゆう子である。

ここは、帝都から南西に数十キロほど離れた所に置かれた忍軍の管理運営施設。壁際に並んだ腕利きオペレーターが四人ほど、控えているのだが、そのチーフにゆう子が持ちかけたのは、撮影した独自の映像を全国に向けて流す案である。

ヒロシを送り出す一方、ゆう子もなんとかして彼の役に立とうというのだ。

「そういう問題じゃないんですよ。CIMO8の連中の仕業でしょうがね、映像の内容も全部預かりにしちまったんですよ。そりゃ、技術的には可能ですが、誰も責任取れませんや」

中年の男の忍者は、同じく中年の服部ゆう子にたじたじとなりつつも、なんとか抵抗している。

「そりゃ、責任はお父さんが取るからいいんだよ」

「無茶苦茶言わないでください。ええとですね、いいですか？　我々は独自の情報網を持って情報を発信しています。もちろんCIMO8に言うようにやられたくはないですよ。しかしですね、限られた範囲だけでなく、ネットワーク全体が、どうやら監視されているんです」

「そうなの？」

ゆう子は少し驚いて言った。

「そりゃそうです。ゲリラ的に映像をネットワークに流すのは、今や誰でもできますからね。ところが、どのような方法を使ったものか、関東内部のネットワークに映像を流すこと自体を禁止することまでやっているんです。今のニュースは全部、検閲されたものどころか、関東内部で捏造されたものです。我々の入手した情報とは食い違いがありますよ」

男は諭すように言った。

しかし、これで引き下がるゆう子ではない。

「ブレイブが現場に向かってるんだよ。それを流せば、みんなもホントのことに気づくよ」

「そりゃそうかもしれませんがね。どうやってCIMO8が関東一円を制圧したがっているって証拠をあげるんですか。それが出せない限りはどうにもなりません」

「だから、その決定的証拠を現地に与えるんじゃん」

「そんな不確実なもののために関東の人々を犠牲にはできません。小さいお嬢、わかってください。それに、になっても勝ちますよ。そうなれば、後のことは小さい問題です」

「それでいいわけないよ。そりゃ、異世界に行ってことはみんな知らないから、戦ってても問題ない感じす
るけどさ」
ゆうは困って後ろを振り返る。そこには、協力してもらおうと絢子の伝手で呼び出した淑恵けいすがっ
ていた。
「然しながら、オペレータさんの言うとおりだよねぇ」
淑恵は腕を組んで、考え込むように言った。ヒロシをラバーズから救出に向かった際の具体的な事情は聞いている。ザワンと
やらの陰謀があるらしい、とも。
「誰も証しに信じないし、私たちだって、CIMO8との因縁がなければ、ザワンの件かって笑
ゃうんじゃないかなぁ」
「じゃあ、どうしろって言うんです？　ブレイブはもう向かってるんですよ？」
ゆうは淑恵の端末に表示し、脇の空中に投影していたマナスクリーンを指す。そこには、ヒロシから
られる映像が映し出されていた。今は、どこまでも続く雲の海を飛んでいるところだ。淑恵はヒロシの間抜けの
で、ネットワークには流れていない。
「そもそもオペレータさんの話通り、ネットワークに流すことが不可能なのだとしたら、電子エキスパートで
ある何者かがやっているんだろうねぇ。超人的なことだよ。コードネームが電子の妖精とかなく
とかいうのがいるんだよねぇ、きっと」
うんうん、と淑恵はうなずく。

「そういう話はいいですから」
「そなの？　ともかくさ、可能性はふたつ。その電気を消すか、打ち勝つか。こっちはちょっと無理かなぁ。私もハッカーの誇りがあるから言いたくないけど、今のところはまったく歯が立たないもの」
「もうひとつは？」
相川は改めてゆう子に問う。
すると、彼女は苦笑を浮かべた。
「こっちは簡単だけど難しい。首相を説得するんだよ」
「え？」
「内閣の長は首相だし、全軍の指揮権は首相だから。んで、首相は中国政府の言うことに従ってるだけ。すなわちUSDの言うことを聞いてる」
「あ、そうか……。でも、そんなのできるわけないじゃん！」
ゆう子は拗ねたように口をとがらせる。
が、彼女は急ににやりとした。
「まぁでも、こっちの方が可能性あるよ。ネットワークにちょいと挑発的な書き込みを流せばUSDの耳は
くじゃん？　そんで、どうやら彼女に興味持たれたってことは、ザウンの動向が気に入らないはずだよね
え。少なくとも、彼女が何を見てやることはできるってわけ。あとは、CIMO8の内部問題でしょ」
「そんなうまくいくかどうかわからないことに賭けるしかないの？」

ゆうは千夏に向って言ったが、由紀恵は笑顔を返した。

「そりゃ、君だってうまくいくかどうかわからないことにの家全部を賭けようとしたじゃない。華麗なる賭けってのも興味あるけどさぁ。結局のところ、まだはじまったばかりなんじゃないの？

ショータイムってやつは」

いつもの癖が、やたらとクサい言い回しをする由紀恵である。

「そのショータイムですが……」

千夏がおずおずと口を出した。

「どったの？」

由紀恵が問うと、千夏は緊張した声で言う。

「作戦がはじまりました」

「結局、作戦ははじまってしまったかぁ」

由紀恵はヒロシから送られてくる映像、CIMO8の関係もと送られてくる映像を見比べる。ヒロシからの映像は巻き戻すと、まずマナの閃光は空から落ちてきている。

「あちゃー、ここでも仕掛けたのは、やっぱりそのコードネームエスパーとかが先」

そして、関係された映像は、それから数秒遅れてからのものしか存在していない。周囲の潜水艇からのミサイル発射。

「もうちょっとブレイブからの映像がはっきり映っていればなぁ」

「ブレイブ、本体飛行形態の速度ないんですよね」

「エスパーがブレイブの推進装置て細工仕掛たんだろうな。ということは、ブレイブは間に合わないかもしれない」

健太は思わずつぶやいた。

「CIMO8は計算てやっているんですか？」

「そうだろうね、陛下、皇帝（こうてい）の定期連絡（れんらく）を絶ったことも彼の策謀だろうし」

満足言と考えうなずいた。

「どうやら直接戦を避（さ）けようとしているみたいで、再攻撃も来ず、逃（に）げ回（まわ）りながら、時間稼ぎさ
れている様子です。が、相手けんもほろろの対応しているとか。もちろん、相手対応るので紛争は継続
ですが、停戦連絡とれればこうはならなかったでしょう。先方は停戦連絡とろうとしているわけで
すからね」

ゆう子はそれを聞いて、あからさまに不機嫌（ふきげん）な顔で詰（つ）め寄（よ）る。

「そこまでわかってて、なんで戦争止められなかったの？」

「そりゃあ……」

健太は困った顔で首を振る。

「陛下、やりたがっている奴が指揮いたら、そんなもん止められるわけないですよ。それに我々って、こういう風になるなんてわかっていませんでした。考えて見てください。帝国は本来友好国の

ないんです。いや、因果なんて無にも因果にした。だから、はじめてわかったってところです
よ。平和な戦争をやろうと思ったらできるってことが」
「そりゃそうだよねぇ。みんなが怖がってたのは因果を荒らした魔女だった。語り継がれてきたのも
を一度も口に出さなかったってことだったからね。でも、その因果に触れてみると、確かにこの国のシステム
が平和になるかもしれないってことがよくわかるよねぇ。いや、もう平和にはなってるんだけ
どさ」
滅ぼしのマナスクリーンを指した。
そこでは、因果の世界の解体が次の啓によって沈められていた。

○

「間に合わないっていうのか？」
やはり蓄積されていたのか、とヒロシは思う。
どこまでも続く注進が飛んでいる。周囲に遮るものがないだけに、遠くの砲火がはるか遠方にあるここか
らも見えているのが人を苛立たせる。
——さっきはああいう風に締めたけど、何もできないってのか？

啓介（日本国）と（魔族）の間で何が起こっているかは、完全に把握できてはいなかったが、どうやら啓介［illegible］を攻撃して
いるということは理解できていた。それ以外わかっているのは、ゆう子たちを介して送られて
くる日本国内で流れているニュース映像。
もちろんその映像はタイムラグがあった。加工されているのだから当然だ。それはひとつのストーリ
をなぞっていた。つまり、交渉が日本国のせいで決裂し、日本国側から攻撃が開始されたと。
すでに魔族側の状況は映像でヒロシのもとにも届いている。もうすぐ追いつくとはいえ、その頃には全
しているのではないか？
轟音が聞こえてきた。火柱が高くあがる。ようやく到着したその場所は、すでに戦はあらかた
わっていた。最後の魔族の集団が、轟沈の場に居合わせたということになるらしい。
海面が広く泡立っている。破壊され、沈んでいく［illegible］立たものだ。油の膜と、飛び散ったパーツがその上に浮
ぶ。
その上空に、ヒロシが一度みえた相手がいた。経過を考えれば、［illegible］なくそこにいたはずだが、美しさは
一切損なわれてはいなかった。相も変わらぬ優雅さ、妖艶さ、そして残忍な魅力を湛えた姿の
ままでそこにいた。
そして、啓介が行っていたのは、その姿にふさわしい、いや、それよりもより残忍な行為だった。
れぬ［illegible］の姿が、［illegible］魔力によって上空に持ち上げられていた。肌の色合いはやや違う。なにより大きいの
は、ひれ状のものが腕についていることだ。［illegible］のは明らかである。が、その彼もシルエット

は完全に人間の、その人間の苦しげな表情が、強引に空中に浮ばされている。その数は、数千人を下らない。数からするに、おそ

らくは、数隻の飛行船の乗組員全員を並べてだろう。それだけの数の人間の一人一人の魔によって、空中に強引に固定されている光景。人の心が

ら湧き上がってくるような、恐怖を感じさせる。

そして、それ以上に、醜悪。それ故に、目を逸らすことができない。瞬間には、その光景を完全に感じさせる変化が

ロシが感じた最後にやってきた。

空中に停止していた人間の首を、ちぎり取った。

血が、一メートルほども上方に飛び散る。それがシャワーのように周囲に降り注ぎはじめる。その血が、空中に固定されてみ

せた、無数の人間の顔を浮べた水のように、無数の深紅の球体が周囲を彩る。

それがどれほどの魔によってなされているか、理解できる者にとっては、それは驚愕に値し

た。が、そうでなくとも、驚異を覚えるのは、舟谷がそれを明らかに楽しんでいたことだった。

悲鳴を殺されることを拒否され、空中に固定された無数の人の顔がゆがむ。が、その悲鳴も自身のかのように、首から下を失った全員の胴

を二つにちぎった。胴を切断されても、人間の意識は継続。そのため、ちぎられた人の表情はまさか、と叫ばんば

かりのものになっていた。舟谷がその反応を楽しむ、つもりでそうしたのは、彼の表情を見、実に満足そうに

微笑んだことからわかる。

ヒロシは、はっきりとその光景を見ていた。遠方からスーツに装備されたズームカメラを通しての映像だった

が、無数の人の表情、その各の表情は、はっきりと見て取れた。

残虐(ざんぎゃく)、残忍、恐怖、怒(いか)り……そんな感情が遅れてやってきた。身体の芯(しん)に堅(かた)い物が押し込まれ、全身が熱気を持ったような感覚があっただけだ。耳は聞こえず、ただ爆発しそうな何かが内側から外を押(お)し広(ひろ)げる。おそらくは以前で……いたのだろう。

その瞬時、はじめて怪物がヒロシに目を向けた。いや、最初から気づいてはいたのだろう。もしかしたら、気づいていたために殺さずに留めたのかもしれない。

ヒロシとは対照的に、怪物は涼(すず)やかな表情を浮かべていた。

「虐殺(ぎゃくさつ)をここまで綺麗(きれい)に見せた人っていないんじゃない？ 純粋な芸術作品かな？ いや、残念ながら面白いな……いね」

怪物はヒロシに向き直り、穏(おだ)やかに微笑んだ。

それは、熱したヒロシの頭を冷やしてしまうかのような姿だった。

上空に浮かんだ大きな球体、それはいくつもの小さな球体によって構成されている。陽光に輝く粒(つぶ)は、風に吹(ふ)かれて幻(げん)想的(そうてき)な虹色(にじいろ)の波をその表面にさざめかせていた。中央は美しい、多角形が再び広がっている。まるで良くできた模……としか思えなかった。だが、そもそもそれは誰が描(えが)いた作品ということなのだろう。自分の姿の……し、他人の命を使って、殺害者の意識で描き出したオブジェだ。

「なんだろうと知ったことか！ そこを動くな！」

ヒロシは突進(とっしん)する。スーツに命じてマナキャンセラーを起動させ、プラズマの球体兵装をすべてスタンバイ状態に

「焦らないでほしいな。ここからが綺麗なんだ」
怪人はそう言って、手を振った。
すると、再び、西の方から現れたかのように緑の水球が落ちはじめる。血の雨が周囲に降り注いだ。
血によって、虹がかかった。
それは通常の虹と変わらぬ七色のはずだった。が、ひどく不気味な色に見えた。
「貴様を倒すなんて、簡単なことなんだよ！」
虹を裂いて、ヒロシは飛んだ。
しかし、怪人は後ろへ飛んでそれには取り合わない。
「わかっているよ。だから、逃げる。君のスーツは借り物だけど、許されている限りは君のものだから
ね。でも、いつ解除されるか、僕はわからないんだ」
「どうだって知ったことか！　永久に限りはやってやる！　逃げるな！」
ヒロシは叫ぶが、怪人は行動も言葉も、軽やかにそれをかわす。
「嫌だよ。もし、君のスーツが解除されなかったら、あの人が僕を殺すことを許したってことじゃない
か。判断を間違ったんだ。逃げるよ」
怪人は滑るように空を飛ぶ。自らの手で空中に黒い扉を作り出す。そして、その中にするりと消えた。
「待て、こら！、貴様、これをどうするつもりだ……！」
ヒロシは叫んだが、その声は血の雨が降る海に、空しく響いた。

《落ち着いて。映像は記録されたから。内容聞きなくても、USDには届いているかも》

ゆうの子の声が響いて、それでヒロシはやや落ち着きを取り戻した。内容は意識できなかったが、長い間潜っていたのかもしれない。

「北さんの遺体撮影に役に立ったんだ。感謝するよ」

ヒロシはそう言って、スーツのヘルメットに取り付けたカメラと端末に触れた。

「海面で撮影してから帰ろう」

そう言って、惨劇が行われた区域の海面に近づき、これを映像にして録画する。血は海水に薄れてその色も失われていた[cut]が、浮かんでいる死体はすでに、鮫が群がって来ていた。

《ひどい……》

ゆうの子の声が聞こえたが、ヒロシとしてもそれ以外にどう言葉を発して良いのかわからずにいる。苛立[cut]せに、鮫を傷つけることもできなくはないが、それをしたところで何の意味もない。

と、鮫が襲っている塊の中に、まだ死んでいないものがひとつだけあることにヒロシは気づいた。と[cut]ばっちりでも受けたのだろう。横たわって浮かんでいるのは一匹のイルカだった。ひれの部分か[cut]じりとられ、白い腹を上に向けていた。今も下から鮫につつかれ、時折ざっとその身体が揺れる。

――こいつも戦いに巻き込まれて死んだっていうことなら可哀そうだけれど……。

そう思いながら見ていると、イルカの腹がそれまでとは違う動きを見せた。

「え？」

ヒロシは思わず声をあげる。

イルカの腹が内側から何かに押されるように盛り上がりはじめたからだ。

と、イルカの中から刃物がずるり、と外へ突き出された。それはじりじりと腹を縦に切り裂いていく。

「誰か出てくる……」

ヒロシは身構えた。

やがてイルカの腹を割って、中から腕が出てきた。白甲冑の者の腕であることはすぐにわかった。

——そういえば、王国を逃した、みたいなことを言っていたな……。

話では、この先遣隊ともいえる白甲冑隊は、王国に乗っていたはずなのだ。

ヒロシの目の前でイルカの血にまみれながら姿を現したのは、堂々たる体軀の若者だった。血にまみれ貼りついた髪の毛の間から、鋭い眼光がヒロシに向けられている。

「少なくとも、俺はあんたの敵にとっての敵だ」

ヒロシはそう言った。

すると、その白甲冑の若者は、イルカの腹からするりと海へ滑り込んだ。鮫が血の臭いに惹かれたか、すうと、何匹かが若者に寄ってくる。若者はナイフを一閃させ、その鮫の尾ひれだけを微かに傷つけた。それだけで、鮫もう若者には近寄らなかった。

若者は海に何度も顔をうずめ、ナイフを腰（こし）のケースに収めると海水で顔をぬぐった。髪を両手でなでつけると荒々（あらあら）しく精悍（せいかん）な顔があらわになる。

「外の様子を身を切られるような思いで見ていた。君が何者かは知らないが、仲間のために叫んでくれたことには感謝しよう」

若者はよく響く声でそう言った。その口調からは落ち着きと威厳が感じられる。

「友を残してしまったことには恥（は）じ入る他ないが、仲間の無辜（むこ）のイルカの命を奪（うば）ってまで救ってくれたこの身だ。今は君に酬（むく）いるために動くわけにはいかない。私の仕事が終わったならば、なんなりと言ってくれ。私は東の果ての王国、マリン」

「ブレイブ」

ヒロシは呟いた。

と、マリンはうなずき、海へ戻ろうとする。その瞬間、ヒロシの心にざわめくものがあった。気がつくと、マリンを呼び止めていた。

「待ってくれ！」

「何？」

マリンが顔をあげる。

ヒロシはマリンに手を差（さ）し伸（の）べた。

「あんたのために働かせてくれ」

マリンはいぶかしげな顔になった。

「そうしてもらう理由はない。それがこの時代の慣習にすぎぬかどうか考えてからにしてくれ」

そう言われて、ヒロシは無言で語る。が、改めてマリンに手を伸ばす。

「それなら、皇帝に会わせるところまでは働かせてくれ」

「皇帝？」

「こちらも情報は聞いている。もしあんたが本格的な解放を望んでいて、それが皇帝の後継者問題の整理ってことなら、とあんたの利害は一致する」



ヒロシは言った。

やや考えたものの、マリンはヒロシの手を取った。

「感謝する。勇者」

。

一方、別行動をとっていた不二子は、後輩男性のアパートに押しかけていた。

普通、若い女の子が男のアパートに押しかけるという行為は、やはりそこはかとなく色っぽい匂いがする

ものだが、今回不二子がやったアパート押しかけには、そのようなニュアンスは微塵もなかった。

どちらかといえば、押し込み強盗に近い。

「答えてもらいますわよ」

不二子はアパートの天井裏からロープを垂らし、床に座り込んでいた男の首をくくっている。足元のちゃぶ

はひっくり返っており、その上に乗っていたラーメンのどんぶりが転がり、中身の麺もスープも床にぶ

ちまけられている。

「な、何を答えろって……?」

首を軽く絞められて、抵抗もできずに足をばたつかせている男。頭にはひどい寝癖、分厚いメガネをかけてい

た。かつて黒魔術師の長であった、鈴木一成である。かつて、というのは、[illegible]っ守ってきた

を、まさに今、首を絞めている三下に奪われたからであり、さらに一般人の探偵たちに捕えられたことで、それとの関わりを絶つことを望んだからだ。が、そうして生み出させた失敗の三下に踏み込まれては、もう立つ瀬がない。

「資料だけではわからないことがあったからですわ。いいえ、実は資料にあたった結果見えてきたことがあると言ってもいいですわ」

三下がそう言った。

すでに一成から奪った能力者についての情報は手に入れている。そこで手に入ったのは、むしろ個人的なものばかりで、そのネットワークや噂についての情報はほとんどなかったのだ。故に聞きたいのはその一点なる。ある程度予想は成あれば、大人ての話に経よって、能力者たちの噂についても詳しいはずだ。

「事件と能力者と何か関係がありますの？」

「なんだ、そんなことか……って、あのパスワードから検索できる能力者データベースには書いてなかったな、確かに」

苦しげな声を絞り出し、ゆるめろ、と手首を指す。

三下がややロープをゆるめ、もう一度問うた。

「それなら、関係があるってことですのね？」

「私だって確証がある訳じゃないが、事件についての噂を聞いて、ピンと来たね。国中の噂が立ち始めた頃から、能力者たちは〈外〉に出て行ってた。そいつらが国を造ったんだろう」

「たしか、加寿子は自分たちは死んだ、と言っていましたわ」

「君はデータベースは見たんだろう？　確かにそういう風になっている。だから、私もそう判断したという

だけだ。もしかしたら疑問の向こうにはあるかもしれないがね。あんたが何を死と定義しているかは

らないが。もし、自分自身を否定して、あの世界の理想のためなら、異世界に入ってしまった方がいいだろうさ」

彼はそう言った。その投げやりな言い方に、子供はまたロープに力を込める。

「もしかして、結局何もわからないってことですの？」

「うわ……ちょっと、違う、違うって。こういう話なんだ」

彼女は苦笑った後、会話するように、咳払いをした。

「単に自分が若いから世界を言うつもりじゃないでしょうね？」

「いや、例の実験の話……。そもそも、魔法ってシステム自体、本来は人間的な話はある。つまり、神の力を使ったシス

テムを構築してきたとして、人間の世界は誰もリソースすべてを使うというのは当たり前の話だ。だが、殺し

にならぬためにルールを設けた。そして、ルールから逸脱した存在が魔法」

「その話は何度も聞きましたわ」

「そうだ。だが、それは内部の人間だけの話と異世界という存在を知って気づいた」

「どういう意味ですの？」

「もし仮想世界が変更されて、自分たちの仮想空間の理想とする世界が未来も、滅びはしないだろうということさ。人間は自滅するだろう

が」

一成はそう説明した。天宮ですらそこまでは理解出来る。
「なるほど……。そういえばそうですわね」
「そうだ。だから、魔法によって戦争が起きるとしても、人類が滅びるかどうかは確定していない」
「そこも納得できましたわ」
天宮はうなずく。
「そうなると、一番不可解なことにならないか？　魔法が主張していた通りの戦闘兵器としたら、力が過ぎる。余分な神性を持
ている通り、姫神が人類を滅亡するために作られたのだとしたら、逆に力が足りない」
「魔王が姫神の全部のリソースをすべて使えるというだけなら、それが人類に及ぶ何であるはずがない……」
天宮はつぶやく。彼女はいかに姫神は異端な考えの持ち主だったとしても、結局は天宮らの規則に縛られている。
が、そこから解放されてみれば、確かにそう考えるのが合理的なのだった。
「……でも、知っているはずの魔法が、目的など存在しない、と……」
「彼女は嘘をそう言っていた。あるいは真実を知らなかった。そういうことはあり得る。人神と魔王の関係があるとしても、人類を滅亡するための力そのものは、魔王にも姫神にもないんだ。あるとしたら姫神が決まっている。つま
り、姫神の神……その本来の目的の様がいる、ってことが正しいんだ」
一成の無茶な理屈に合っていた。そして、天宮の漏れ聞いていた大和望一郎の無謀にも合致する。
「まさか、結局の本当の神が存在する……と？」
天宮は苦い思いとともにそう口にした。

「そりゃ、私はぞっとしないが、宗家のお家騒動に異界の存在が介入しては、そう考えざるを得ないね。君子って、そこが不安になったから、話を聞きたいと思ったのだろう？」

一成、すでにゆるんでいたロープを自ら外して、土を見た。

孝子はすでに未来から動きはじめていた。

――すべてが、宗家の神の存在を示唆しているなんて……。そんな怪話を誰が信じきるって言うんですの？

言いようのない不安に孝子は襲われていた。

4　色のない炎

海を眺めていた。しかし、その風景は、ロマンチックなものではなかった。

——自国をこんな気持ちで海を見つめた者はいないだろうが……。

絢子は、海の向こうの町、自分達が生まれ育った場所に建造された都市部を一望し、その向こうを見ていた。都市部も映像で送られてくるが、敵の動向を探るには目視が有効なことも多いと、昔に作られたとおぼしきマニュアルにはあった。

絢子その指揮官、服部忍軍が総指揮を任された者である。総指揮権を持つものは父が執っているが、当然ながら最前線にその身を置くわけにはいかない。一族の者を置くことで面目を保っているというわけだ。

その海の町は戦艦の砲台が揃っている、地上兵士、そして戦車、いずれも自国のものが最新鋭装備されている。その砲門はいずれも海に向けられていた。

そして海の向こうには、水平線に張り付くようにいくつもの影が見える。それは何隻もの戦艦だ。

——しかし、あれが動き出すことはない……とゆう子は言っていたが……。

絢子はゆう子から詳しい情報を聞いている。それはこの場で働いている兵士にも伝えてはいない。

——日本国と中国はひとかどの取り決めがあるということだ。そして、戦端を開かぬよう言い含めているそうだが……。

ゆう子が嘘をついていないことはわかるが、そのマリンという国が戦争を放棄していることは

なる。それよりも大事なことがあるということなのだろうか。

「何も起こらないといいが……」

思わずそう口に出した綱吉である。

「お嬢様、この場はお優しさは禁物です」

黒服の男がそうたしなめてくる。

綱吉も軽くうなずいた。

「わかってはいるが、あれを見てしまっては」

あれとは、啓介が解放した魔獣が暴れた映像のことである。しかし、それはもちろん編集されたバージョンだ。提供したのは

らということになっているし、その後の経緯は記録されていない。

啓介の強さは、圧倒的に思えた。それ自体は演出されたものではないだろう。日本政府がどれほど本気だったかはわか

らないが、魔術的な戦闘において圧倒的、いや、桁外れだったことは確かだ。

「自国民への被害を心配していらっしゃるのはわかりますが、そのような情けは禁物です」

「いや……気になるのはそちらではない。あのCIMO8のエスパーが世界中から認められていくこと

が恐ろしい」

綱吉の懸念は、相手の義務だった。日本国内の魔族解放を打ち破ったのは魔王ということになっている。しかも日本の威光により

れ伏した阿久斗を魔王として、その配下の魔人を派遣しただけ、ということだ。

「確かにあれが傍にいて制御できているとは思えませんが……」

「そういうことだけじゃない。怖いのは人の反応。日本政府としてはそういうことになったなら人間は問題ないことになっている。その魔人のイメージの変化。日本の外部という存在を視ただけでそこまで変わるとは」

網納は嫌悪と言うより驚きを込めて言った。

「日本政府の立場から見た日本人の方が認識されただけです。もちろんお気持ちはわかりますが、そのようなものです」

それは網納も理解できていた。だが、理解できるだけに違和感を感じてしまうことがひとつあった。

「それなら、さらに外部の存在が出てきたとき、私たちはどういう顔をしていればいいんだ？　日本政府の人間達だって、そいつらと対決するのか？」

「今そのようなことを考えるときではありません」

たしなめるように言われたが、網納は納得してはいなかった。状況が今まで嘘と信じてきたものの存在を肯定しているのだと網納自身が感じ取っていたからかもしれない。

「人間の物語として周囲に認識されているとはあいつがしつこく言っていたことだが、物語が収まらないものが出てきたとき、それだけで大きな物語が起きそうな気がするのは何故なんだ？」

「お嬢」

「……いや、すまなかった。私の危惧はお飾りとしての役割の結果そう。そもそも起こるとは限らない衝突に備えているだけだ。起こったとしても小競り合いに過ぎないさ。そもそも我々が負ける要素ない。なあ、そうなのだろう？」

結局、何も信じていないように言うと、執事長は大きくうなずいた。
「もちろんその通りでございます、お嬢」
しかし、その執事長もやはり心からのものではなかった。
――このような時に強くあるというのは誰もできないことなのだな。
結局、[illegible]視線を戻し、長く息を吐き出した。
[illegible]っているすべてのことが嘘なのではないかとまで思えてきていた。

○

「そのマーライの一族の村に向かえば、皇帝に会える可能性があるということなのだね」
マリンは自分の[illegible]抱えているヒロシに聞いた。
ヒロシは海上を飛んでいる。[illegible]淑恵から改めてマーライの村の座標を確認し、うなずいた。
「まだ[illegible]はないけれど、皇帝は[illegible]ついている。大丈夫だろう」
マリンから依頼されたのは、皇帝の[illegible]接触だった。蓬莱の玉の枝のある場所に行ければなお良いと
のことだ。そこまで運んでやれば、戦争は起こらない可能性も高くなるはずだ。[illegible]戻るよりも[illegible]のだと
う。
「なぜ、国は[illegible]取り戻すだけで、戻らない？」

「国王でありながら、王冠を戴くということは、王国の絶対的な権力を握っていないことなのだ。貴族議会が実権を握ってい
る。私は彼の暴走を止められぬ」
「貴族との内戦を選ぶと？」
「我は王国を恨んでいる。まして、あれを見られては」
「それは、わかる」
「私も生きていることを伝えたが、貴族の中の国王派閥を粛清した。私にしても、そこまでは認めざるを得ない。だが
の目的は、王家の王杖より恐ろしい、無貌の力を封印することだ」
マリンはそう言った。
無貌の力の話が食い違っていることにヒロシは気づく。
「無貌の力が恐ろしい？　力、そして王国を恨んでいる理由というのは？　聞きたいことがいろいろある。最初から打ち明け
てもらえないか？」
「神聖帝国から、脱出した人々の国、王国。帝国の神というシステムを使った統治に反対した結果、戦争となり、敗れた結果、海へと逃
れた」
「どうして海へ？」
「そこしか逃げ場がなかった。帝国軍に追われていったこともも大きい。それになにより最大の理由は……」
「最大の理由？」
「……いや、よそう。悲しい事実だ」

マリンは首を振った。

ヒロシは質問しなかった。

「それから俺たち大人たちの、帝国同士だけの、関係を保ってきた。帝国の、交流は禁止。それは大きな範囲では守られてき

た。それでも異世界人が帝国内に上陸したことはあったのだがね。噂話にはなっていただろうが」

「怪物が、出たというような噂はどこにでもある。でも、外務省がそれを見逃していたというのは

じられないな」

「いや、我々もマナの使用という点は同じなのだ。故に、外の世界に対して認識されたはずだ。我々は神に借りる独自のシステム

を持っている。魔術は誰もが平等に使えるシステムだ」

「それでも、争いにはならないのか？」

「個人のマナ量に応じた魔術しか使えない。あの魔人のように。個人のマナ量を多くするような技術は禁じられ、それ

は厳格に守られてきた。国内でも高威力の魔術装置はあれ、そう多くはない。武器の携帯が禁じられていない、社会と同じようなも

のだと思ってもらえれば理解できるだろう」

マリンは答えることを大魔人に呼吸だ。

「それがつまり敗北の原因になってしまったということか」

「マナ使用の武器を搭載していたし、マナキャンセラー機構もあった。だが、向こうの戦闘力がそれを

えていた。そういうことだ。国内で稀有な、マナ粒子を制御することが一番得意なのだと理解できてしまった

よ。同時に、それを放棄した世界の組織は恐怖を表するが、あれを超える方法のひとつしかあるまい」

「それは？」
「封印された技術よ。マナの関係ね。核融合爆発という、君たちも知識としては知っているだろう」
「核の究極エネルギーなのは知っている。もちろん一切の制御が不可能であることも」
「それを搭載した上にマナの力がある。そういうことだ」
「……まさか、精神の力というのは？」
はっとしてヒロシが聞く。
しかしマリンは笑って首を振った。
「いや、それは違う。精神の力は、一般的にはこう伝わっている。我々の精神が源泉となった力だと。それ故に真の理解をもたらすと信じられている。私もそれを使うより、研究しなければならないと見ているが」
「本当は、それは人を導く力だと」
ヒロシが言うと、マリンは困った顔になった。
「精神論と言いたいが、それは精神論的すぎないだろうか。つまり、人を導く力などあるはずがない、というやや虚無的な見方だが」
「マーライの民族の精神論では、良い心で使えば良い結果、悪い心で使えば悪い結果となっているとか」
「それも一般的な解釈の基準になっている点で、不確かな認識と言える。もちろん真の理解というのも、漠然とした言い方すぎるが、精神と道徳というイメージがある以上、そう簡単に触れていい力とも思えない」
「それなら、幸い、その精神論は気分に合うだろう」

ヒロシは笑みを見た。

扉を開けているバイザーは　その情報をマリンにも伝えた。

「では　誰　その力を解除しようとしているわけではないのだな」

マリンの顔がほころぶ。

「ああ　心配ない」

ヒロシはそう言って笑った。

やがて　マーライの一族が島に見えてきた。

○

「もうすぐ到着だぞ」

ノニモラははしゃいで言った。

目的の塔はすぐ近くに見えている　というか　大きくなりすぎていて視界に収まりきれない。首を上に向けると　頂点の光がかすんで見える程度。

「村に着いたら連絡しないと。心配している人も多いだろうし。そうだ　村から　帝国は連絡可能なのかい？」

一瞬の間と　ノニモラはうなずいた。

「村はマナが使えるぞ。だから連絡できる」

「それならば、転移ですぐに帰ることはできませんか？」

ところねが聞いた。

「そうだね。まさか、ということもある」

真丸もその疑問を抱いた。

しかし、ノニモラは首を横に振った。

「村から島まで転移できるほどのエネルギーは村にはないな」

マナが無尽蔵でないように、使用されるエネルギーにも当然ながら限界がある。転移魔法陣など、継続されるエネルギーを使用しているにすぎない。転移魔法陣は土地あるいはマナそのものを媒介にエネルギーが伝達されており、海上や谷合の内面ではほぼ均一にエネルギーを使用できるが、マナを吸収してしまう大木に囲まれたマーライの森では、独自のエネルギー施設込みが不可欠になる。

「遠距離転移が可能と言っても、大量のマナを通してだから、効率も良くないしな」

ノニモラはそう付け加えた。

「でも、ノニモラの力が特殊だったね」

真丸も聞いた。学院で教え込むほどに植物を育てた力が尋常なものではなかった。そして、瞬間移動したノニモラの

も

「あれは、ちょっと前にも言ったが、魔族の力の一部を使っているのだ。良きに心は良き力、それほど難しいことじ

ゃないぞ」

無邪気（むじゃき）に、ノニモラは笑う。
「純粋な魔力か。それが何かはわからないけど、そうなると一番手で触れているマーライの一族の族長に従うのが良いような気がするね」
「とにかく、ついたらちゃんとしたご飯を食べたいな」
けなが言った。
「お米を食べてないね。そう言えば」
「残念ながら、米はそんなにないぞ。モコモコを食べる」
「え？」
「大丈夫、うまいぞ。それに別の場所に来たら別のものを食べるべきだ。それにしても、昨日は不機嫌（ふきげん）だったのに、今日はおまえ、機嫌（きげん）が良いな。こいつにへムへムしてもらったのか？　あれはやり方によっては病みつきになるからな」
ノニモラはそう言ってけなの尻（しり）を肘（ひじ）でつつく。
「だからぁ……」
けなは困ったように顔を赤らめた。
「そ、それはそうと、ジャングルが開けたけど……」
ノニモラの言葉通り、大きな木の間を抜（ぬ）けたところで、前方の視界が広がった。低い草の向こうに、人の住む集落が見えた。
「おお、村に帰ったぞ」

ノニモラが感慨深げに言った。

建築物は、目につく限りでは数十から百程度。どれも石造りの建物ではなく、草の屋根をふいたシンプルなものだ。それが

にある。道は石が敷き詰められている。道の向こうには川が流れているようだ。

「おい」

ノニモラが大きな声をあげると、数軒の家の窓から、顔を出した者たちがあった。その誰もがノニモラのような

の色。やたらと好奇心旺盛そうな大きな目を持っていた。

「旅人を連れてきたぞ！」

「爺さんを呼んでこい！」

そんな声とともに、わらわらと村人たちが現れる。仕事をしている者はそれほどいないのか、老若

男女様々な年齢層がいる。それは子供や大人の顔に違いが見れないところから窺えた。服装は誰もがラフ

な格好という点は共通していたが、中には周りの人たちと変わらぬ様式の服を着ている者もいる。

「まぁ、この村はユルいからな。決まりはあるかと思うが、気にすると腹が減るから。おまえらもここで

はユルくなってくれ。パックパックがユルいと男は言わないが」

ノニモラはそう言って、村の奥へと歩き進める。

それに間抜けな、ころねが続くと、物珍しそうに村人が顔をのぞき込んでくる。

「えへへ……」

けながら手を振ると、村人たちは同じように手を振った。

ころねがVサインを作ると、村人の一部も真似をしはじめた。それに気付いたころねが、左右の手を頭の後に回

て、左右の耳を上に引っ張る。やはり村人たちが笑いながら真似をする。ころねはさらに首に腕を巻き付けるようにし

て、腕の肘をぐいっと顔に近付け、肘の先端を舌で舐める。村人たちは真似しようとして、それがどうやって

もできないことに戸惑い、驚き、やがて互いの肘を顔に近付けようと躍起になりはじめた。

「変なこと流行らせるのやめなさいね」

瑞羽が言った。

ころねは瑞羽の手を取り、肘を奇怪な角度に回す。

「関節を外せる方法です。手が届かずに困ったときにご利用ください」

「誰によ。そんな機能付けたの……」

瑞羽が何か言っているうち、ノニモラが目的地に到着した、と告げた。

そこは村の端、公園のようになっている場所で、中央の噴水台にも機能があり立ち並んでいそうな建物があった。この村は機械化された建物の

り巡らされていて、そのどちらが本来の姿とも言えない雰囲気があった。住居などは機械的な素朴なものが好まれ

ているが、数少ないインフラ維持のための建物は、本来の機能よりも装飾性に言える様式が揃っているのだった。

しかし、その公園の建物は、インフラの維持のためのそれとも違う様式だった。どちらかといえば帝都で見たあの

の建物同士の趣がある。おそらく、帝国黎明期の建物はそのようなものだったのだろう。そ

の建物はら水が生えているかのように太く、高くそびえているのが、何者かが封じたとされている塔

「ここが星行船があると言っていた建物？」

阿久比は聞いた。その建物は、[illegible]ほどか、規模はそこそこの[illegible]程度のサイズに阿久比は見えた。[illegible]に入っているとした

さすぎる。

「そうだぞ。[illegible]はそれほど大きくない。おまえらの国の基準とトラック何台分くらいだな」

そうノニモラが言った時、建物の中から一人の老人が歩み出てきた。顔じゅうに深い皺が寄っていて、目も口も皺の中に埋もれ

ている。[illegible]、顔を上げて見ていると、いくつか線を引いただけにも思えてくる。想像もつかないほどの高齢

なのではないか、と阿久比は思った。

「おお、長老よ」

ノニモラが大きく声をあげた。

と、長老の顔の皺がぱっくりと開いて、声が聞こえてくる。

「よく帰った。こちらは？」

「[illegible]」

ノニモラが説明する。けなと阿久比が挨拶すると、長老は笑っているのかなんだかわからないふわふわ

したうめき声のようなものをあげた。

「ほぉふぉおぉ。それなら、[illegible]の王様もこの場にあるということだ」

「あります」

けなは鞄から出した。

ノニモラが説明する。

「おお、一緒に持ってきたぞ。この『皇帝双牙』はノニモラに半分譲ってくれると言った。だが、話し合うことにして、こっちに来たぞ」
長老はうなずいた。
「それでええ。じゃあ、中へ入ってくれ」
そう言って、先に立って歩き出す。
勇大たちは続いて中へ入る。この建物は何かを隠して造られたのではないか、と勇大は思った。
「塔の上の、『星行の船』の鍵だが、それだけではない」
長老は誰に聞かれるともなく口を開いた。
「我々が力を使うためのものだとノニモラから聞きました」
「そうだ。だが、それも微妙な言い方だ」
長老はエレベーターに乗り込む。勇大たちも全員乗り込むのを待って、長老は最上階にある階ボタンを押す。上昇し、ドアが開くと、そこは広い、壁のないフロアだった。中央に太い筒状のものが占めている。それはこの建物を貫いている塔だろう。その塔の壁面の一部が開いている。穴という表現が適切でなければ、筒の内側が空洞になっており、そこに入ることの可能な扉があるという意味だろう。
「これが『星行船』」
長老はその扉の中を指した。

そこに鎮座していたのは、ノニモラが言っていた通り、トラック数台分のサイズと思われる巨大な緑色の円筒形の物体だ。いや、未来の物というのは大袈裟であってこそかもしれない。それは横倒ししたミサイルのようなものだったからだ。生体金属の表面には、窓もなにもなく、文字らしき模様も書かれてはいない。

「ここには魔神の力が封じ込められている。我は何もなくとも、その力の一部を感じる」

長老の側近ノニモラはうなずくが、具体的にはそれは説明しにくいことではあった。

「つまり、魔神の力とは何なのですか？」

「不可思議な力だ。いや、それではわかるまい。あえて説明すれば、因果律そのもののようなものだ。万有の力が詰まったような、今ここにあるのはその一部が、それでも凄まじい力がある」

「そんな力が存在することって、あんまりないと思うけど……」

続けながら言うと、長老はうなずく。

「その通り。だが、知っておいてもらわないと困る。魔神の力は生き物と思ってもらえばいい。意思を持って使い手を選ぶと伝えられている。それは魔神の力が自ら主を選ぶと言い換えても良いかもしれない」

「なんでおじいさんはそんなことを知っているの？」

続けながら聞くと、長老は塔の壁面に触れた。そこにマナスクリンが現れる。

「わしは四百年生きてきたからや。もっとも、もう研究することはないから、言い伝えるだけになってしまったが」

「研究することがない、ってどういうことです？」

「死ぬ間際の問題じゃ」長老はあの奇妙な笑い声をあげた。

「ほぉ ふぉ おぉ。因果の糸がかたまり、とわかってしまったら、結局その先はどうにもなるまい。少しの知識のある者に向けて説明するとこうなる。この星を行く船の中にあるのは場の方向である。要するに平たく言えばからっぽの器だけだ。だが、その器に何かを置いて意識が出現する装置をとりつけたところ、これが反応した。それを反映したものが、この塔の先端というわけだ。外からの状態の変化を色で表しただけだ」

「からっぽなのに反応した？ それは単なる間違いではなく？」

「何もない空間からエネルギーが生まれていることを確認したよ。観察者の方の無限の力ということかもしれん」

「無限の……」

阿頼耶識は言葉を失う。

「だが不可思議なのは、それをわしが物体に作用だけだ理由。観察者の方の因果の意志がその反応を変える。ノニモラが言ったよう

に、この村で長く暮らす者は観察者の力の一部を貸してもらえる」

長老の言葉に、阿頼耶識は縛りがたいものがあった。

「でも、それは勝手にこちらが縛られているだけではないのですか？ 因果の情報を理解する力など……」

「それは当然の考えであり得ない、と誰が考えた。だが、生き物は相互作用していると分かる。情報は丸ごと出すぎない。そ

の仮定の議論はあっても、一定のルールがあるとすぐにわかる。それよりは、何もない空間から湧いてく

るという事実の問題。これは複雑に結合したアミノ酸が意識を生まないとすれば、その意識は何もない空間から湧いて

くるに違いない、と否定できない。考え方はむしろ共有しているように見える。が、一言で言えばこうだ。事実から

がない」

賢者は言い切った。

「事実だ」

「ノニモラは魔術師の力に気に入られている。彼女が一番うまくその力とやりとりできるようだ。人だって、の好き嫌いはあるだろう？　だが、その好き嫌いの根本的な部分は説明できるものではない」

「納得できなくとも、事実は事実ですね」

何も引き出せなかった。が、そうなると実際の問題が浮上してくる。

「それでは、ノニモラを遠ざけてくださったのは……」

「そうだ。結局はこの力に対するアプローチを考えなければならん、最低限ノニモラよりも魔術師の力に好かれること が問題となるだろう」

最後まで説明も納得もできずとも、事実上魔力を増幅させるに等しい効力があり、それを自在に使えるというのは大きな問題にな り得る。

「だが、まずは実験の土台の枝を元に戻すといい」

賢者はそう言った。

「元に戻す？」

けながら、不思議そうに言うと、賢者は星行船を指差した。

「魔術師の遺体は、この塔も船もすべて、魔術師の力で造られたもので、使い方も内部もよくわかっているものだ。もちろん の枝えも、それは魔術師の力を制御するためのものだが、上手く使えるために備えられた安全装置のようなものだ」

「消去出来るためなんだ……」

「それ故（ゆえ）に、蓮華の十一枚が、自ら主を選ぶと伝えられているのだろう。無数の力を入れ、自身が消せるかどうかを決定しているかのように振（ふ）る舞（ま）う、と思える」

「じゃあ、これを使ったら、その人だけが無数の力を使えるとか、そんなことじゃないんだね」

「ノニモラのように、近くにいるだけで使えるようになる者もいる。それは、安心していい」

「それじゃあ……」

ユリナは鞄から箱を出し、そこから蓮華の十一枚を取り出した。

鈍（にぶ）く光る、それは、いくつかの石のついた、手に持てるほどの木の枝。

長老が星行の船の舳先に触れた。そこにボルトをはめ込むような穴が現れる。

「枝をはめるようには見えないけど……」

ユリナが戸惑っていると、長老が言った。

「石は組み外れる」

その言葉通り、石はいくつかの枝とともに外れた。中心となる枝だけが、端に丸い石をつけた短い杖（つえ）となって残った。

星行の船に開いた穴に、杖を差し込むような形で石をはめていく。石の大きさにあわせた穴が開いていたので、すべてがぴったりとはまり込んだ。

「これでいいんだね」

けなが杖をなった、蓮の玉杖を軽く振るが、そこで何が起こるかを確かめる前に、きょろきょろと周囲を見回しだめた。

「どうしたの？」

死人の間と、けなはまだきょろきょろとしたまま「虫が……」とつぶやく。

「虫？」

「そう、虫がいる……きゃ！」

けなは悲鳴をあげた。その手から蓮の玉杖ははじき飛ばされる。

「何っ……！」

「えっ……！」

同時にノニモラが声をあげる。蓮の玉杖ははじき飛ばされたのでなく、そのまま外へ窓を飛んでいた。

しかし、蓮の玉杖が垂直に飛翔（ひしょう）したのかと思いきや、その杖に張り付いていた虫と見た小さな影がみるみるみるき

くなっていく。

「おおお!?」

さすがにこれにはノニモラも驚きの声をあげていた。

最初は小さな蠅（はえ）かなにかの程度の大きさだったものが、やがて十センチほどのサイズにまでなってい

たからだ。

「そうか、こいつが船の……！」

純也は一瞬で理解した。

十センチサイズの男が、自分の身長と同じ程度の長さの金属の羽を一枚抱えて飛んでいる。拡大縮小できる能力を持っているということなのだ

ろう。そして、おそらくはこいつが最初から船に乗り込んでいたのだ。

「このときを待っていた！」

サイズが小さいため甲高い声になっていたが、それは確かに男の言葉だった。

服は同時に拡大縮小するためなのだろうが、顔を覆うマスクと一体化したボディスーツを着ている。そのスーツのデ

ザインからうかがい知るというわけにはいかなかったが、明らかにCIM08の一員。

「害虫は駆除しなければ！」

ころねは素早くポシェットから銃を抜いたが、敵はそこは予測していたようだ。それこそある

の昆虫の羽ばたきの速度にも等しい素早さでフロアの天井の隅へと飛んでいく。動き出しなどは、瞬間移動したようにしか見

なかった。

「速いだけなら……！」

純也は手をその男の方に向けた。そのままマナを使い、男を周囲の空間ごと拘束しようとする。

が……。

「っ……え？」

純也は困惑。

マナがうまく制御できていないのだ。

「どういう……」

感触(かんしょく)をつかめずにいる異世界人を見て、ノニモラが走り出す。ノニモラも後を追ったが、異世界人はさらに速く、

そして大すかった。ノニモラの手を逃(のが)れ、換気窓(かんきまど)から異世界人は外へ。ノニモラは階段の踊(おど)り場(ば)で地団駄(じだんだ)を踏

だ。

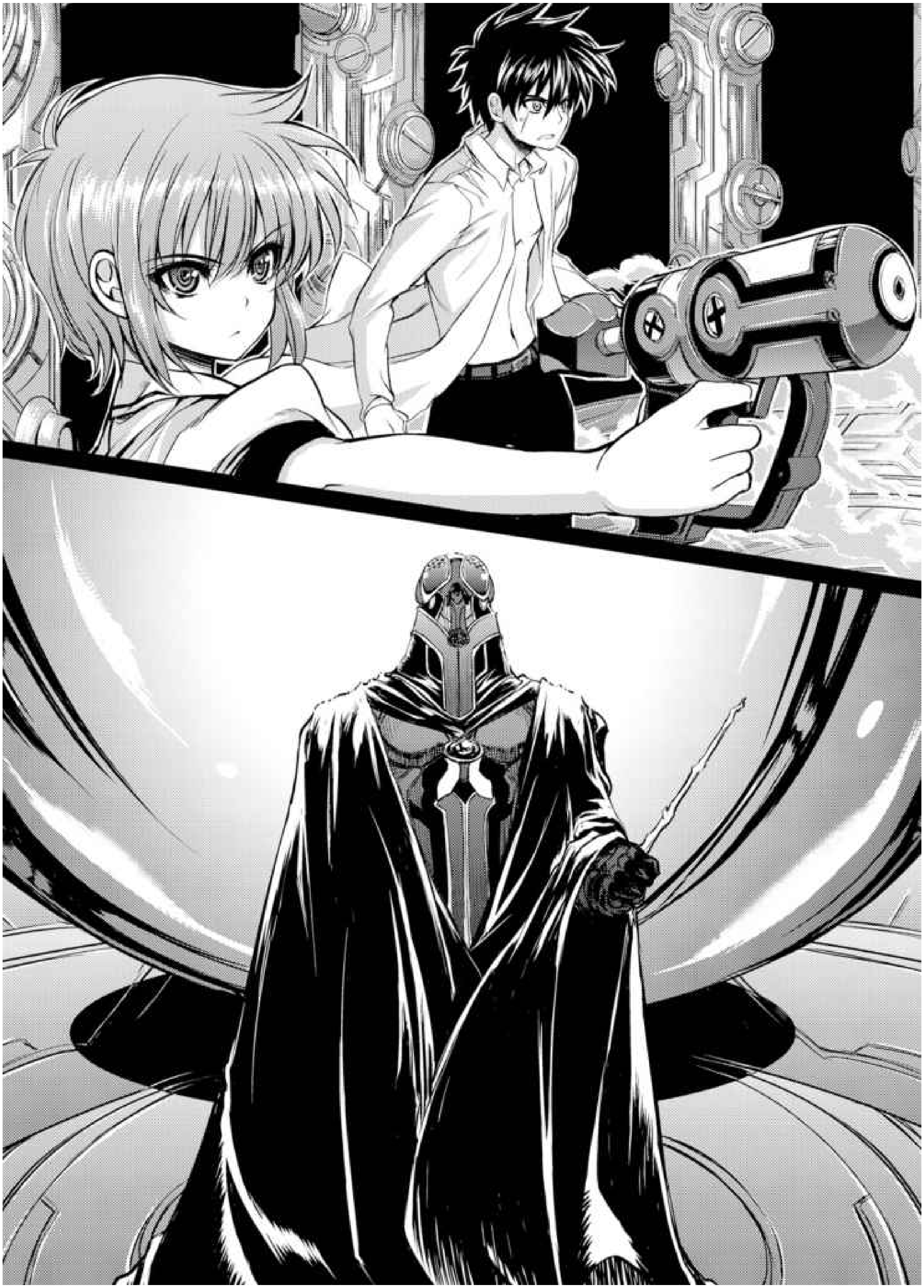
「逃(に)がしちゃったぞ！」

「すまない。うまくマナが使えなかった……」

後から階段をやってきた異世界人が言う。

「おそらくは、この地のエネルギー総量が少ないせいでしょう。異世界人さんの使えるエネルギーもこの地ではさ

い。そのギャップに対応できていないのです」



ころねが言った。
「ねえ、取れちゃったよ。どうするの？」
けなが聞いた。
それには、長老が答える。
「大丈夫……とは言い切れないが、ひとまずは問題あるまい。魔導士の技なら誰でも使えるだろうが、皇室の
なければ、無数の力で応えない」
「それなら、悪用される事態にはならずに済むだということか……。いや、CIM08が何を企んでいる
のかはわからないけれど……」
阿呆丸がそう言ったが、その時、けなに入った緊急連絡が思考を中断させた。
自分の端末で鳴る緊急のサインに、けなが「あ」と声をあげる。
「村の大人たちが、面白くて連絡を入れるのを忘れてた……。おじいさまからだ」
けなが端末を取り出し、通話を開始すると、即座に応答があり、悲鳴のような声が聞こえてきた。
《陛下、良かった！　ご無事で！》
近衛騎士団の重鎮、結城乗次の声だ。
「おじいさま、ちょっとうるさいよ。あのね、船がいきなり落ちちゃって……」
けなは説明しようとするが、それを遮って、大声で泣き出さんばかりの声をあげる。
《それよりも……いや、それも大変ですが、陛下ご無事で……！》

それから健康状態の説明をはじめた。

それを聞いていた純也は、先程(さきほど)自分が口にした「最悪の事態」とやらが存在するかもしれないことを知った。

○

マーライの一族の島に差しかかったとき、ヒロシはバイザーに警告を見て取り、マリンに異常を告げた。

「最悪、こりゃちょっとまずいことになった」

「何かあったね？」

「フィールドで周囲を覆われてしまっている。これはこのスーツの探知機能が死んだ。説明すると長くなるが、敵によってエネルギー切れを狙(ねら)われている」

「マナがあるようだから、私が飛ぶ」が、ここまで運んでもらったことに感謝する。一応私は無事だった

マリンは離脱してヒロシから離(はな)れた。そして、ヒロシに聞く。

「ということは、近くに敵がいるということなのだろう？」

「その通り。あんたが魔力で呼んだ奴(やつ)の仲間」

それを聞いてマリンの顔色が変わった。

「ならば、こちらにとっても敵。そちらの不足はこちらで補う」

「そう言ってもらえるとありがたい……。、前方に注意してください、先生」

ヒロシはバイザーに映った情報からエネルギーのありかを見つけ、それをマリンに告げた。マリン

それを目視したのか、うなずく。

そこには飛行艇が浮(う)いていた。皇帝(こうてい)が所有していたものと同じサイズか、個人所有できる限界の大きさに近いだろ

う。が、それが市販(しはん)されているような量産品ではないことは外観から見て取れた。何かを隠(かく)すかのような黒(くろ

りのそれは、はっきりとわかる装甲を外部にさらしていたのだ。

「CIM08、そいつが奴の組織名だ」

ヒロシは苦々しくその名を口にした。

「マナが薄(うす)く、エネルギーもそれほどない。やれるかは不確定、場合によっては退却」

マリンは目に怒(いか)りの色をはっきりと浮かべていたにもかかわらず、そう淡々(たんだん)と口にした。

こいつは大丈夫、とヒロシは思う。

「最悪の場合、シールドで強引に叩(たた)いてくれれば、俺(おれ)も自由になれる。そうなれば、まず負けることはない」

ヒロシの言葉に、マリンはうなずいた。

「心得た」

「こちらもエネルギーの続く限りはやってみる」

ヒロシは飛行艇に向かって行こうとし、ゲージのエネルギー残量を見て愕然(がくぜん)とする。減りがいつもより早

「何だって……」

原因を探る。それは、やはり黒騎士にあるようだった。マナ抜けだけでなく、独自のエネルギーユニットを
しているらしい。それはブレイブスーツと同系統である技術と思われた。それがスーツのエネルギーを
しているのだ。

「まずい……。済まない、下がる！」

ヒロシは叫(さけ)び、スーツのエネルギー切れによる死を避(さ)けるため、一気に眼下のジャングルへと退避した。そ
こであれば、少なくともスーツを解除し、姿を隠すことは可能だ。

――スーツと同じ技術を使っているということは、USDの手によるものか……。

遠ざかっていくマリンに申し訳なく思いながらも、ジャングルにヒロシは降下した。

○

ヒロシがジャングルに降下した後、マリンは黒騎士との戦闘を開始したのだが、これを見ていた者はヒロシだけ
ではなかった。

彼(かれ)らはマーライ村ほど近い地域で戦っていたのであり、それは地上からも見て取ることができた。

「黒騎士、あっちに飛んでったぞ。マナはほとんど感知できないけれど、ノニモラは分かい良」

ノニモラは黒騎士を指していた。奪(うば)われた妖精の宝玉の一枚を追って、物置の外に出てみたが、どうやら手遅(ておく)れだった
ということらしい。

「あの船が奴らの手に渡っているってことか……」

[illegible]試し（ため）に衝撃波を使ってみようとマナを手に集中させるが、どうにもうまくいかない。まだこの地のマナの希薄（きはく）さとエネルギーの少なさに慣れていないのだ。

「[illegible]っていうのが攻（せ）めてきて戦争が起こりそうだって……」

[illegible]けながら[illegible]うように[illegible]。

「状況がつかめないことには……。それに、あの戦っているのは誰なんだ？」

[illegible]をつぶやくと、ころねが[illegible]を差し出して来た。[illegible]は[illegible]ったため、すっかりご無沙汰（ぶさた）になっていたアイテムだ。

「[illegible]」

「[illegible]（きた）[illegible]んからです。どうやら、彼女は状況を把握（はあく）しているようで」

ころねの[illegible]だった。[illegible]ゆうの[illegible]いる[illegible]ら、ほぼ挨拶抜き（あいさつぬ）きで現状を説明してくれる。

《[illegible]みっつ。[illegible]の今のところ[illegible]な、ノニモラ、そしてどうやら戦っているマリン、[illegible]》

「彼はどうしてCIMO8と戦っているんだ？」

《CIMO8が[illegible]の先遣隊（せんけんたい）を潰（つぶ）した。ブレイブが彼を助け、トップ同士の話し合いで和平を模索（もさく）しようとそちらに向かったんだ。ところが、またも妨害（ぼうがい）されたというわけでね、今ブレイブからの[illegible]が途絶（とぜつ）したところだ》

「状況は最悪な……。情けない話だけれど、こちらも[illegible]の[illegible]枚を奪われたところだ」

《そりゃあ……えらいことになってるよねぇ。だけど、戦争はまだ起きていない。緑の森林地帯の向こうに海岸
が控えていて、彼の女王のお父上と話し合いをしつつ、なんとか均衡を保っている地上の艦船との戦闘を控えている……
というところだ。これが要点

「できる限り、僕も早く戻りたいけど、どうやらこちらのマナ量では転送でそちらに戻ることができ
ないんだ」

《なんとかマリンを連れてこちらに帰る方法を探しておくれよ。楽観はできないんだ。CIMO8が
を潰したと言ったけれど、こいつはどうも君と同じ能力の持ち主らしい》

「僕と同じ？」

純也は驚いて声をあげる。

《ああ、持ち去られた君の細胞を使って、普通の人間を魔王化することに成功したらしいよ。そいつが誰のコント
ロールも受けずに単独で艦隊とにらみ合ってる》

「CIMO8は戦争を起こしたいのか？」

純也は声を荒らげる。

《そういうことなんだろうね。だけど、背後には何か別のものがありそうな雰囲気があるよ。そ
の……CIMO8自体の内部に対立があって、人類の殲滅を狙っている奴がいるとかって。話しかも、新しい魔王
っちの側に味方しているらしい。どうだい、私もびっくりの大きな話の要点

「僕がジャングルをさまよっている間にそんなことになっていたのか」

ＣＩＭＯ８がジャングルに紅光を落としたことが判明ったことはどうやら間違いない。
「じゃあ、今は、彼女を助けて……」
紅光は空を見上げた。
しかし、機械兵とマリンの戦闘は、すでに決着がついていた。マリンは気を失っているのか、機械兵のハッチ内で浮遊したまま吸い込まれていくところだった。
「すべて後手に回っているってことか」
紅光は苦々しげに言った。
機械兵らは、マリンと入れ替わりに、何体かがこちらに飛んできていた。

○

一方ヒロシは、ジャングルに降りた後、機械兵らはかなり距離があることを確認してスーツを解除していた。
「ち……。どうしたらいいってんだ。どこまで使えないんだ、こいつは……」
思わずブレイブスーツに愚痴をこぼす。
と、それに返答があった。
「そいつは済まなかった。だが、まだ方法はある」

「え？」

一瞬、スーツの要素である腕輪（うでわ）が話したのかとも思ったが、声の方向を探ったヒロシの顔面が硬直（こうちょく）する。

「いろいろと勝手なことだとは承知している」

ジャングルの間から現れたのは、賢人（けんと）すなわちこの一件の黒幕と目されるUSDだったからだ。

「くっ！」

ヒロシは慌（あわ）ててマナ球を放とうと身構えるが、マナが周囲に集まってくれないことに気づく。そのことに驚き、また、恐怖（きょうふ）を感じもするが、賢人の思いの外落ち着いた様子を見ていることに気づき、恐怖の感情を抑（おさ）え込（こ）むことには成功する。

「だから、あんたは、俺の敵なのか、味方なのか……」

「そこをはっきりして欲（ほ）しいかい？　だが、それは今や私にもわからない」

敵対しないことを賢人は言った。それがこれまでの敵の彼の態度とは違うことにヒロシは気づく。

「あんた……どうしたってんだ？　あいつを復活させた時は、俺のスーツを解除した。だが、今回は俺が戦うことを許した。そして、今、俺の前に出てきた。何をしたいんだよ、一体」

ヒロシが声を荒げると、賢人はその眼鏡の位置を直し、冷静さを取（と）り戻（もど）すと、話しはじめた。

「あの一件は、私が造ったものだ。だが、今はザワンが乗っている」

「そいつがどうしたってんだ？　あんたが裏切られたってことはもう聞いた」

ヒロシは話を遮った。

「言いたいことがあるなら、さっさと言ってくれ！　そして、さっき言った通り、もしあの大ところを落とす

「あるなら、教えてくれ！」

ヒロシは憤怒を爆発させた。

と、それを遮るように賢人が返す。

「ザウンは〈光の王女〉を〈異世界〉に渡そうとしている」

「……だからどうした？」

「彼がその力を使って、何が起こるのかは私にもわからない。だが、それが何なのかは、おぼろげなが

らわかっている」

「つまりなんだって？」

「異世界の力は、異世界人すべての意識が封じ込められたものだ。それを解放しようとしているのだ」

苛立っていたヒロシが、一瞬動きを止めて考え込む。

「……そいつがどう事実なのかってことを理解できないのは、俺が鈍いからってことではないだろう

さ」

「その結果がわかりにくさこそが、ザウンが利用したものだ。彼の甘言によれば、魔術の力の効果をさらなるも

に繋がるのだと」

「相変わらず回りくどいぜ。そこには面倒な理論がいろいろ待ってるんだろうが、要するになんなんだ？

「異世界人の中に〈光の王女〉の力を使わせないようにしたい」

そう告げられたヒロシは、それを鼻で笑う。

「それなら大丈夫だろうさ。あいつはそういう男じゃなかった。それに逃げたいなら、さっさとあ
の船で逃げればいいだろうに。あんたが造った船、スーツと同様の機能が可能なんだろうよ」
「もちろん、船は機能を作動できるようにしておいた。だが、そうするわけにはいかない」
「そりゃ、何でだよ！」
「人質を取られている。そういうことをするのだ、ザウンは」
男は表情を強ばらせた。
「あんたにそんな事情があったとは思ってもみなかった。で、そいつを俺が助ければいいんだな？
ここじゃ確かに、ザウンの目が届かない。俺に頼んでることはわからねぇってわけだ。で、人質ての
は、誰？」
ヒロシは、苛立ちを隠そうともしない態度で言った。
すると男の表情に、やや逡巡が見えた。
「何だってんだ？ その女のせいなのか、あんたが大変なのは？」
そのヒロシの剣幕に圧倒されたように男は言った。
「彼女、俺の娘なんだ」
「……え？ そりゃあ、俺が見捨ててしまったあの女のことか？」
驚いてヒロシが問う。
男はうなずいた。

「そうだ。魔王を倒した後、あの装置を調べた。その結果、回路は魔王が倒された際、ザウンの意思で自壊するシステムが組まれていることがわかった」

「何だと！　何て馬鹿なことを！」

ヒロシが納得の顔でそう言うと、盗賊の女は悲しげに首を振った。

「つまり、最初からそういう意味の可能性はなかったのだ」

「あんただって、仲間の未来は見えないがな……いや、そうだ。そもそも、そんな風に最初から人間じゃないような奴が、どうしてそいつを信頼できる？　そもそも最初から危険な存在なんだ。そんなのが死ぬなんて最初から覚悟していただろうに……！」

そう言っている途中で、ヒロシははたと気づいた。

盗賊の女の心情を想像した。確かに、他人の死を案ずるのは不安なものだ。例えるならば、自分のゆう子を気遣う時と同じようなものだと感じられる。

「ちょっと待ってくれ……あんた、まさか……」

ヒロシは首を振った。比べた男が、確かに妖艶な雰囲気があった。

と、盗賊の女はゆっくりとうなずく。

「私は、あの人のことを案じている」

盗賊の女はそう言った。

それでヒロシには人間の運命の態様、合点（かてん）がいった。が、それだからといって納得（なっとく）できるものではない。

「それが、つまりあんたの寿命ということか。だが、そうだったらどうしたってんだよ。あいつが人間界で次に何をしたか、あんたは見ていたはずだ！　だからこそ、今度は俺のスーツを取り出せなかったんだろうに！」

ヒロシはわめく。

と、いきなり人間の姿で頭を下げた。

「頼む」

「え……」

思わずヒロシはその勢いを止めてしまう。

「頼む。あいつを止めてくれないか？　たとえ死ぬとしても、あいつの選んだこととして殺してやりたい。ザウンに殺されるのでなく」

ヒロシは言葉に詰まる。

「か……勝手なことを言うんじゃない……！　あんな残忍（ざんにん）な……。自分の意志で悪魔になったに決まってる……。あれをするために……。それを……それを……」

しかし、考えてみると、人間の望み自体が分かしたかったことでもあった。

そして、何より、人間の感情を出して頭を下げている。

ヒロシは混乱していた。が、ヒロシの中の何かがすでに答えを出していた。それは何人にも出せない答えだ。
ろうとヒロシにも見えてきていた。それまで何のようになろうと思っていたことの多くが、た
が、この時の自分の進むべき道をはじめて自分で見いだせたような気がしていた。
「殺すんだぞ……。場合によっては」
そう言ってヒロシは息をのんだ。
「それでも構わない。彼が負けて死ぬのは、彼にとっても望むところだろう。そういう奴だ、あれは」
「だが、今のスーツではかなわないかも知れない。少なくともザウンの入れ知恵(ぢえ)があったなら……」
「大丈夫だ。だから、手があると言った。機能を解除しよう。それがあればなんとかなるはずだ。そして、はスーツの自己修復機能に従ってくれ」
自分の体内の戦いの話になり、一段とヒロシの頭が冷(ひ)えてくる。が、それでもヒロシは決意を変える必要はない、と覚悟を決めた。
「それで、彼等はどこにいる？」
ヒロシの質問に、異星人は眉(まゆ)をぴくりと動かした。
「地球軍の主力部隊と対峙(たいじ)しているはずだ。地球軍に言うことを聞かせるための材料にしてね。自国の首都の虐殺(ぎゃくさつ)を見せる。首都を襲(おそ)わせると言えば、十分脅(おど)しにはなるだろう」
「そいつが、ザウンのやり方だと言っていたな……」

ヒロシはブレイブのスーツを纏う。そして、異次元人のスーツ。数十秒間待つ。異次元人、その遺伝子コードをスーツの情報に書き替えてそのまま変換装置をいじりはじめる。

「しかし、パワーアップできるなら、どうして自分の船でなく、自分の方に向かえと？」

「あの船はかなうかどうかは怪しい。それに、ザウンはやはり戦力を脅迫の材料にしてくるだろう。それなら、自分も含めて、戦闘能力を削減する方がいい」

「納得した。だが、間に合うのか？」

「既に技術は施しておく。本体に近づいてマナ濃度エネルギー量が一定程度になったら使ってくれ」

「わかった」

異次元人はスーツへの処理を終えた。そして、ヒロシにうなずいて見せる。

「よろしく頼む」

「ああ……。もちろん、あんたのことは許さないけどな」

ヒロシは飛んだ。後は見守る。ザウンの戦闘機体の観察も既に終えていた。そしてマリンの姿はない。落とされたわけではない。マリンを捕えたか、あるいは、交渉に入ったのだ。

○

「わざわざそれを私に伝えてもらえるという嫌な予感について聞かねばならんな」

マリンは自分の置かれた境遇を恥じてはいたが、それでも毅然として敵の前に対峙した。

「厚意とは思ってもらえないかね？」

そう言ったのは、ザウン。底の浅い大きなバケツ型のクッションに大人しく収まっている。

応接室のラウンジ。マリンはザウンの前に置かれた椅子に座っていた。自由を奪われているわけではない。傍から見れば、大人がくつろいでいるだけの光景だ。

しかし、その関係は緊張していた。マリンは敗北したが生き残され、この船に招き入れられたのである。マリンにとっては屈辱だが、それで絶望したり自暴自棄になるような男ではない。ザウンはそのことを見透かしているかのようだった。

「だが、我々はそれを、真の和解をもたらす方法と考えている。軽々しく使えるものではない」

マリンはザウンのクッションに置かれた羅針盤の上の杖を見た。一見するとただのステッキだが、それが特別なものであることはマリンにはわかった。

「そちらの宗教はそうなっているとは知っている。では、真の和解はどのような状態だと思っているね？」

ザウンは聞いた。

「相互の理解と思想の和解、平等は何度も叫ばれただろうが、我々はその先を目指している」

マリンは答えるが、それにザウンは反駁する。

「それはすでに達成ているだろう？ 俺達一般に解放ている。それとも、何者も長く居すぎたことの
みがあるのかね？ 因果の打倒という悲願の解放な」
「それも達成してはあるだろう。だが、根本ある理想としては違う。我々は永劫を手に入れる。それこそが
の悲願の解放」
「つまり？」
「我々は魂の存在を信じている。因果の作り出した神の存在を主張するそれでなく、真の悲願の魂」
「死後の世界の存在というところかな？ 無期限というのは、宇宙の始まりも物質的やあないかね」
肉体を失い、た物体をザワンはした。
が、落ち着いた態度のマリンは崩さなかった。
「そう思ってもらっても構わない。、事実死を恐れぬ者たちも多い」
「死そ解放と？」
「因果の死を与えるべきだともね。そして、無貌の力がそれを与えてくれると信じている。つまり
それがあれば死と自由を操れるという考えだ」
マリンは断言した顔で言った。確かに因果の多くがそう考えているほどに、因果によって何者も縛り付けられて
いたという恨みは大きい。
「だが、時計はそうは考えていないという顔」
ザワンはそう言った。マリンはうなずく。

「その通り。均衡の力で破壊を望むのは間違いだ。まして、人類がすべて魂抜けの存在になるべきだなどと」

「しかし、ね」

ザワンがもったいつけるように言葉を切った。

「しかし？」

「しかし、我々はそれを本能として知っている。つまり、人間は均衡が続けば幸福になれることを」

その物言いは、マリンにも何かを感じさせるものがあった。

「……真実なのだと？」

まさか、というようにマリンは言った。

しかし、それを当然のことのように、ザワンはゆっくりと説明しはじめる。

「その通り。なぜなら、均衡の力こそが、人類の魂に他ならないからだ。その力を人間は自分たちの思い通りにしようと企んでいる」

マリンはその言葉に即答しなかった。考え込んだ後、すぐに首を振る。

「君は何をしようというのだね？　君自身の個人的な目的ではないのか？　だとしたら、私が聞くべきは、君の真意だ」

ザワンは、そう言われてクッションから立ち上がった。

「なるほど、私の真意、ならば、私の本体を改めて、君は把握しなければならないね。私は、君たちの言う存在だ」

マリンは驚きに眉を上げた。

「ほう」

しかし、その口調は半ば疑うような色があった。それにも構わずザウンは続ける。

「そして、純粋な力そのものが私の種族の魂。だから、私は、解放を望んでいる。つまり、我が種族の解放だ」

「……それを解き放つと、何が起こる？」

慎重にマリンは聞いた。

その言葉が、ザウンの本当の真実かどうか、探ろうというのだ。

ザウンが落ち着いた声で言う。

「真の変革だ。人の心の奥底で、誰もが望んでいるであろう変革だ」

「変革」

マリンにしては珍しく声を裏返していた。

それこそが彼女の心の奥底に抱いていた思いだったからだ。

「同時に人間の、真の魔力の、純粋な繋がりを持つ……そのような未来を君は望んでいるのだ。そして、その可能性の純粋な力の片鱗を見出だそうとした。違うかね？」

ザウンの言葉に、マリンは無言だった。反発していたのではない。人の心の奥底を見透かされているとしか思えなかったからだ。

そして、ザウンの語気が高くなる。

「純粋な力の、人の望みを叶える……そう考えてもらってよい。解放されたなら、我が種族の魂と人間の魂は響き合い、人間を

し、魔術的な……いや、純粋な魔力を手に入れる。自由に言葉を交わし、そして再び自由に言葉の魔術の理想は、人の精神と肉体の再生は、人はなかったたか

な？　それこそがここにある。絶対の力の解放、全ての解放なる。それは、人と心で結び合う真の救済、それは君たちに新しい進化をもたらす」

「新しい……進化……」

マリンは激しく心が揺れるのを感じていた。

目の前の人は、まさに預言という悪魔のようだった。望むことを引き出し誘惑する。

しかし、マリンはまだ冷静でいられた。

「……まだ時間が必要だ。それを理解するということは、性急にすべきではない」

知らず浮かんでいた額の汗をぬぐう。

長い航海であったからこそ熟考していた。人と人がわかり合える。理想世界は夢想に過ぎないと思っていたそれに、手が届くと

われては、そこに震えるものを感じないはずがない。

「いや、早急にすべきだと思うが」

ザウンは首を横に振った。

マナスクリーンが映し出される。

そこには、対峙する自国の潜水艇部隊、魔人、佐倉麻啓の姿があった。

「な……！」

マリンは絶句する。

「果たして、自国の兵士達は君の指示に従うだろうか？」

ザウンは面白そうに笑った。

この世界の中で、人間と魔族が共に生きることが本当に可能か、とマリンは自問した。

そして、そんな存在を迎えるのだろうか？　と不安になる。

しかし、マリンは虚勢を張った。

「従うとも。それに、時間をかけて価値観を変える者もいるだろう。そうそう戦端が開くと考えるのは……」

その言葉を遮るように、「その通り」とザウンはうなずく。

「そうだ。そうそう戦争になるものでもあるまい。だが、動揺したということは、君もそれほどには人間を信用していないということだ」

「……なぜ、このような事態に及んでまで魔族の力の解放を望む？」

苦しげにマリンは聞いた。

「人間の本当の何を望んでいるか見たいからさ。戦争が起こってしまうことについては、多少の偶然や人為的なものが存在した。だが、人間本来の欲望を望んでいることを実現したなら、何が起こるのか？　それは見ておかなければね」

ザウンは笑った。

「……興味、だけだというのか？」

愕然としたようにマリンが問う。

「いいや、もっと選択肢はあるさ。だが、まだ君たちには理解できない。さて、賭けてみるといい。時はもうあまりない。何もせず、宇宙の戦闘圏を滅ぼすか、残りの力を使って世界平和の願を叶えてみるか」

やや芝居がかって、ザウンがそう言った瞬間、マナスクリーンの映像に動きがあった。潜水艇数隻が、に向けてミサイルを撃ち出したのである。

「いかん！」

はっ、としてマリンは叫んだ。

そのミサイルの正体をマリンは知っていた。潜水艦から撃ち出されたそれは、対空ミサイルや対地ミサイルと違い、長い煙の尾をどこまでも引いて、遥か高空へと昇りはじめた。

「ほう。あれは、太古に捨てられた兵器だな」

小馬鹿にしたように、ザウンは言った。

「核だ……」

絶望したようにマリンは言った。

弾道弾。宇宙まで上昇し、そこから落ちてくるために、撃墜が困難、地上施設からの攻撃が不可能なミサイルである。その弾頭は核。直撃ならば、マナの防御用シールドすら打ち破るだろう。

「人魔の、対抗策として撃ち出したものがこれか。[illegible]巡り合わせというべきか、人類の業というべきか」

虚無的に笑うザウンに、マリンは無言で手を伸ばした。

「何がな？」
この悪魔的な決定に鼻を鳴らす。
「とぼけるな。もういいだろう。答えを口に出したくはないのだ」
マリンは詰め寄る。
にい、と歯茎をむき出して笑った。
「さて、次は何を望んでいるだろうかね？　そして君は何を望んでいるか？」
そう言いながら、魔法使いは魔法の杖を口に挟んで手渡した。

○

「間に合ってくれよ……」
ヒロシは急いていたが、それほどの速度はスーツには出ない。
《まだ動きはないから……大丈夫って、え？　何か飛翔体ミサイルを発射した？》
ゆう子の慌てた声が通信機から聞こえてきた。
「ゆう子ちゃん、それはどういうこと？」
《わかんない。お姉ちゃんからの情報なんか、ロケットみたいに上に飛んでいくミサイルだって
「核戦争になるのか？」

《それはまだわかんない。こっちはお父さんからの命令はまだ出ていないけど……》

「早まらないでくれよ。ちょいとあの魔人を倒して、こっちだってあんなのばっかりじゃないって判ればそれでなんとかなることもあるだろうさ」

ヒロシはマナの濃度と最大に満ちたエネルギーの量を確認する。

「まだ転移するには足りない……」

そう気付いた時、通信機の向こうからゆう子の悲鳴が聞こえてきた。

《お姉ちゃん? 何? 何があったの?》

「ちょ……ゆう子ちゃん、どうしたの?」

ヒロシは問いかけるが返事はない。

《お姉ちゃん! お姉ちゃん! 怖いよ、助けて!》

そんな叫びだけがヒロシの通信機から聞こえてくる。その叫びの合間から、緊迫した声が漏れ聞こえる。

「何が起こっているんだ?」

通信機の叫びと、返答があった。混乱があった。

《彼女はパニック状態から替わった。どうやら通信相手の移動があった。もうすぐ救援が来るはずだ。気を確かにして見ることだ》

彼女の声はいつもと違う緊迫感が漂った。

「待ってくれ、そんな……。ミサイルが落ちたのか?」

ヒロシが聞く。
《それだったらまだいい。そんなものじゃない》
「何だって?」
《言うなれば、あれは悪意の塊だ。天から何かが降ってきたんだ。生命も物体も違う。悪意だよ、あれは》
いつもの悪意を持って回った現象。このときばかりは違うのではないか、と思える要素がある。
そして、映像がヒロシに送られてきた。
「おい、一体なんなんだよ、これは……」

○

「すでに言葉の一枚はザウンの手に渡っているだろうさ」
そう言ったのは、あの自分の身体を縮小できるCIMO8のメンバーである。
「そこに興味を示している……」と、なぜ彼は言葉の一枚を使わせようとしている?」
阿川は聞いた。
中空、CIMO8の彼、彼が作り出した数々の巨大な虫に変化されていた。カブトムシにも似たそれらは
らかな凶暴性を持って、阿川たちに対峙している。

その異空間の向こうの空に、ザウンの飛行艇が浮いている。そこに、蓬莱の玉の枝を届けた後、彼らを追ってくる者たちをぶんと足止めしていたのだ。

「そうだ！　うっとうしいぞお前、ここを通せ！　蓬莱の玉の枝は悪い心で使うと危険なんだ！」

ノニモラも同調する。大宇宙に浮かぶ、少なくともザウンの船に近づこうとはしていた。が、マナの濃いエネルギーの不足のせいで、いつものようには飛べていない。

「そう焦るな。ところで挨拶が遅れた。俺はCIMO8。コードネーム・モロック」

、今、モロックと一体化した彼は、その身体のサイズを人間大程度ほどに縮めていた。

「……ご挨拶ありがとう。が、今は質問に答えてもらいたいね」

「そんなもの、すぐにわかるが。まぁいいだろう。まぁ、簡単に言えば、世界征服したいのさ」

「……それだけか？」

「人間の心はそういうことだ。真実はごちゃごちゃと考えている奴もいるが、結局世界征服しないと進歩しない。にはとてもいい世界になるぜぇ」

にやりとモロックは笑った。

「なんか、あいつ、気味悪いぞ」

ノニモラは嫌悪感を顔に浮かべた。

「CIMO8ってのは、結局のところ、どこか狂っているのかね？」

阿九はつぶやいた。そして、身構える。

「さっきはうまく出来なかったが、マナ妖精もなじんできた。次はここを通過させてもらうぞ」
そう言った異次元モロックはあざ笑った。
「できやしないさ。エネルギーってやつのエキスパートだぜ、俺は。一人ばかりでも本来ものか。
に身を置き、俺の体の大きさのサイズを変えることで効率よくエネルギーを使える。それがどのような意味かわかる
か……」
長らく自らの能力を自慢(じまん)しようとするモロックだったが、それを通過する方法があった。
「あーちゃん！　大丈夫よ！　約束やんが……！」
けながら下から大声を出していた。それまで、ずっと宮殿(きゅうでん)と接続をとっていたのだ。
そのただならぬ様子に、異次元モロックの顔色が変わる。
「何をしたんだ、お前……？」
異次元モロックに冷たい目を向けた。
その目だけで、異次元で自信にあふれていたモロックはひるむ。
「う……。そ、そいつは、一見の通さ……。へ、へへ……」
。
「あれは何？」

緋村が聞いた。軍事境界線の向こうでは、遠くの海からロケットが発射されたとしか思えない煙が立ち上っている。
「弾道ミサイルという奴です。軌道まで一度昇って、降ってくるんです。大丈夫です。落ちてきたところを叩きますよ。すでに迎撃指令が出ています。核なければ爆発そのものを押さえ込むこともできますし」
「核なければ？」
部隊の軍人の一人が説明した。
緋村が聞くと、彼はうなずいた。
「核あれば、マナで押さえ込むことはできませんからね。しかし、核はすでに廃棄された技術です。使われているわけがありません」
「そうだといいがな……。だが、これで戦争ははじまってしまうな」
落胆したように緋村が言った。
「それは避けられなかったのかもしれませんね」
そう彼が同調した時、緋村はふと胸騒ぎに似たものを感じた。
——なんだ、この嫌な予感は……。
部隊の隊員も、そこにいた誰もが、その嫌な予感を共有していたようだった。
「おい、何か感じたか？」
緋村が聞くと、将校も逆にそう返してきた。

「はい。何か嫌な感じが……」

「魔術的なものではないですね。不思議です。マナは何も反応していない」

「上から、ですかね？」

一人が空を見上げた。

つられて私も窓際（まどぎわ）に行って空を見る。

雨が降ってきていた。

――雨？　そんな状態は無かったし、この地域の天候はコントロールされているはずではなかった

か……？

が、その水滴（すいてき）と見えた粒（つぶ）が地上に落ちたとき、その場所に炎（ほのお）が燃え上がるのが見えた。

「……な！」

絢は目をこらす。

炎ははっきりと見えたわけではなかった。その炎は色もなく、陽炎（かげろう）がゆらぐように空気を揺らしただ

けだったからだ。

しかし、その炎はいつまでも消えなかった。地面を延焼（えんしょう）するかのように色のない炎がじわじわと

拡（ひろ）がっていく。地面の草や苔（こけ）が緑から黒へ、そして灰になって崩（くず）れ落（お）ちる。それが水滴の落ちた場所すべてで

こっていた。いや、もしかしたら空から降ってくるのは、炎そのものの粒なのかもしれない。

「ああああ……！」

見張りの兵が、前方を見つめて悲鳴をあげていた。彼の方へ目をやると、その視線が何をとらえているかがわかった。その色のない炎の雨が、この都市の中心部となった大聖堂の窓や、外壁を溶かしはじめていた。

「うろたえるな！　シールドを試せ！」

絢が叫ぶ。

が、それには悲鳴が返ってくる。

「すでにやっているんです！」

「……なんだって！」

雨は広い一帯に降り注ぎ、そこにあるものすべてを灰に帰そうとしていた。

「こ、これは敵の攻撃なのか？」

絢は知らず声を震わせていた。

「わかりません……。ですが、こんなことがあり得るわけがない……！」

赤くも青くもない炎が、周囲のすべてを焼き尽くしていく。やがて聖堂そのものも崩れ落ちようとしていた。轟音とともに、建物が崩れ、それが灰となって風に散っていくのが、溶けはじめた窓から見える。

絢の顔が恐怖にゆがんだ。

死に直面した恐怖によるものではなかった。

その色のない炎の雨。どうしてもそれが人の悪意にしか見えなかったからだ。

絢は身体を震わせ、その場にしゃがみ込んだ。

得体の知れぬ悪意にあてられてしまったかのようだった。

その光景を皆が見ていた。

見えない炎が空から降ってきて、街を、家屋を焼いてしまうのを。

誰もがそこに強烈な悪意を見いだしていた。

「天罰というものがあったとする。だが、誰もが望んでいたからこそそれは実在と感じられるわけは

だ。大勢が焼かれればただの不運だからな。つまり、これも誰かの心の反映ということになる。望みだの

だ。もちろん、君はミサイルの消滅を願った。そして、それは為し得た。だが、君は叶えてしまっ

た。自分自身の願いも。帝国軍は灰になれと願った者もいたのだろう」

ザウンは言った。

そして、その言葉が嘘でないことを、誰よりもマリンが感じていた。純粋な力の繋がりは、その力が

、実際に自分の願いを叶えたものだと理解できていた。

マナスクリーンには、悪夢の光景が映し出されていた。上空からは、夜の灰色の地上が描かれているように見える

しかし、そこはかつて街だったのだ。すべてが焼き払われ、瓦礫となった。夜の廃墟が一瞬

にして現出したのである。

過去の街は、絵に描かれる地獄の光景に似ていた。目に入る限り動く物は皆無。動いているものは風に舞う灰、崩れ落ちるコン

クリートの塊だけ。



「私は、私の物理的な視覚以外で、魔王を見ている」
マリンは絶望とともにつぶやいて、目の前の魔王を見据えた。
。
現在の[illegible]ガーゴモロックに操られる。
しかし、彼の脳裏には映像が、そして音声が映し出されている。けながら端末で検索しているのと同じ情報
りクリアな形で受け取っているのだ。微弱なマナをより高い精度で制御しているからこそ成し遂
られることだった。[illegible]マナの希薄な状況に慣れてきていた。いや、その情報の内容によって、
が[illegible]入ったのかもしれなかった。
《勝浦[illegible]りません！》
《[illegible]り終えると、[illegible]口に[illegible]》
《お姉ちゃん！　応えて、お姉ちゃん！》
《[illegible]明の敵[illegible]ありません》
[illegible]飛び交っている。
しかし、それの示している情報は、[illegible]とって重要なのは一点だけだった。
「つまり、[illegible]やっていた[illegible]死んだってことか……？」

低い声で、しかし思いの外静かな口調で阿見江也はモロックに聞いた。

「そ、そいつは、俺にわかるものかよ……」

無理に作った声であざ笑うような調子を加えようとして、モロックは失敗した。声が震えていることは、その場の誰にもわかることだった。

「お前の仲間に聞いているんだ。死んでいると思うか、生きていると思うか」

阿見江也はさらに質問を繰り返した。

「そんなことを聞いてどうしようってんだ？　そりゃあ、無事でいるわけがあるまい。数百の口が焼かれたわけだ。それに生きている者がいれば、連絡がすぐにあるだろうさ」

「それなら、そこにいた人は死んだとこう思うわけだ。で、それをどう思った？」

何故そんなことを聞かれているかわからず、モロックは答えた。

「な……何を言ってやがる。そりゃあ、俺は関係ないことさ。それに俺がやったことじゃない。俺の知る限りじゃ、そいつは、無数の力の顕現だってことだ。それの正体を聞いていただろうが、ありゃあ、つまり、異界の連中の望んだことを叶えちまったってわけだ。だから、俺のせいじゃない」

静かな口調で阿見江也は。モロックは段々焦りを隠せなくなってくる。そこに阿見江也はさらに詰め寄った。

「どう思ったか聞いているんだ。自分のせいかどうかは考えなくていい。そこでつまり、お前は何も考えなかったわけだ。本当のところは何も考えなかったってことだ」

「おい おい…… てめぇ、頭がおかしくなっちまったのか？ それだったらどうした？ そんなことについて考えてる奴がいるわけねぇだろうが。沢山の人が死んだらどう思うか、なんてよ……」

「いや、聞いておきたかっただけだ。僕はどういうわけか人を殺すってことに抵抗がある。いや、もっと言えば、誰かの死が他人に影響を与えることそのものがそれほど好きじゃない。それは臆病なんだってことでもいいさ。でも、それはどれだけ怒っていても、人を殺す気にはならないってことだった」

淡々と河原九言は言う。

それを聞いたモロックは、その先を予測したのか、緊張が極限に達したのか、それまで強がるかのように腕を組んでいたのを解き、一気に距離を詰めた。

「ご託はいいんだよ！ つまり、やろうってんだな！」

その叫びに、河原九言はあくまで静かに首を横に振る。

「やる？ 喧嘩ってことかい？ 初めから、そんな気もなかったけどね。まだわからないのかな？ 僕は純粋にお前を殺すに足る理由をなんとかひねりだそうとしていたのさ」

河原九言がそう言うと、周囲の空気が一変した。

そしてその次の瞬間、河原九言の表情は、誰も見たことがない、狂気と殺意を湛えたものへと変貌していた。

あとがき

毎度有りがとうございます。水城正太郎です。

今回から新展開ということで、続き物のスタートでございます。先の展開はまだまだ漠然としか決まっておりませんが、少なくとも今回は続きです。個人的な希望としては、あと数巻はある……といいかなぁ。いや、どうなるかご期待くださいませ。

もしアニメから入ってくださった方は、一巻からお買い上げいただければ、作品の内容がわかるようになっておりますので、この機会に是非アニメの続きから読みたいという方は、六巻からとなっております。そのパターンもよろしければ。

さて、その『いちばんうしろの大魔王』アニメの方ですが、DVD、BDとも最終巻まで発売されております。全部まとめて見るチャンスですので、お買い上げくだされば幸いです。

で、最近はだらだらと衛星放送を見ています。マイナースポーツも面白いのですが、何よりインパクトが大きいのが昔のアイドル映画。菊池桃子やおニャン子クラブなどが主演の作品です。どれも面

いるだけで、混乱してくる不思議な画面にあふれているのです。よく言われるアイドルの演
が上手とかそういうことではなく「アイドルさえ出ていれば何をしてもいいんだろ？」と言わ
ばかりのわけのわからない演出が多用されるところが、普通の創作を超越した何かを感じさせ
てくれます。あんまり多用したらいけないんでしょうが、いろいろ妙な感性が刺激されますね
え……。

それでは最後に、関わってくださった皆様、もちろん読者の皆様に感謝を。メディアミックス的な展開というと
ころですが、まだもうしばらく続きますので、よろしくおつきあいのほどをお願いいた
ます。

さてさて、まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください。……ファンレターのあて先◆

〒151－0053

東京都渋谷区代々木2－15－8

(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部　気付

[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
ハワイ旅行とか行ってました。あっちでは「モンスター」はじめエナジードリンクがブームでした。ハワイまで行ってそんな感想かよ、と言われてもそうなんだから仕方ない。あ、でも自然公園は最高でした。珍妙な格好の鳥がいっぱいいました。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT11

2010年12月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8